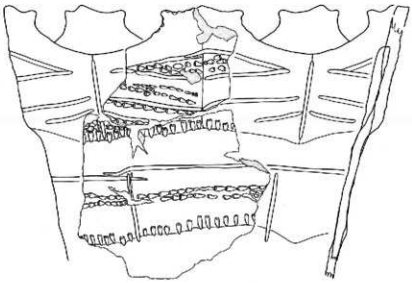
ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報12

青葉山遺跡E地点第3次調査ほか



東北大学埋蔵文化財調査研究センター
1999

「東北大学埋蔵文化財調査年報12」正誤表

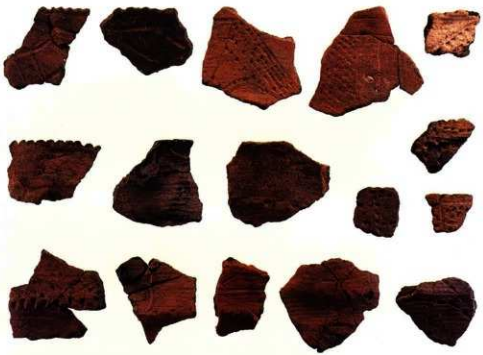
頁	行	誤	正
図目次	図61	「茅山下層式」併行	「茅山下層式」併行
25	5	1994年度	1984年度
27	15	東側	北側
27	15	西側	南側
31～32	図内説明	北側道跡による削平	北側道路による削平
31～32	図内説明	大学共同溝による攪乱	大学暖房管による攪乱
40	5	石器853点	石器1477点
46	30	くびれに挟まれた部分	くびれ部分
46	35	左方向	右方向
46	39	放射筋	放射肋
48	24	放射筋	放射肋
84	5	健作	鍬作
84	20	放射筋	放射肋
84	40	「鵜ヶ島台式」名称	「鵜ヶ島台式」の名称
94	英文説明	Chronologycal	Chronological
99	表11のNo.4	大石平ＩＩ	大石平Ⅱ
99	表11のNo.17	長七谷地ＩＩＩ	長七谷地Ⅲ
110	9	縄文土器2151点	縄文土器2152点
110	9	石器1956点	石器1993点
110	13	放射筋	放射肋
116	17	2151	2152
116	29	deside	decide
117	2	indecate	indicate
125	英文説明	Views	views
報告書抄録	発行年月日	3月31日	3月29日

東北大学埋蔵文化財調査年報12

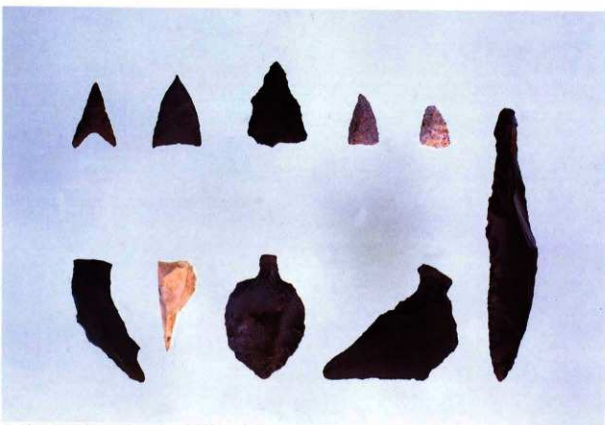
東北大学埋蔵文化財調査研究センター
1999

1．青葉山遺跡E地点第３次調査１号・２号竪穴住居跡全景（東から）

2．青葉山遺跡E地点第３次調査出土縄文時代早期の貝殻条痕文土器（１）



3．青葉山遺跡E地点第３次調査出土縄文時代早期の貝殻条痕文土器（２）



4．青葉山遺跡E地点第３次調査出土剥片石器（１）

5．青葉山遺跡E地点第３次調査出土剥片石器（２）

6．青葉山遺跡E地点第３次調査出土磨製石器・礫石器・石核

序

東北大学の青葉山キャンパスは、火山灰層が厚く堆積した中期更新世の高位河岸段丘にある。この青葉山段丘には、旧石器時代から古代までの様々な時代の人々の生活の跡がよく地下に保存されており、これまでに多数の先史時代の遺跡が発見されている。ことに、昭和59年には、附属図書館北青葉山分館新設にともなう発掘調査が行われ、10万年をこす貴重な前期旧石器や２万年前後の後期旧石器多数が発見され、旧石器時代の文化の移り変わりを知るうえでの重要な手がかりとなっている。

平成６年度には、この青葉山キャンパスで理学部自然史標本館の建設にともなう事前調査が大規模に実施されたが、この調査でもきわめて重要な成果がえられている。本年報は、主にこの青葉山遺跡Ｅ地点の調査成果を掲載した。このＥ地点では、東北地方ではきわめて珍しい約7500年前の縄文時代早期の集落跡が明らかにされた。２棟の竪穴住居跡や沢山の早期縄文土器、石器が検出され、集落の構造、住居の構造など当時の生活を知る貴重な手がかりがえられた。ことに、豊富な早期後半の縄文土器は東日本における重要な基準資料となった。

本年報に掲載した貴重な基準資料をふくめ、東北大学の埋蔵文化財調査委員会、調査室、センターがこれまでに刊行した10冊の年報に掲載された土器、石器、陶磁器、漆器、木器、金属製品などの重要な埋蔵文化財は6000点をこす。これらの資料は、市町村の博物館のかかえる埋蔵文化財に匹敵する量と質であり、その膨大な資料の保存と活用、展示、公開が、東北大学埋蔵文化財調査研究センターにとって重要な責務となりはじめている。

遺跡で発見される遺構についても重要な資料が次々とえられており、このような地下に埋没している文化財を今後どのように保存､活用していくのかがやはり大きな課題である。東北大学では、近年、施設整備が著しく進んでいる。整備を進めていくなかで調査された貴重な遺構、遺跡について、その保存と復元をとりこんだ施設整備、環境整備の方向と方法について検討、工夫することで、国民共有の財産である地下の埋蔵文化財と最先端の研究・教育の場との共生をはかることが可能であり、必要と思われる。

本年度の調査の実施、報告書を作成するにあたり、施設部をはじめ、理学部など関係の部局には多大な支援と協力を頂いた。関係各位に心から謝意を表する次第である。

埋蔵文化財調査研究センター
センター長　須藤　隆

例　　言

1. 本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが1994年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。
2. 報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。
   仙台城二の丸跡第15次調査地点（NM15）1995年3月1日～3月24日　藤沢敦・関根達人・菊池佳子
   青葉山遺跡E地点第3次調査（AOE3）1994年3月17日～10月24日　藤沢敦・関根達人・菊池佳子
3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが行った。
4. 本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、藤沢敦・関根達人・奈良（旧姓菊池）佳子が担当した。
5. 本文は、藤沢敦・関根達人・奈良佳子が分担執筆した他、青葉山遺跡E地点の出土石器については玉橋さやか（東北大学考古学研究室研究生）、同出土石器の使用痕分析については須藤隆と池谷考史（東北大学考古学研究室大学院生）が執筆した。本文執筆分担は、以下のとおりである。
   第Ⅰ章：藤沢敦
   第Ⅱ章、第Ⅲ章1、3、4、5(1)・(2)、6(1)、7：関根達人
   第Ⅲ章2、5(4)：奈良佳子
   第Ⅲ章5(3)、6(2)：玉橋さやか
   第Ⅲ章6(3)：須藤隆、池谷考史
   また、英文要旨については関根達人・玉橋さやかが作成し、阿子島香氏に校訂していただいた。
6. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる。
   松本秀明（東北大学大学院理学研究科）・相原淳一（仙台市博物館）・中村大（国学院大学考古学研究室）
   仙台市教育委員会・東北大学文学部考古学研究室
7. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡　　例

1. 方位は、真北に統一してある。
2. 図１と図２は、それぞれ国土地理院作成の、２万５千分の１地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、１万分の１地形図「青葉山」を使用した。
3. 川内地区の仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。
4. 遺物の実測図および写真の縮尺はそれぞれに示した。
5. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、東北大学埋蔵文化財調査年報を引用する場合は、年報１という形で略記した。

発掘調査参加者

青井恭子　宵山博樹　芦野徳松　芦野ヒデ子　阿部友衛　石井忍　石井岳彦　石井みゆき　石堂祐子
一野瀬昌寿　伊藤大介　今泉八重子　上野美子　内海紫　歌川亮恵子　梅沢洋史　梅沢みえ　大内孝子
大内松夫　大久保聡彦　太田すゑ子　太田はるよ　大谷基　大友泰子　大野太輔　大本麻美　荻原研一
奥田英津子　小関満知子　小野さよ子　小山久美子　織茂麻木子　金谷弦　神出浩弘　菅野春枝　菊地和江
岸本さち　熊谷宏靖　倉持恭子　栗山智行　河野正和　後藤俊一　駒場秀剛　古山友子　斉藤健　斉藤美穂
佐伯畤子　佐伯史子　佐々木陽子　佐々木好夫　佐藤厚子　佐藤ケイコ　佐藤純生　佐藤としゑ　佐藤とみ子
佐藤剛　佐藤鉄生　佐藤良正　澤田純明　塩谷慎介　篠原良子　庄司明美　進藤直子　菅原大助　鈴木貴美子
鈴木俊二　鈴木敬広　鈴木由美　鈴木ヨシノ　須田雅丈　勢藤力　高橋和子　竹内美江子　田中スエ
田中政幸　丹野健一　千葉あけみ　千葉直樹　土屋みどり　戸石健太郎　東海林俊彰　独古史恵　中嶋祐介
西垣仁史　西川尚子　西崎正彦　西原淳　能智公久　長谷川チエ子　針生せつ子　麺口優子　兵藤多佳子
半田隆義　廣田英一郎　福田清彦　藤田直行　増子竜寛　皆川万葉　武藤信子　森淳　森嶋康江　谷津ミツ子
山尾敏子　山川純一　山口拓　山館富士男　山本亮　横山東市　吉田幸司　隆翔杰　劉宏兵　岩竹美香
和田潤子　渡辺英恵

整理作業参加者

青井恭子　今泉八重子　内海紫　大塚玲子　後藤真希子　古山友子　庄司明美　白石浩子　玉橋さやか
千葉直美　独古史恵　平井真理

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会 (1994年度)

委員長	センター長　(文学部　教授)	須藤　隆
	川内地区協議会　(教育学部　教授)	木村力雄
	青葉山地区協議会 (薬学部　教授)	佐藤　進
	星陵地区協議会　(医学部　教授)	櫻井　實
	片平地区協議会　(金属材料研究所　教授)	鈴木謙爾
	文学部　教授	渡邊信夫
	文学部　教授	羽下徳彦
	文学部　助教授	今泉隆雄
	文学部　助教授	阿子島香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　助教授	飯淵康一
	施設部長	荻原久和
幹事	施設部　企画課長	花坂勝治

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会 (1994年度)

委員長	センター長 (文学部　教授)	須藤　隆
	文学部　教授	渡邊信夫
	文学部　教授	羽下徳彦
	文学部　助教授	今泉隆雄
	文学部　助教授	阿子島香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　助教授	飯淵康一
	調査研究員 (文学部　助手)	藤沢敦
	調査研究員 (文学部　助手)	関根達人
	調査研究員 (文学部　助手)	菊池佳子
	施設部　企画課長	花坂勝治

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

（平成６年５月17日　規第56号）

（設置）

第一条　東北大学（以下「本学」という。）に、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第二条　センターは、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査及び研究を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職員）

第三条　センターに、センター長、調査研究員及びその他の職員を置く。

２　センター長は、本学の専任の教授をもって充て、総長が命ずる。

３　センター長は、センターの業務を掌理する。

４　センター長の任期は、二年とし、再任を妨げない。

５　調査研究員は、本学の専任の教官をもって充て、総長が命ずる。

６　調査研究員は、センターの業務に従事する。

（運営委員会）

第四条　センターに、センターの組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組織）

第五条　委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備委員会各地区協議会の協議員　各一名

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干名

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は助教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第六条　委員長は、センター長をもって充てる。

２　委員長は、必要があると認めるときは、委員会の同意を得て、委員以外の者を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（専門委員会）

第七条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、専門委員会を置く。

２　専門委員会は、委員長及び次の各号に掲げる専門委員をもって組織する。

一　調査研究員

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干名

三　施設部企画課長

四　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

３　委員長は、センター長をもって充てる。

（委嘱）

第八条　第五条第一号から第三号までに掲げる委員並びに前条第二項第二号及び第四号に掲げる専門委員は、総長が委嘱する。

（幹事）

第九条　委員会に幹事を置き、施設部企画課長をもって充てる。

（事務）

第十条　センターの事務は、当分の間、事務局施設部において処理する。

（雑則）

第十一条　この規程に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

附　則（略）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（1999年3月現在）

委員長	センター長　（文学部　教授）	須藤　隆
	川内地区協議会　（文学部　教授）	安田二郎
	青葉山地区協議会（薬学部　教授）	大内和雄
	星陵地区協議会　（医学部　教授）	大井龍司
	片平地区協議会　（素材工学研究所　教授）	島田昌彦
	文学部　教授	今泉隆雄
	文学部　教授	大藤　修
	文学部　教授	阿子島　香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　教授	飯淵康一
	東北アジア研究センター　教授	入間田宣夫
	施設部　長	渡邊正雄
幹事	施設部　企画課長	渡邊三郎

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会（1999年3月現在）

委員長	センター長（文学部　教授）	須藤　隆
	文学部　教授	今泉隆雄
	文学部　教授	大藤　修
	文学部　教授	阿子島　香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　教授	飯淵康一
	東北アジア研究センター　教授	入間田宣夫
	調査研究員（文学部　助手）	藤沢　敦
	調査研究員（文学部　助手）	関根達人
	調査研究員（文学部　助手）	奈良佳子
	理学部　事務長	渡邊正雄
	施設部　企画課長	渡邊三郎

目　　次

巻頭カラー図版

序
例言・凡例
東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　1994年度調査の概要……1
1．はじめに……1
2．埋蔵文化財調査研究センターの設置……1
3．埋蔵文化財調査の概要……5
(1) 川内地区の調査……5
(2) 青葉山地区の調査……6
(3) 宮沢地区の調査……12
(4) 川渡地区の調査……13
4．その他のセンターの活動……13
第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第15地点（NM15）の調査……16
1．調査地点の位置と調査経緯……16
2．調査結果……16
(1) 東区……16
(2) 西区……16
3．まとめ……18
第Ⅲ章　青葉山遺跡E地点第3次調査（AOE3）……19
1．青葉山遺跡の立地と周辺の遺跡……19
(1) 遺跡の立地と歴史的環境……19
(2) 仙台湾周辺における縄文時代早期の遺跡……20
2．調査経緯……25
(1) 調査地点の位置……25
(2) 調査方法と経過……25
3．基本層序……27
4．検出遺構……30
(1) 遺構の分布……30
(2) 住居跡……30

(3) 土坑……35
(4) ピット……38
(5) 竪穴住居跡の検討……38
5. 出土遺物……40
(1) 遺物の出土状況……40
(2) 縄文土器……44
① 整理・分析の方法……44
② 早期後葉の土器……44
③ 早期中葉の土器……48
④ 晩期の土器……52
(3) 石器……66
① 遺物包含層2層・2層下部出土の石器群……66
② 第1号竪穴住居跡出土の石器群……68
③ 第2号竪穴住居跡出土の石器群……68
④ ピット等出土の石器……69
(4) その他の遺物……82
6. 考察……83
(1) 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器からみた縄文時代早期貝殻条痕文土器の編年……83
① 研究の流れと問題の所在……83
② 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の編年的位置づけ……84
③ 「青葉山E式」の提唱－東北地方出土早期貝殻条痕文土器の地域性と編年－……86
④ むすび……95
(2) 青葉山遺跡E地点第3次調査出土資料からみた縄文時代早期後葉の石器群について……96
① 石器組成……96
② 石鏃……97
③ 擦切石斧……97
④ 石材選択……102
⑤ 剥片生産と石器製作……103
⑥ 石器出土状況……104
⑦ 小結……104
(3) 石器使用痕分析……106
7. まとめ……110

引用・参考文献
英文要旨
写真図版

図　目　次

図1　東北大学と周辺の遺跡……2
図2　仙台城と二の丸の位置……3
図3　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点……7
図4　青葉山地区調査地点……9
図5　仙台城二の丸北方武家屋敷地区
第4地点調査区の位置……11
図6　富沢地区調査地点……12
図7　川渡地区調査地点と周辺の遺跡……14
図8　仙台城二の丸跡第15地点調査区の位置……17
図9　仙台城二の丸跡第15地点調査状況……18
図10　仙台湾周辺の縄文時代早期遺跡分布図……21
図11　青葉山遺跡E地点第3次調査地点
調査区の位置……26
図12　青葉山遺跡E地点第3次調査断面図(1)
調査区北壁……28
図13　青葉山遺跡E地点第3次調査断面図(2)
ＯＰ列間南北ベルト東壁……29
図14　青葉山遺跡E地点第3次調査遺構配置図……31
図15　青葉山遺跡E地点第3次調査
1号竪穴住居跡……33
図16　青葉山遺跡E地点第3次調査
2号竪穴住居跡……34
図17　青葉山遺跡E地点第3次調査
1、4、6号土坑……36
図18　青葉山遺跡E地点第3次調査
10、15、25、30号土坑……37
図19　青葉山遺跡E地点第3次調査
グリッド別遺物密度図(1)……41
図20　青葉山遺跡E地点第3次調査
グリッド別遺物密度図(2)……42
図21　青葉山遺跡E地点第3次調査
グリッド別遺物密度図(3)……43
図22　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の口縁部断面形態……45
図23　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の口縁部装飾類型……45
図24　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の文様類型……47
図25　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器
口縁部断面形態の層位別出現頻度……48
図26　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器
口縁部装飾類型の層位別出現頻度……49
図27　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器
口縁部文様類型の層位別出現頻度……49
図28　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器
体部屈曲部文様類型の層位別出現頻度……49
図29　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の内面調整……49
図30　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の外面調整……49
図31　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の胎土……49
図32　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の器厚の層位的変化……49
図33　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の
口縁部装飾と端面形状との関係……50
図34　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の
口縁部文様と端面形状との関係……51
図35　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器の施文手法……52
図36　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(1)……53
図37　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(2)……54
図38　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(3)……55
図39　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(4)……56
図40　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(5)……57
図41　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(6)……58
図42　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(7)……59
図43　青葉山遺跡E地点第3次調査
出土土器(8)……60

図44　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土土器(9)……61
図45　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(1)……70
図46　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(2)……71
図47　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(3)……72
図48　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(4)……73
図49　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(5)……74
図50　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(6)……75
図51　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(7)……76
図52　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(8)……77
図53　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(9)……78
図54　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器(10)……79
図55　仙台湾周辺における早期後葉の
縄文土器(1)　「槻木１式」……87
図56　仙台湾周辺における早期後葉の
縄文土器(2)　仮称「上ノ原山段階」……87
図57　仙台湾周辺における早期後葉の
縄文土器(3)　「青葉山E式」……88
図58　仙台湾周辺における早期後葉の
縄文土器(4)　仮称「川添東段階」……89
図59　阿武隈川中・上流域における早期後葉の
縄文土器(1)　「野島式」併行……91
図60　阿武隈川中・上流域における早期後葉の縄文
土器(2)　「鵜ケ島台式」新段階併行……92
図61　阿武隈川中・上流域における
早期後葉の縄文土器(3)
「中ノ沢A段階」　(「茅山下層式」併行)…93
図62　周辺遺跡出土石器組成（縄文時代早期）……96
図63　周辺遺跡出土石器組成（縄文時代前期）……96
図64　周辺遺跡出土石鏃長幅分布……97
図65　青葉山遺跡E地点
第３次調査出土石鏃長幅分布……97
図66　宮沢遺跡第15次調査出土石鏃長幅分布……97
図67　擦切石斧出土遺跡分布図……98
図68　擦切石斧の石材組成……101
図69　擦切石斧の類型組成……101
図70　擦切石斧の幅厚分布……101
図71　擦切石斧の長幅分布……102
図72　磨製石斧の長幅分布（秋田県内）……102
図73　磨製石斧の長幅分布（福島県内）……102
図74　青葉山遺跡E地点
第３次調査出土石器の石材組成……103
図75　周辺遺跡出土剥片石器の石材組成……103
図76　器種毎の石器出土状況……104
図77　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器の使用痕(1)……108
図78　青葉山遺跡E地点第３次調査
出土石器の使用痕(2)……109

表　目　次

表 1　1994年度調査概要表……1
表 2　仙台湾周辺の縄文時代早期
　遺跡地名表(1)……23
表 3　仙台湾周辺の縄文時代早期
　遺跡地名表(2)……24
表 4　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器観察表(1)……62
表 5　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器観察表(2)……63
表 6　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器観察表(3)……64
表 7　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器観察表(4)……65
表 8　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器観察表(1)……80
表 9　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器観察表(2)……81
表10　縄文時代早期後葉
　貝殻条痕文土器の編年表……94
表11　磨製石斧出土遺跡地名表……99

図　版　目　次

図版 1　青葉山遺跡E地点第3次調査区全景 ……119
図版 2　青葉山遺跡E地点第3次調査断面 ……120
図版 3　青葉山遺跡E地点第3次調査
　検出遺構(1) ……121
図版 4　青葉山遺跡E地点第3次調査
　検出遺構(2) ……122
図版 5　青葉山遺跡E地点第3次調査
　検出遺構(3) ……123
図版 6　青葉山遺跡E地点第3次調査
　検出遺構(4) ……124
図版 7　青葉山遺跡E地点第3次調査
　検出遺構(5)・遺物出土状況 ……125
図版 8　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(1) ……126
図版 9　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(2) ……127
図版10　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(3) ……128
図版11　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(4) ……129
図版12　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(5) ……130
図版13　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(6) ……131
図版14　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(7) ……132
図版15　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器(8) ……133
図版16　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土土器細部 ……134
図版17　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(1) ……135
図版18　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(2) ……136
図版19　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(3) ……137
図版20　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(4) ……138
図版21　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(5) ……139
図版22　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(6) ……140
図版23　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(7) ……141
図版24　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(8) ……142
図版25　青葉山遺跡E地点第3次調査
　出土石器(9) ……143

第Ⅰ章　1994年度調査の概要

1.　はじめに

東北大学には、明治40年（1907年）の創設以来、順次拡充・発展を遂げ、10学部の他、多くの研究所・研究施設を有する。そのため、仙台市の川内・青葉山・片平・星陵・雨宮の各キャンパスに加えて、他に多くの研究施設があり、その敷地は10県にわたる広大なものとなっている。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財があり、特に川内地区は、近世の仙台城二の丸跡と武家屋敷跡にあたり、青葉山地区には旧石器時代から古代の遺跡が存在する（図１）。

東北大学構内の埋蔵文化財については、1970年代に川内地区・富沢地区で仙台市教育委員会や東北大学考古学研究室による調査が実施されたことがあるが、いずれも緊急に対処せざるを得なくなった形での調査で、その範囲も限定されたものにならざるを得なかった。その後、遺跡の存在が確認されていた川内地区や青葉山地区で、大規模な調査の必要性が出てきたことから、大学構内の埋蔵文化財の調査・保護を組織的に行う目的で、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織され、その実務機関として埋蔵文化財調査班（1988年から調査室）が置かれた。1994年度からは、埋蔵文化財調査委員会を改組する形で、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

1983年度以降、調査委員会が実施した調査は、本調査19件、試掘調査23件、立会調査33件を数え、のべ調査面積は10,333㎡に及んでいる。これらの調査成果については、『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～11において報告してきた。また、これらの調査で検出された遺構や、出土遺物に関する研究成果、関連する資料の研究成果なども、調査年報に掲載してきたところである。

1994年度においても、青葉山遺跡Ｅ地点などの調査が行われ、新たな資料を提供することとなった。本報告書は、これらの調査研究の成果についてまとめたものである。

2.　埋蔵文化財調査研究センターの設置

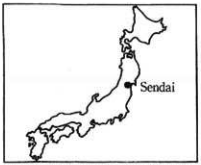
上述のように、1994年度は、それまでの埋蔵文化財調査委員会を改組して、埋蔵文化財調査研究センターが設置された最初の年度である。そのため、センター設置に至る経緯と、センターの組織と運営方法について、ここで簡単に触れておきたい。

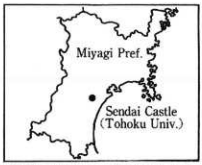
1983年の埋蔵文化財調査委員会の設置以来、東北大学構内の埋蔵文化財調査は、調査委員会とその実務機関の埋蔵文化財調査室が行ってきた。しかし1993年度以降は、急激に事業量が増加し、それまでの体制では対処することが困難になってきた。また、調査にあたる調査員は、２名の助手（1993年度７月より３名に増員）がその任にあたってきた。この調査員の定員については、委員会発足時の1983年度から１名が３年間の流用定員で充てられた以外、任期１年間の借用定員を毎年更新するという、極めて不安定な身分で運用されていた。さらに1993年

表１　1994年度調査概要表

Tab.1 Excavations on the campus in the fiscal year 1994

種類の種類	調　査　地（略号）	原　　因	調 査 期 間	面　積	時　期
本 調 査	仙台城二の丸跡第15地点（NM15）	川内南地区屋外環境整備	3／1～3／24	70㎡	近世
	仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点（ＢＫ４）	課外活動施設新営	8／1～12/21	983.5㎡	近世
	青葉山遺跡Ｅ地点第３次調査（ＡＯＥ３）	理学部自然史標本館新営	3/17～10/24	1,862㎡	縄文早期
試掘調査	大型計算機センター地点（付帯施設部分）	大型計算機センター新営	4/18～4/27	16㎡	
立会調査	富沢地区野球場（94－1）	基幹整備	6/13～7/12	—	—
	青葉山地区（94－2）	情報ネットワーク整備	7/11～7/30	—	—
	川渡農場（94　3）	外灯取設	3/30	-	—





1：Ruin of Sendai Castle
2：Kawauchi steles
3：Aobayama Site Loc.B
4：Aobayama Site Loc.E
5：Aobayama Site Loc.C
6：Aobayama Site Loc.A
7：Aobayama Site Loc.D
8：Ashinokuchi Site

1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：青葉山遺跡B地点　4：青葉山遺跡E地点　5：青葉山遺跡C地点
8：青葉山遺跡A地点　7：青葉山遺跡D地点　8：芦ノ口遺跡　9：片平仙台大神宮の板碑　10：郷六大日如来の碑
11：葛岡城跡　12：郷六城跡　13：郷六建武碑　14：沼田遺跡　15：郷六御殿跡　16：郷六遺跡　17：松ケ岡遺跡
18：向山高蔵遺跡　19：萩ケ丘遺跡　20：茂ケ崎城跡　21：二ツ沢横穴墓群　22：萩ケ丘B遺跡　23：八木山緑町遺跡
24：二ツ沢遺跡　25：青山二丁目遺跡　26：青山二丁目B遺跡　27：杉土手(廃除土手)　28：砂押屋敷遺跡
29：砂押古墳　30：富沢遺跡　31：泉崎浦遺跡　32：金洗沢古墳　33：土手内窯跡　34：土手内遺跡
35：土手内横穴墓群　36：三神峯遺跡　37：金山窯跡　38：三神峯古墳群　39：富沢窯跡　40：裏町東遺跡
41：裏町古墳　42：原東遺跡　43：原遺跡　44：八幡遺跡　45：後田遺跡　46：町遺跡　47：神徳山遺跡
48：御堂平遺跡　49：上野山遺跡　50：北前遺跡　51：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡

Fig.1 Archaeological sites and Tohoku University

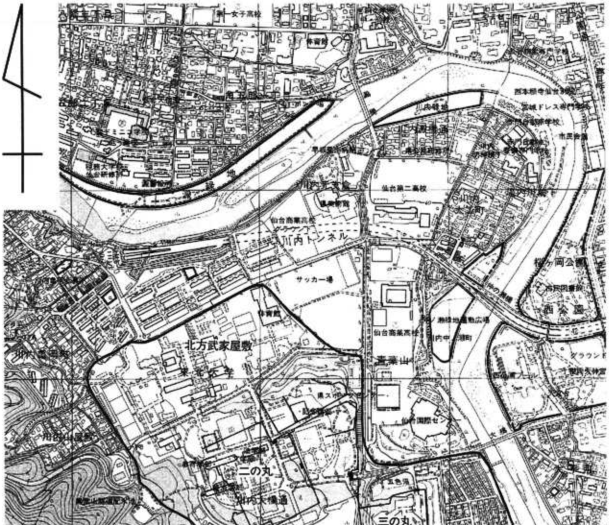


図２　仙台城と二の丸の位置
Fig.2 Distribution of Sendai Castle

度には、それまで定員を借用していた部局より、翌年度から定員を出せない旨の申し出がなされ、借用定員での運用は限界に達していた。学内の施設整備事業は、それ以降も多数計画されており、かかる状況のもと、借用定員2名での運営は、制度的にも実際の仕事量から見ても不可能であるとの認識が共有されるに至った。その結果、1993年度は暫定的に借用定員で調査員（助手）を1名増員して、当面の事業にあたることで対処し、翌1994年度より、学内共同利用施設の埋蔵文化財調査研究センターへと改組することとなった。1993年12月13日に開催された埋蔵文化財調査委員会において、「(仮称）埋蔵文化財調査研究センター設置要求書」が審議・承認され、正式にセンター設置を要求する運びとなった。これを受けて、センターの調査研究員の定員は、新たに全学流用定員を確保することとなり、前年度末の1994年3月に開催された流用査定委員会において、助手3名の流用が承認された。さらに、1994年5月17日開催の評議会において、埋蔵文化財調査研究センターの設置が認められ、同日付けでセンターが発足した。

センターの組織は、併任のセンター長1名、調査研究員（助手）3名、事務補佐員1名からなる。センター職員の職務分担は以下の通りである。

センター長：○組織全体の業務の統括、掌理

調査研究員：○施設整備及び営繕工事に関わる埋蔵文化財調査の調査計画の立案及び調査の実施
○構内の遺跡及びそれに関連する研究
○埋蔵文化財の調査技術、分析方法、保存処理方法の研究・開発
○遺物の調査記録及び保管
○出土遺物の公開、活用

事務補佐員：○県、市教育委員会等の関係機関、施設部及び学内の関係する部局との事務連絡
○調査に伴う各種事務処理
○刊行物等の発送及び管理事務
○交換、寄贈文献等関係資料の管理

それ以前の調査室の段階には、日常運営経費も恒常的な経費が認められておらず、その年度ごとに要求して確保した整理作業経費を充てているような状態であった。センター設置に伴い、日常運営経費は、全学での共通経費から支弁されるようになり、より安定した組織運用が可能となった。施設は、従来の埋蔵文化財調査室の施設をそのまま利用することになったが、センター長室兼事務室用の部屋を新たに確保して、設置した。

センターの運営にあたっては、新たに埋蔵文化財調査研究センター運営委員会が設置され、センターの組織・人事・予算、その他の運営に関する重要事項を審議・決定することとなった。運営委員会の委員長はセンター長が務め、運営委員は、次の委員から構成される。

○施設整備委員会各地区協議会の協議員
○発掘調査に関連ある専門分野の教授又は助教授
○発掘調査地に関連のある部局の教授又は助教授
○施設部長

また、運営委員会のもとに、専門委員会が置かれ、調査に関する専門的事項など、具体的な問題について審議することとなった。専門委員会の委員長はセンター長が務め、専門委員会は次の委員から構成される。

○調査研究員
○発掘調査に関連ある専門分野の教授又は助教授
○施設部企画課長
○発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

運営委員会は、各年度の事業計画・予算の審議と、前年度の事業報告と決算の承認の必要上、年度当初に開催

される他、特に必要がある場合に開催される。専門委員会は、運営委員会での決定に沿って年間事業を進めていく過程で、発掘調査の開始時と終了時、調査途中の節目などその他必要な場合に、運営委員会より頻繁に開催されることとなった。

3. 埋蔵文化財調査の概要

1994年度は、川内地区・青葉山地区・富沢地区・川渡地区において、本調査3件、試掘調査1件、立会調査3件の、合計7件の調査を実施した（表1）。

(1) 川内地区の調査

川内地区では、本調査2件を実施した(図3)。仙台城二の丸跡に相当する川内南地区での調査が1件、二の丸北方の武家屋敷跡に相当する川内北地区での調査が1件である。

仙台城二の丸跡第15地点は、川内南地区の道路に外灯などを設置することに伴う調査である。対象面積は小さかったが、調査地点が後世の盛土が薄いと予想される場所であったため、本調査との位置づけで調査を行った。当初の予想に反して、調査地点は、明治以降に削平を受けており、江戸時代の遺構は検出されなかった。これについては、本年報の第Ⅱ章において報告する。

仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点は、課外活動施設新築に伴う調査である（図5）。

川内地区を南北に区切る道路の北側にあたる川内北地区は、そのほとんどが、仙台城二の丸の北方に置かれていた武家屋敷地区に相当する。東北大学埋蔵文化財調査委員会が川内地区の調査を開始した当時は、仙台城跡の周知の遺跡の範囲は、ほぼ川内南地区に限られ、北地区は周知の遺跡の範囲には入っていなかった。調査委員会では、北地区についても、仙台城跡の隣接地として、いくつかの試掘調査を実施してきた。その結果、場所によっては江戸時代の遺構面が保存されており、なおかつ仙台城二の丸跡と同じ遺構面が武家屋敷地区まで続いていることが確認されてきた。このような成果をもとに、宮城県教育委員会・仙台市教育委員会とも協議し、二の丸のすぐ外側であり、一体的にとらえる必要があることから、仙台城跡の遺跡範囲を拡大する形で、川内北地区まで周知の遺跡の範囲とする措置がとられている。但し、北地区のなかでも東端のグランドの部分は、それより西側とは段丘崖を境に地形が途切れており、またこの区域での立会調査で、江戸時代の遺構が残存しているのが確認された例がまだ無いため、遺跡が残っているかどうか確実でないことから、周知の遺跡の範囲には含まれていない。今後も、立会調査を続けるとともに、必要な場合には、隣接地として試掘調査を行っていく必要がある。

今回の建設予定建物は、ロ字形の平面形の建物の計画であった。調査にあたっては、建物範囲と予掘り部分を対象区域として、中庭部分は調査を行っていない。恒久建造物に囲まれてしまうこと、調査区が中庭で分断され、遺構の理解に支障をきたすことが予想されることから、この中庭部分も調査範囲に含めることも検討したが、以下のような理由で、中庭部分の調査は見送ることとした。建設される建物の西側一階部分が吹き抜けで、小型の重機や車輌が中庭に入ることが可能な構造であり、中庭部分の調査が今後必要となっても、建設以後も調査が可能な構造であること。給排水・電気・ガスなどの付帯施設は、全て建物の外側へ出し、中庭側には造らない構造が採用されたこと。調査地点の遺構が、極めて複雑であることが予想され、将来再検証できる余地を残しておいた方が良いと判断したこと。また、建物の計画策定時の埋蔵文化財調査研究センターと施設部との協議の際に、センター側から、破壊される範囲をできるだけ少なくするよう設計変更を求めた。これに対して施設部側では、当初の3階建ての計画を4階建てとし、接地面積を少なくするという設計変更で応じていただいた。この変更によって、廊下・エレベーターなどの共用部分の配置の関係上、ロ字形の計画となったという経過も考慮して、中庭部分の調査は行わないこととした。

今回の調査地点では、1985年度に試掘調査を実施している。この試掘調査では11ケ所にトレンチを設けている

が、ほとんどの調査区は重機で掘削して、調査区の断面で層序を検討しているだけであった。その結果、層序と出土遺物との関係が十分明らかでなく、各層序の形成年代が明確にはなっていなかった。そのため、現在の表土と、明らかに近代以降と考えられる盛土を1層として、この1層のみを重機で除去し、2層上面から手掘りで精査を行うこととした。

先に行っていた青葉山遺跡E地点第3次調査が終了していなかったが、並行して調査を行うことになり、8月1日から調査を開始した。12ケ月以上の調査期間が想定されたため、冬期の中断をはさんで2ケ年に渡って調査を行うこととした。そのため1994年度は、遺跡全体の様相を把握して、全体の見通しを立てることに主眼を置いた。2層上面の遺構から精査を開始したが、この面からは大規模な礎石建物跡などが検出され、いずれも明治以降の陸軍第二師団に関わるものであった。3層上面からは、少数のピットが検出されただけで、2層と3層は、明治時代に行われた一連の整地層と考えられた。4層上面では、畑跡と考えられる畝状遺構が一面に広がっているのが確認された。調査地点は、江戸時代には一貫して武家屋敷が置かれていた場所であるため、この4層上面の遺構は、武家屋敷廃絶後の明治時代初頭頃の年代が考えられる。年内の調査は、この4層上面の精査の途中で終了した。冬期の中断に備えて、調査区全面にシートを貼り、表土は土嚢によって埋めることで遺構面の保護を図った。この冬期の中断をはさんで、翌年度事業の前倒しとして3月1日から調査を再開し、そのまま継続して翌1995年度の8月末まで調査を行っている。そのため、この武家屋敷跡第4地点の報告は、1994年度と1995年度の調査をまとめて、次の年報13において報告することとする。

(2) 青葉山地区の調査

青葉山地区では、本調査1件、試掘調査1件、立会調査1件を実施した（図4）。

本調査を実施したのは、理学部自然史標本館新営に伴う、青葉山遺跡E地点の第3次調査である。前年度の1993年度に調査を実施した、共同溝新営に伴う青葉山遺跡E地点第2次調査のすぐ北側にあたる区域の調査である。第2次調査では、縄文時代早期後葉の貝殻条痕文土器などが出土していた。今回の第3次調査では、同じ縄文時代早期後葉の住居跡2軒や、土坑・ピットなどの遺構が検出され、この時期の土器・石器が多数出土した。この青葉山遺跡E地点第3次調査については、本報告書の第Ⅲ章において報告する。

試掘調査を実施したのは、大型計算機センター新営に関連する付帯施設部分の調査である。これは、前年度の1993年に実施する予定の調査であったが、前年度の調査予定が途中で大幅な変更を余儀なくされ、一部が1994年度に延期されていたものである。工学部応用物理学科棟から新設建物につなげて建設される、共同溝部分の調査区である。共同溝のルートにあわせて、共同溝東区と西区の2ケ所の調査区を設定したが、その内の東区の調査が1994年度に実施した区域である。既設埋設管などがあり、調査を実施できる範囲が限られていたので、調査が行いやすい場所を選んで調査区を設定した。火山灰層の上部は、削平を受けていた部分もあるが、全体に保存は良好であった。層序は建物本体部分と同様であった。建物本体部分の調査において、愛島軽石層より下ではグライ化した粘土層が検出され、水成堆積の可能性が高いことから、愛島軽石層上面まで調査を行い、それ以下の調査は行っていない。遺構・遺物は検出されなかった。調査区の位置と基本層序の図については、年報11において示しておいたので、ここでは省略する。

立会調査を実施したのは、情報ネットワーク整備に伴う調査である。東北大学では、1988年度に全学を光ファイバーで結び、コンピューター資源の効率的な利用を可能にし、学内及び海外との情報交換を促進するLAN「東北大学総合情報ネットワークシステム(TAINS)」を構築している。このTAINSの利用量が急速に増大したため、さらに最新の情報技術を導入し、質的にも量的にも性能を高めた「Super TAINS」を構築することとなった。今回の工事は、そのためにより容量の大きい光ファイバーを設置するものである。光ファイバーは、共同溝が造られている部分では、共同溝内に設置されるため、新たな掘削は伴わなかった。共同溝が設置されていない、各施

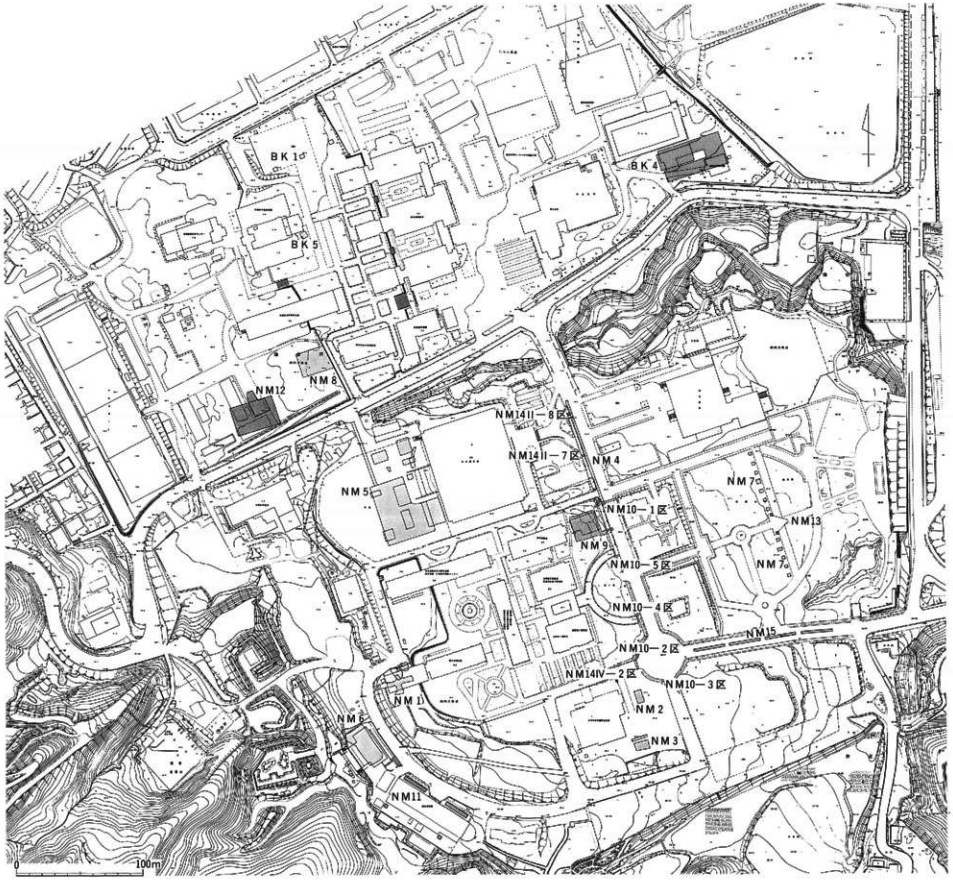


図3　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点

Fig.3 Location of excavations until 1994 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

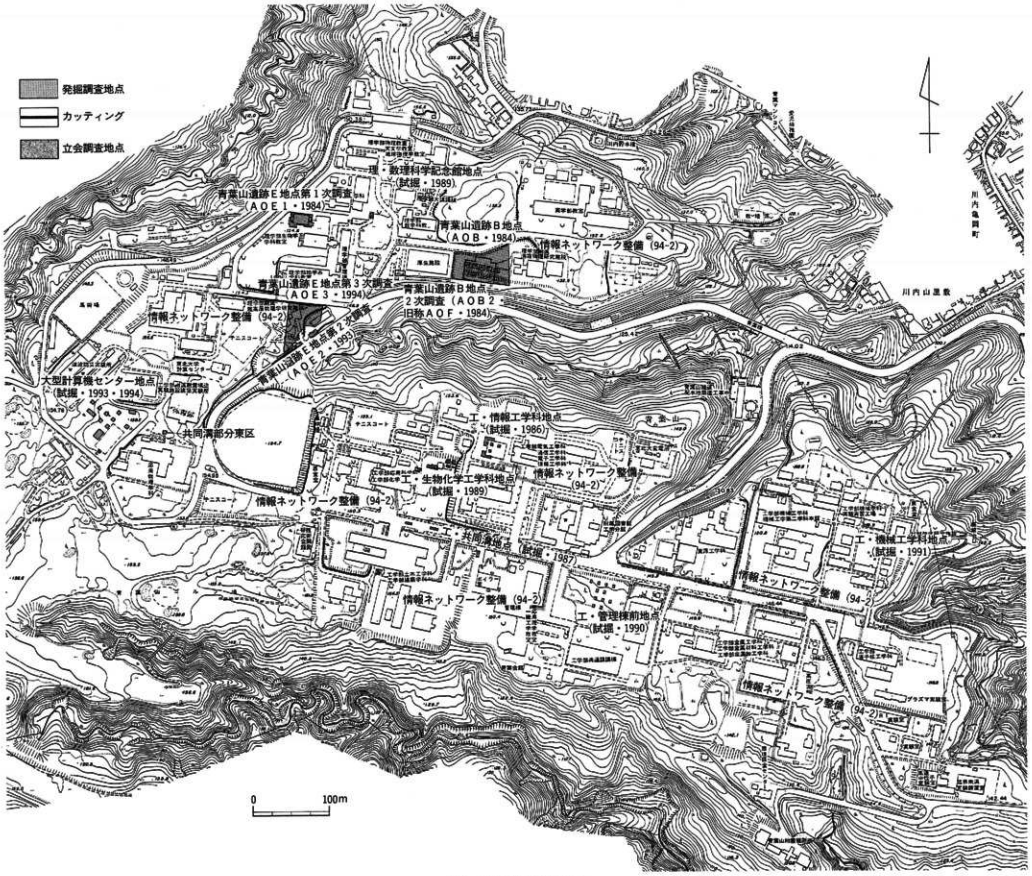


図4　青葉山地区調査地点
Fig.4 Location of excavations at Aobayama campus

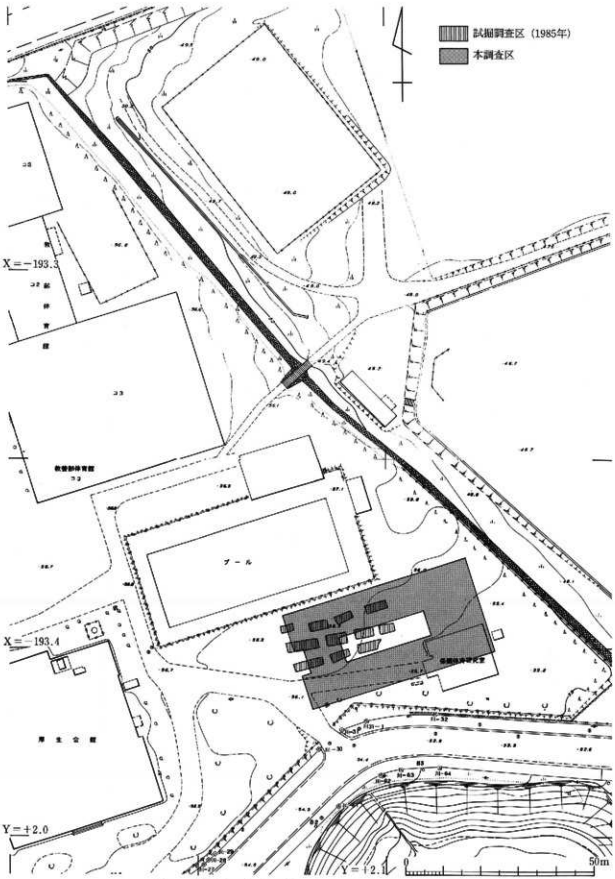


図5　仙台城二の丸北方武家屋敷地区第4地点調査区の位置
Fig.5 Location of BK4 (BK i.e. Location 4 of *samurai* residence)

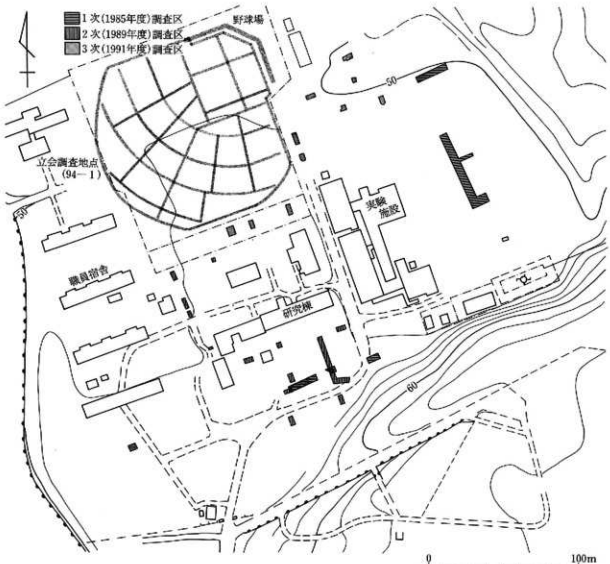


図6　富沢地区調査地点
Fig.6 Location of excavations at Tomizawa campus

設につながる末端の部分を中心に、土中に直接ケーブルを埋設する区域が、新たに掘削されることとなった。対象区域は青葉山地区の理学部・工学部構内の各所に広がる。ケーブル埋設という工事のため、掘削される範囲も狭く、深さも浅かったことから、立会調査で対処することとした。遺構・遺物は発見されなかった。

(3) 富沢地区の調査

富沢地区では、立会調査1件を実施した。

富沢地区は、仙台市南部の名取川沿いの沖積平野に接する三神峯丘陵の北側に位置している。この富沢地区には、理学部附属原子核理学研究施設、職員宿舎、野球場などが置かれている。1976年に、富沢地区の北西端の地域で野球場が建築されることになり、ブルドーザーによる雑木の伐採中に土器片が発見されたため、東北大学考古学研究室によって、急遽試掘調査が行われた。その結果、平安時代の竪穴遺構などが検出され、平安時代の土師器が多量出土したほか、縄文土器・弥生土器なども出土した。この試掘調査結果を受けて、野球場が現在の位置に移されて造られたという経緯がある。また、富沢地区では、原子核理学研究施設の大規模な施設拡充計画が

あるため、1985年度・1989年度・1991年度の3ケ年にわたって、埋蔵文化財調査委員会が試掘調査を実施している（図6、年報3・9）。この3ケ年の調査の結果、縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物が検出されている。また、さらに下層から約33,000年前の泥炭層が検出され、樹木や種子などが良好に遺存していた。人工遺物は検出されていないが、原位置を保った根株も残っており、当時の自然環境を復元する上で、重要なデータとなっている。これらの調査結果を受けて、富沢地区全体が芦ノ口遺跡として、周知の遺跡の範囲内に含まれるようになっている。

今回の調査は、野球場の基幹整備に伴なう調査である。具体的な工事内容は、野球場のグランドの下に一帯に、排水施設を埋設し基盤を改良することと、観覧席の整備などである。

富沢地区は、本来は南側の三神峯丘陵の裾から北側の金洗沢に向かって、緩やかに傾斜して下っていく地形であったのが、近現代の造成工事によって、平坦面が造られていったものと推定される。野球場の南端と原子核理学研究施設との間は段差となって、野球場が一段低くなっており、野球場の南側はかなり削平されていることが想定された。一方、野球場の北端は、その北側に走る道路より一段高くなっており、こちら側は逆にかなりの厚さの盛土がなされていると推定される。比較的広い範囲を掘削する観覧席の整備部分は、この北側の端に近い場所で、掘削が盛土の範囲内におさまると予想されたことから、立会調査で対処することにした。グランドの排水管設置部分は、掘削範囲の幅がせまいため、こちらも立会調査で対処することとした。観覧席部分は、盛土の範囲で終わっており、遺構・遺物は検出されていない。排水管部分では、北側は想定通り大きく削平されており、地山の水成堆積層が確認された。中程の部分で、盛土以前の旧表土が確認された部分もあるが、わずかの範囲であり、遺構・遺物も発見されなかった。

(4) 川渡地区の調査

川渡地区では、立会調査1件を実施した。

宮城県北西部に所在する玉造郡鳴子町の川渡地区一帯には、農学部の附属農場がある。今回の調査は、農場の入口から管理棟などが置かれている区域へ至る、農場内の道路沿いの外灯を、建て替えるのに伴う調査である。農場入口から入ってすぐの所には、職員宿舎などが置かれており、その付近一帯には、東北大学農場2・3号畑遺跡（縄文）・町西遺跡（弥生）・町A遺跡（縄文・古代）・修験院善教坊跡（近世）などの遺跡が知られている（図7）。このうち町西遺跡では、1989年度に農場宿泊施設建設に伴って調査が行われており、ピットが検出され、弥生時代後期の土器が出土している（年報7）。今回の工事は、外灯を兼ねる電柱を、道路沿いに立てていくもので、掘削範囲もごく狭かったことから、立会調査とした。遺構・遺物は発見されなかった。

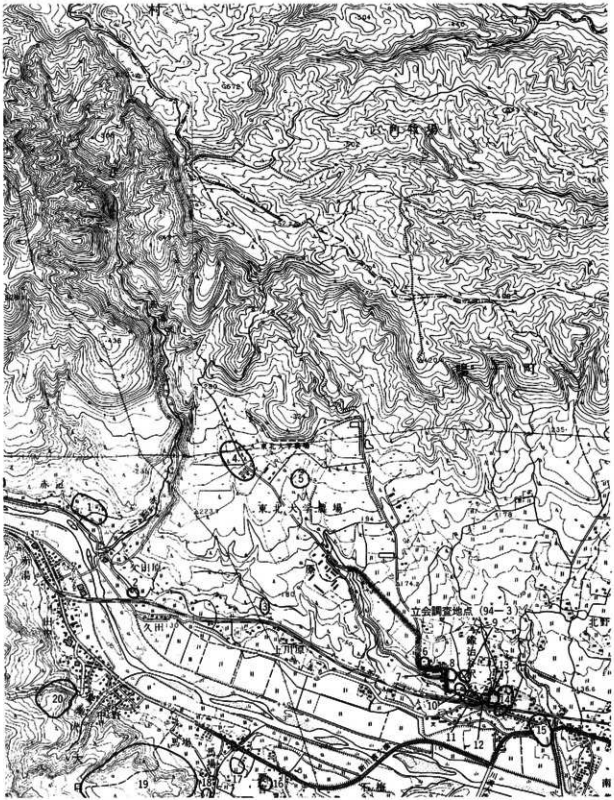
4. その他のセンターの活動

青葉山遺跡E地点第3次調査では、検出例の少ない縄文早期の住居跡が発見されるなど、多くの成果が得られたため、調査途中の6月11日に現地説明会を開催し、100名を越える参加者があった。説明にあたっては、サルボウとアカガイの貝殻と粘土を準備し、貝殻条痕文の施文実演も行った。また、説明会に先立って、報道機関への発表を行っている。

この青葉山遺跡E地点第3次調査については、東北史学会と宮城県遺跡調査成果発表会において、調査成果の発表を行った。日時・題目・発表者などは下記の通りである。

東北史学会　10月2日　於：東北大学
発表題目「青葉山遺跡E地点における縄文早期集落」　発表者：関根達人

宮城県遺跡調査発表会　12月10日　於：東北歴史資料館
発表題目「仙台市青葉山遺跡E地点」　発表者：関根達人



1：赤這遺跡(縄文)　2：久田遺跡(縄文)　3：大室院跡(近世)　4：上川原遺跡(縄文)　5：丸森遺跡(縄文)
6：東北大学農場2・3号畑遺跡(縄文)　7：町西遺跡(弥生)　8：町A遺跡(縄文・古代)　9：町B遺跡(縄文)
10：修験院善教坊跡(近世)　11：鍛冶谷沢町宿駅跡(近世)　12：鍛冶谷沢検断跡(近世)　13・14：町C遺跡(縄文・古代)
15：観音館跡(中世)　16：石の梅古墳(古墳)　17：住吉神社跡(中世)　18：行蔵院跡(近世)　19：大西館跡(中世)　20：小屋館跡(中世)

図7　川渡地区調査地点と周辺の遺跡

Fig.7 Archaeological sites and University Farm

学内への広報活動としては、「東北大学広報」163号の「部局だより」において、埋蔵文化財調査研究センターの発足についてお知らせした。

センター業務に関わる資料調査としては、以下の2件の資料調査を行い、それぞれ担当する調査研究員が出張した。

1月28・29日　第8回江戸遺跡研究会「災害と江戸時代」　藤沢敦・関根達人・菊池佳子

3月20日　岩手県埋蔵文化財センター（江川鉄山出土資料など）　関根達人・菊池佳子

当センターでは、これまでの調査で出土した木製品や金属製品など、保存処理が必要な資料を多数保管している。ほとんどは、仙台城二の丸跡出土の近世の遺物である。木製品については、1992年度にポリエチレングリコール含浸用の恒温水槽を導入し、保存処理を開始しているが、金属製品の処理については、未着手のままで、懸案となっていた。大型の遺物の含浸が行えるような専用の真空含浸装置の導入は、予算的に無理なことと、処理が必要な金属製品のほとんどが、小型の製品であるため、既存製品を利用した含浸装置を導入することとした。具体的には、真空デシケーターを利用し、それに必要な容量の小型真空ポンプをつなげて、真空含浸が行えるようにしたものである。

第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第15地点（ＮＭ15）の調査

1．調査地点の位置と調査経緯

仙台市青葉区川内に所在する東北大学構内の川内南地区において、屋外の環境整備事業の一環として、旧大手門から文科系４学部厚生会館に向かって東西にのびる道路に外灯の付設と、道路北側の歩道の改修が計画された。

文科系４学部厚生会館付近は、絵図との対比から、仙台城二の丸殿舎の中心部に近く、詰ノ門を入って南側の書院、客ノ間、虎ノ間付近に相当すると考えられている。同じく絵図との対比から、今回外灯が付設されることになった道路を横切る形で、詰ノ門を起点に南へのびる二の丸の外郭施設が検出される可能性が考えられた。

厚生会館東側のロータリー付近では、平成３年度に二の丸跡第10地点（ＮＭ10）を調査し、地表下50cmに満たない浅い部分で、二の丸殿舎が灰燼に帰した明治15年の火災に伴う焼土層や、焼土層に覆われた幕末から明治時代初頭の石敷遺構などが検出されている(年報９)。また、外灯が付設される道路の北側に隣接する、川内記念講堂前の広場では、平成４年度に二の丸跡第13地点の調査が行われ、現地表下約20cmという極めて浅い場所から、「七ｌ間御兵具蔵」に関連すると考えられる二の丸期の石組溝が検出されている（年報10)。

このように、本調査地点は、西側は二の丸殿舎の中心部分に近い上、場所によっては現地表の直下に江戸時代の遺構が埋没している可能性が予想されたため、工事に並行して本調査を行える体制を整えた。

外灯付設工事は、道路の中央部の７基の外灯を伴うグリーンベルト新設区（東区）と、そのための電源を確保するため、厚生施設南側からロータリーの南端を通って外灯へと繋がる管路（西区）とに分かれる（図８)。外灯の基礎部分については、記述の便宜上、最も東に位置するものを外灯１とし、以下最も西側の外灯７まで仮番号を付した。西区では、厚生施設建物の南東部とロータリーの南西隅の２ケ所にハンドホールが新設された(以下、前者を西側ハンドホール、後者を東側ハンドホールと仮称する)。

東区では、７基の外灯の基礎部分と、それらを結ぶ地中線路掘削部が調査対象となった。歩道の改修については、掘削が既設のアスファルト舗装の除去にとどまるため、調査の対象外とした。また、グリーンベルトおよびその中の植栽についても、現在の道路面から下の掘削を伴わないため、同じく調査の対象外とした。外灯の基礎の掘削範囲は、１辺が約１ｍの方形で、深さは約１ｍである。地中線路の埋設では幅約0.5m、深さ約0.5mが掘削された。現況が道路であり、重機でアスファルトや砕石を取り除く必要があることから、調査は全て工事時の立ち会いとし、手掘りによる調査は行っていない。

西区では、２基のハンドホール埋設部分と、それらを結ぶ地中線路掘削部が調査対象となった。東側ハンドホールは、掘削面積約２㎡、深さ約1.5m、西側ハンドホールは、同じく約３㎡、深さ約１ｍである。東区同様、工事時の立ち会いとし、手掘りによる調査は行っていない。

2．調査結果

(1) 東区

東側に位置する外灯１～３では、アスファルトを剝ぐと、握り拳大の円礫を非常に多く含む盛土が厚さ約60cmあり、その直下が遺物を含まない黄白色粘土の地山となる。

外灯４から西では、円礫を多く含む盛土と地山との間に、炭化物を多く含む暗褐色のシルトが約20～30cmの厚さで認められた。この層にはレンガや瓦が含まれているが、外灯６において、この層の下からコンクリートの基礎が認められたため、２層自体、近代以降の所産であることが確実となった。東区では江戸時代の遺構・遺物は発見されていない。

(2) 西区

東側ハンドホールや、東区との間を結ぶロータリー道路横断部分では、コンクリートブロック等を含む表土が

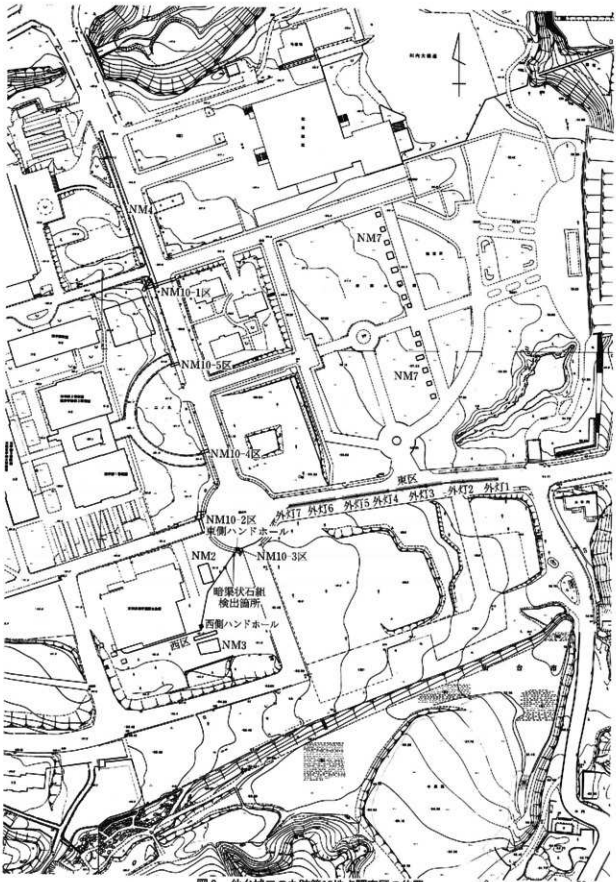


図8　仙台城二の丸跡第15地点調査区の位置

Fig.8 Location of NM15

NM15 i.e. Location 15 of *Ninomaru* (Secondary citadel of Sendai Castle)

約60cm程あり、その直下が地山であった。地山の様相は場所によりだいぶ異なるが、地山の上面では遺構は確認できなかった。

西側ハンドホールでは、レンガ、ガラス、コンクリート、針金、瓦等を多く含む近代の盛土が約80cmあり、その直下が、礫や砂、シルトが互層をなす水成堆積層となっていた。この水成堆積層については、この部分が西側の山寄りの場所にあたることから、沢に沿って形成されたものと考えられる。東側ハンドホール同様、江戸時代の遺構・遺物は発見されていない。

2ケ所のハンドホールを繋ぐ管路では、地表下約20cmの位置で、表土に直接覆われた暗渠状の石組みを2基検出した（図9）。2基の暗渠状の石組みは、上幅約1～1.2m、深さ60cm以上の掘り方のなかに、人頭大からひと抱えもある角のとれた大型の円礫を不規則に詰め込んだ施設である。調査区の幅が狭いため、暗渠状遺構の正確な方向を捉えることはできなかったが、どちらも南北方向にのびていると考えられる。現地表下約50cmの位置には、明治15年の火災に関連すると考えられる炭層があり、暗渠状遺構はこの炭層を切って作られている。このような構造を持つ暗渠状の遺構は、仙台城二の丸跡のこれまでの調査でも何ケ所かで検出されているが、それらは全て明治時代以降の所産である。本遺構についても、明治15年の火災に伴う可能性の高い炭層を切って構築されていることから、明治時代以降に作られたものと判断した。ケーブルの埋設深度が暗渠状石組みにまで及ばないため、暗渠状遺構については、そのまま埋め戻し、保存されている。この調査区においては、炭層の下に江戸時代の可能性のある整地層が一部確認されたが、江戸時代の遺構、遺物は検出されなかった。

3. まとめ

東区は、明治時代以降、現在に到るまで道路として利用されてきたこともあり、近代以降の造成が著しい。すなわち、近代以降のある時期に、おそらくは道路の改修に際して地山面まで大きく削平されたことがあり、その時にこの部分の江戸時代の整地層や遺構が失われたと考えられる。

西区では、江戸時代の遺構、遺物は見つからなかったものの、ロータリーの南西側で、現地表下約50cmの位置で明治15年の火災に伴うと考えられる炭層が確認されており、場所によっては、比較的浅いところに二の丸期の遺構面が存在していることが明らかとなった。この地区は、二の丸殿舎の中枢的建物にも近く、今後とも開発に際しては慎重な調査が必要である。

図9　仙台城二の丸跡第15地点調査状況
Fig.9 View of NM15

第Ⅲ章　青葉山遺跡Ｅ地点第３次調査（ＡＯＥ３）

1．青葉山遺跡の立地と周辺の遺跡

(1) 遺跡の立地と歴史的環境

奥羽山系寒風山南麓に源を発する広瀬川は、約50km東漸し、青葉山の段丘崖沿いを蛇行した後、仙台市郡山付近で名取川と合流して太平洋へと注ぐ。広瀬川が宮城野の海岸平野へ出る付近には、広瀬川の開析した河岸段丘が発達している。これらの段丘は、低いほうから順に、下町段丘、中町段丘、上町段丘、台の原段丘、青葉山段丘に大別され、それぞれの段丘面の形成時期は、中町段丘が立川段丘、上町段丘が武蔵野段丘、台の原段丘が下末吉段丘、青葉山段丘は多摩段丘に比定されている（地学団体研究会仙台支部編1968）。

最も古い青葉山段丘の標高は、約100m～212mを測り、南西部の最も高い面から北東へ順に４段の面がある。青葉山遺跡Ｅ地点は、青葉山段丘のなかで低いほうから２番目の面（Ⅱ面）に位置する（大月義徳1987）。遺跡付近の標高は約150mである。遺跡の南東には、川内山屋敷へ向かって開く沢の谷頭が存在し、遺跡は、その沢に面する南向きの緩斜面に立地する。

本遺跡は、仙台市青葉区荒巻東北大学理学部構内に所在し、調査着手時には、調査地点は、所々雑木の点在する荒地であった。青葉山は、江戸時代には仙台城の後背地として、明治時代以降も帝国陸軍第二師団の演習地として、一般の立ち入りが制限されていた。戦後も、東北大学の理学系学部の青葉山移転が始まる昭和39年以前には、わずかに開拓農家が点在する程度で、遺跡付近の自然景観は比較的良好に保たれていたと考えられる。青葉山地区の遺跡の存在が認識されるのは古く、昭和のはじめに遡る。当時、東北帝国大学医学部の副手であった山内清男は、繊維土器の出土地として「陸前國仙臺市、川内、亀ケ岡八耕（筆者註：亀岡八幡の誤り）裏の工兵作業所」、すなわち工兵隊の野戦演習場であった青葉山遺跡Ｅ地点付近の名前を挙げている（山内清男1929ｂ）。この資料については、写真、図面などがなく詳細を知ることはできないが、今回の調査で出土した縄文時代早期の貝殻条痕文土器には胎土中に繊維を含むものが多いことから、これと同じものであった可能性もある。

再び青葉山の遺跡が認識されるようになったのは、昭和46年頃から始まった東北大学考古学研究室による踏査で、仙台市内では初めて旧石器時代の遺跡が発見されたことによる（青葉山遺跡Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ地点）。昭和55年、56年には青葉山の南側の丘陵地で、山田上ノ台遺跡、北前遺跡の調査が仙台市教育委員会により行われ、あいついで前期旧石器が発見された（佐藤洋・斎野裕彦編1982、主浜光朗編1987）。青葉山の東北大学構内でも、昭和59年に、附属図書館北青葉山分館の建設に伴い、青葉山遺跡Ｂ地点の調査が行われ、前期旧石器と後期旧石器が層位的に出土した（年報２）。青葉山周辺で行われたこれらの旧石器時代遺跡の調査は、宮城県における前期旧石器の先駆的研究として、その後の研究の深化に大きく貢献した。1988年には、自然堤防上に立地する富沢遺跡の調査で、約２万年前の地層から炭化した針葉樹林とともに焚き火を囲むかたちで石器製作跡が検出され、後期旧石器時代の人の活動とそれをとりまく環境をより具体的に考える上での貴重なデータが得られた（太田昭夫・斎野裕彦1992）。

本遺跡から広瀬川沿いに約20km遡った、仙台市青葉区熊ケ根にある野川遺跡では、多縄文系土器に伴う石器一括埋納遺構が２基検出され、注目された（工藤信一郎1996）。早期の遺跡は、前期以降に比べ発見数が少ないが、名取川流域に偏る傾向が見られる。前期から後期中葉には、青葉山丘陵と名取川に挟まれた地域に、三神峯遺跡、山田上ノ台遺跡、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡など、大規模な集落が場所を変えながら継続的に営まれる。後期後葉から弥生前期の遺跡は、市内の各所に点在するものの、後期中葉以前に比べ、遺構の検出数、遺物の出土量は減少する。弥生時代中期には、富沢遺跡をはじめ、南小泉遺跡、中在家南遺跡、高田Ｂ遺跡、西台畑遺跡など、名取川・広瀬川下流域に、安定した農耕村落が多数形成される。

古墳時代にも、引き続き宮城野海岸平野に多数の集落が営まれる。そのなかで遠見塚古墳周辺に展開する南小

泉遺跡は、古墳時代を通して継続する大規模な遺跡で、この地域の基幹集落であったと考えられる。陸奥国建国時には郡山遺跡が最初の行政拠点施設として機能し、国府が多賀城に移ってからも、陸奥国分寺、陸奥国分尼寺が造営されるなど、この地域は、引き続き陸奥国支配の重要な拠点であり続けた。

(2) 仙台湾周辺における縄文時代早期の遺跡

青葉山遺跡E地点に縄文集落が営まれた早期後葉は、いわゆる縄文海進のピーク時にあたり、本遺跡からも直線距離にして約5キロの位置まで、当時の海岸線が迫っていた(図10)。宮城県内の沖積平野の形成過程については、松本秀明により海水準の変動と河川の堆積作用の両面から研究が行われている(Matsumoto1981、松本秀明・伊藤晶文1998)。松本によれば、沖積平野の形成期において、内湾が最も拡大した時期と海面の高頂期とは必ずしも一致せず、仙台湾周辺では、約7600～7800年前に内湾が最も拡大したのに対して、海面高度が最高位に達したのは、それから約2500年も後の約5000年前頃であるという。

最も内湾が拡大した早期後葉には、阿武隈川下流域の槻木低地や角田低地にまで内湾が入り込んでいた。阿武隈川下流域に分布する貝塚の貝種の変化から、阿武隈川による堆積作用が進み河口部が徐々に狭められた結果、早期末には、角田低地には汽水化した湖が成立し、槻木低地には鹹水の内湾(「旧槻木湾」)が形成されたことが推定できる。旧槻木湾も、前期初頭には汽水化したと考えられる。阿武隈川下流域の貝塚形成のピークは、早期末葉から前期初頭の上川名II式期にかけての時期といえる。近年、角田市小坂に位置する土浮貝塚の発掘調査が、東北大学考古学研究室と角田市教育委員会により行われ、この地域の貝塚の様相が明らかになりつつある(須藤隆編1994)。阿武隈山系を挟んだ東側の外洋に面する地域では、これまでのところ早期の遺跡は発見されていない。また、愛島丘陵の東縁部には、当時の海岸線にそって遺跡が点在している。

一方、松島湾には湾内の堆積作用を推進する大河川がなく、海水準が現在よりマイナス10mまで下がった早期後葉には、松島湾自体は現在に比べかなり狭かったと考えられる。松島湾周辺の早期の貝塚は、現在、七ケ浜半島先端の吉田浜貝塚(後藤勝彦1968)、島嶼部の船入島貝塚(斎藤忠1930、角田文衛1936)、湾奥部の新富山貝塚(伊東信雄1940)が知られる程度である。しかし、その後に海水準が上昇したことからみて、当時の海岸付近の遺跡の大部分は、現在海面下に没していることになり、必ずしも遺跡数が少なかったとはいえない。前期以降の貝塚の分布密度の高さからみて、早期にも海岸付近に多数の貝塚が形成された可能性は高いと考えられる。なお、船入島貝塚では、船入島下層式期の埋葬人骨が発見されている。

内陸部では、名取川流域とその南の円田盆地周辺で多数の早期の遺跡が発見されている。

名取川流域では、下ノ内浦遺跡から日計式押型文土器とそれにともなう竪穴住居跡2棟、土坑7基が発見され、早期前半から沖積地の自然堤防上に集落が営まれていたことが瞭認された(吉岡恭平編1996)。早期後葉には遺跡数が急激に増え、末葉にかけてさらに増加の傾向をみせる。この地域では、青葉山遺跡E地点以外に、上ノ原山遺跡(宝浜1995)、川添東遺跡(宝浜ほか1997)で早期後葉の住居跡が発見されている。また、北前遺跡からは、縄文条痕文土器に伴って早期末葉の住居跡が8棟検出されている(佐藤・斎野編前掲)。住居跡以外では、下ノ内浦遺跡、上ノ原山遺跡で、陥し穴状遺構が発見されている。いずれも住居跡に比較的近接した場所で見つかっており、早期の集落のあり方や狩猟方法を考える上で注目される。

円田盆地周辺では遺跡の踏査が繰り返し行われており、早期の遺物は多数の遺跡で発見されている(片倉・中橋・後藤編1976)。しかし、早期の遺跡の発掘調査例そのものは少なく、高い密度で分布する遺跡をどのように評価するかは今後の課題である。この地域では、白石市松田遺跡と蔵王町明神裏遺跡が特に注目される。松田遺跡では、日計式押型文土器を伴う早期前葉の竪穴住居跡3棟、竪穴状遺構3基が検出され、押型文から沈線文土器への過渡期にある土器群が明らかにされている(土岐山武1982、丹羽茂1982)。明神裏遺跡では、無文土器(明神裏1式)、田戸下層式および三戸式、波状口縁の深鉢にく状連続刺突文や楕葉形の刺突文、貝殻刺突を伴う隆帯文

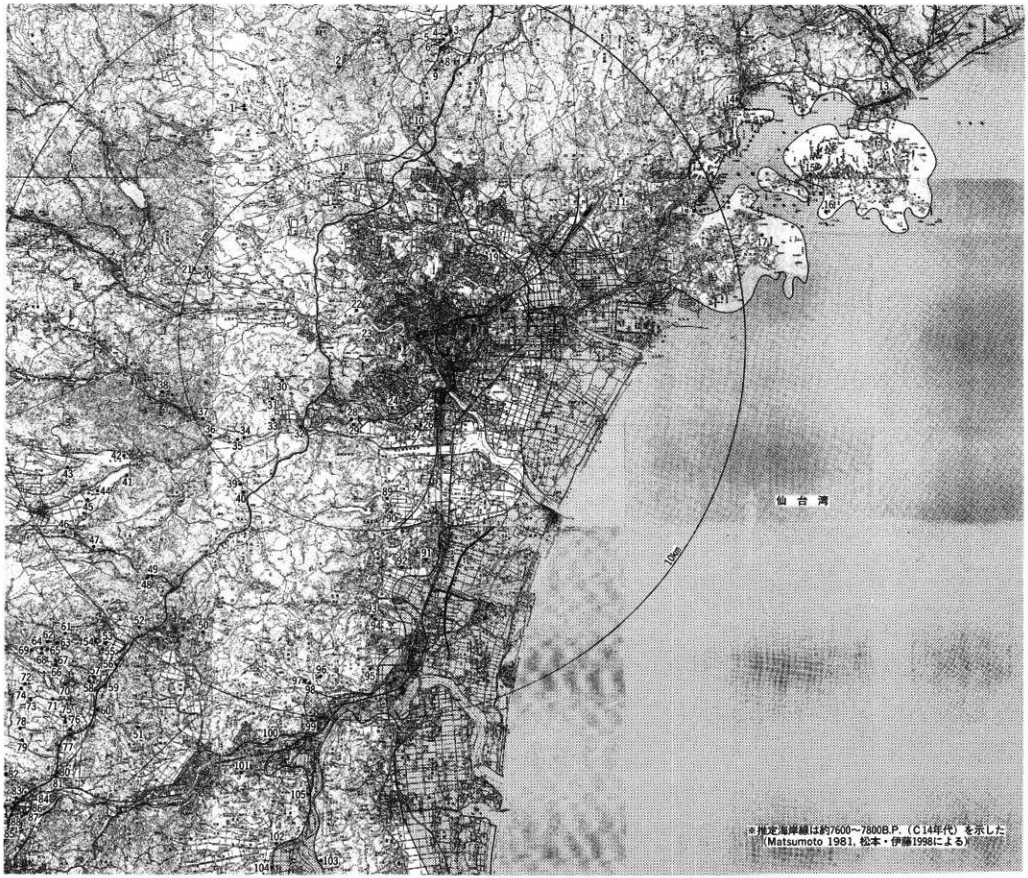


図10 仙台湾周辺の縄文時代早期遺跡分布図

Fig.10 Distribution of sites belonging to the Initial Jomon period around Sendai Bay

表2 仙台湾周辺の縄文時代早期遺跡地名表(1)

Tab.2 List of sites belonging to the Initial Jomon period around Sendai Bay(1)

※遺跡番号は遺跡地図（図10）に対応する

番号	遺跡名	所在地	I	II	III	IV	備考
1	西上野原	仙台市泉区福岡字西上野原			?	?	
2	摺萩	黒川郡大和町吉床字摺萩				?	
3	太子堂下	黒川郡富谷町二ノ関字太子堂下					
4	東沢A	黒川郡富谷町富谷字東沢			○	○	
5	東沢B	黒川郡富谷町富谷字東沢		○	?	?	
6	仏所	黒川郡富谷町富谷字仏所			?	?	
7	原前南	黒川郡富谷町穀田字原前南			?	?	
8	掛船沢	黒川郡富谷町富谷字掛船沢					
9	朽木沢	黒川郡富谷町富谷字朽木沢			○	○	
10	大清水	黒川郡富谷町富谷字大清水上			?	?	
11	郷楽	宮城郡利府町森郷字郷楽				○	
12	高松貝塚	桃生郡鳴瀬町高松字山崩沢				○	
13	金山貝塚	桃生郡鳴瀬町野蒜字亀岡				○	
14	新富山貝塚	宮城郡松島町松島字垣ノ内				○	
15	野々島貝塚	塩釜市浦戸野々島字平和田園				○	
16	船入島貝塚	塩釜市浦戸船入島				○	埋葬人骨1体(IV期)
17	吉田浜貝塚	宮城郡七ヶ浜町吉田浜字能浜		○	○	○	
18	紫山	仙台市泉区高森1丁目				○	
19	住吉	仙台市泉区南光台東3丁目			?	○	
20	蒲沢山	仙台市青葉区赤坂2・3丁目			?	○	
21	畑前B	仙台市青葉区芋沢字畑前					
22	坊主門	仙台市青葉区[illegible]字坊主門					
23	青葉山E	仙台市青葉区荒巻字青葉			○		本報告
24	高ノ口	仙台市太白区三神峯1丁目・西の平1丁目				○	
25	富沢	仙台市太白区富沢1丁目ほか			○	○	
26	下ノ内浦	仙台市太白区長町南4丁目	○				住居跡2、陥し穴状土坑(I期)
27	山口	仙台市太白区富沢1丁目				○	
28	北前	仙台市太白区山田字北前		○		○	住居跡8、土坑10(IV期)
29	山田上ノ台	仙台市太白区山田上ノ台	○	○	○	○	
30	梨野A	仙台市太白区茂庭字人来		○		○	土坑2、ピット3(IV期)
31	獺山B	仙台市太白区茂庭字獺山				○	
32	上ノ原山	仙台市太白区茂庭字上ノ原山			○	○	住居跡2(IIIorIV期)、陥し穴状土坑(IV期)
33	西前	仙台市太白区茂庭字門野			○		
34	川添東	仙台市太白区茂庭字川添東			○	○	住居跡4(III期2,IV期1,III or IV期1)
35	大貝中	仙台市太白区坪沼字大貝中					
36	砂田	仙台市太白区坪沼字砂田					
37	中谷	仙台市太白区茂庭字中谷				?	
38	行沢	仙台市太白区坪沼字行沢					
39	館前東	仙台市太白区坪沼字館前東					
40	中神	仙台市太白区坪沼字中神北					
41	鍛冶谷山	柴田郡川崎町支倉字鍛冶谷山					
42	下原	柴田郡川崎町小野字下原		○	○	○	
43	中沢	柴田郡川崎町川内字中沢				○	
44	下窪	柴田郡川崎町小野字下窪	○	○	○	○	
45	河原田	柴田郡川崎町小野字河原田		○			
46	川村開拓A	柴田郡村田町足立字北向				○	
47	大平山D	柴田郡村田町足立字大平山					
48	寺入B	柴田郡村田町足立字寺入					
49	寺入A	柴田郡村田町足立字寺入					
50	賀籠沢	柴田郡村田町小泉字賀籠沢					
51	小林	柴田郡大河原町小山田字小林				○	
52	山崎	刈田郡蔵王町小村崎字山崎			?	?	
53	中組	刈田郡蔵王町円田字新石崎・字屋敷					
54	北境	刈田郡蔵王町円田字助六壇			?	?	
55	本宿前	刈田郡蔵王町本宿前・石橋					
56	中沢A	刈田郡蔵王町平沢字中沢			?	?	
57	戸の内脇	刈田郡蔵王町塩沢字戸の内脇・字荒町			○	○	
58	天王	刈田郡蔵王町塩沢字天王・字上野			?	?	
59	大山	刈田郡蔵王町塩沢字大山		○			
60	東山	刈田郡蔵王町矢附字東山・字東光勝					
61	三本槻	刈田郡蔵王町平沢字三本槻・字山中		○		○	
62	槻無藤	刈田郡蔵王町円田字和大原			?	?	
63	円田入B	刈田郡蔵王町円田字濱上			?	?	
64	手代木	刈田郡蔵王町円田字手代木				○	
65	手代木B	刈田郡蔵王町円田字上楢根		○			
66	上曲木A	刈田郡蔵王町円田字布越前			?	○	
67	上曲木B	刈田郡蔵王町円田字上曲木			?	?	
68	上曲木C	刈田郡蔵王町円田字上曲木・字上楢根		○			
69	宮林	刈田郡蔵王町円田字西山			?	○	
70	西裏	刈田郡蔵王町円田字西裏			?	?	
71	臼内前	刈田郡蔵王町曲竹字天神			○		
72	小野入	刈田郡蔵王町曲竹字小野入		○	○	○	
73	鍛冶沢	刈田郡蔵王町曲竹字鍛冶沢・字青ノキク					
74	鍛冶沢北	刈田郡蔵王町曲竹字丸沢山		○	○	○	
75	逆川	刈田郡蔵王町曲竹字小原			?	?	

表3　仙台湾周辺の縄文時代早期遺跡地名表(2)

Tab.3 List of sites belonging to the Initial Jomon period around Sendai Bay(2)

※遺跡番号は遺跡地図（図10）に対応する

番号	遺跡名	所在地	I	II	III	IV	備考
76	上原田	刈田郡蔵王町宮字上原田		○			
77	二里泉	刈田郡蔵王町宮字二里泉				○	
78	駒行寺	刈田郡蔵王町宮字駒行寺			?	?	
79	沢入	刈田郡蔵王町宮字沢入				○	
80	明神裏	刈田郡蔵王町宮字明神裏		○	○	○	
81	馬場北	刈田郡蔵王町宮字馬場・字明神脇					
82	大池野	白石市福岡深谷字大池野		○	○	○	
83	鍬田前	白石市福岡深谷字鍬田前		○	○	○	
84	鉄毛	白石市福岡深谷字鉄毛				○	
85	高野	白石市福岡深谷字高野		○			
86	松田	白石市福岡深谷字松田	○	○			住居跡3、竪穴状遺構3（I期）
87	御所内	白石市福岡深谷字御所内					
88	青木	白石市福岡深谷字青木					
89	米光園	名取市高舘川上字米光園					
90	今熊野	名取市高舘川上字熊台・字北台・字鴻ノ巣	○				
91	小豆島貝塚	名取市愛島小豆島字大木戸				○	
92	字貫崎貝塚	名取市愛島笠島字字貫崎		○	○	○	
93	北原	石巻市長岡字北原・三色吉字杉の内				○	
94	杉の内	岩前市一色吉字杉の内				○	
95	畑堀上貝塚	岩前市北長谷字畑堀上				?	
96	下川名貝塚	柴田郡柴田町上川名字下鄕りが・字新蔵田				○	
97	中居貝塚	柴田郡柴田町入間田字中居				○	
98	金谷貝塚	柴田郡柴田町入間田字金谷前				○	
99	松崎貝塚	柴田郡柴田町槻木字松崎		○	○	○	
100	岩ノ入	柴田郡柴田町船岩大字岩ノ入					
101	馬ケ丘	柴田郡柴田町船岡西2丁目					
102	鍛上山	角田市岡字内越					
103	平口貝塚	角田市坂津田字平口				○	
104	花島貝塚	角田市花島字川端			○	○	
105	土屋貝塚	角田市小坂字土屋・字熊野前				○	

※表中の早期の時期区分は以下の通りである。

I期（押型文系土器期）

II期（貝殻沈線文系土器期）：「雲山1式」・「明神裏III式」・「大寺式」などに相当

III期（貝殻条痕文系土器期）：「槻木1」の新しい部分・「雲山2式」の古い部分などに相当

IV期（縄文条痕文系土器期）：「雲山2式」の新しい部分・「槻木期式」・「船入島下層式」などに相当

などを特徴とする土器（明神裏III式）、船入島下層式が層位的に検出されたという（林謙作1962）。

以上のように、この地域では、早期の遺跡の調査、発見例は未だ断片的な域を脱しておらず、早期の集落に関して本格的な議論を行える状況にはない。沖積地では、その後の海水準の変動や平野部の沖積作用のために遺跡の発見が困難である。現在までに発見されている遺跡の多くは丘陵の裾や盆地に集中しており、青葉山遺跡E地点のように標高100mを超えるような丘陵部にどの程度の密度で遺跡が分布しているのかもまた今後の大きな課題である。

2. 調査経緯

(1) 調査地点の位置

調査地点は、川内から宮城教育大学・青葉台へ向かう道路から理学部に入る入口のすぐ西側で、川内からの道路と、地学系学科教室南側の道路に挟まれた区域の東端部にあたる。地学系・生物学系学科教室を挟んだ北側には、1984年度に旧石器時代の陥し穴状遺構が検出された青葉山遺跡E地点第1次調査地点、すぐ南側には昨年度調査し縄文時代早期～平安時代の遺物が発見された第2次調査地点、東北東には1984年度に旧石器が出土した青葉山遺跡B地点がある（図4・図11）。

(2) 調査方法と経過

昨年度の2次調査ですぐ南から縄文時代早期～平安時代の遺物が検出されている(年報11)。本地点は斜面のより上方の平坦地に近くなる部分であり、遺構・遺物の発見される可能性が高いと考えられたことから、昨年度末付けでE地点の遺跡範囲に含められることになったものである。したがって当初から本調査の体制を組み、縄文時代の遺物包含層は全域を調査し、旧石器時代の遺構・遺物の存在の確認のためそれ以下の火山灰層については1割の面積を目安に試掘調査を行うこととした。

調査は工事日程の都合から標本館建物本体部分と周辺整備部分とに分けて行うこととなり、前者を1期、後者を2期として前者から着手した。1期調査区は北半のA～P－1～7区とA～J－8～10区、2期調査区はそれ以南である。

1994年3月17日から基準点設置、機材搬入などを開始し、北辺の道路の方向に合わせて3mのグリッドを設定した。表土（盛土）を重機で除去したのち、遺物包含層の2層から手掘りで調査を進めた。2層の遺物を取り上げる際には、分布の傾向を把握するためすべて出土位置と標高を記録した。2層を掘り下げつつ遺構確認を行い、ほとんどは3層上面で確認した。A～H列の南東部は既に削平が及んで1段低くなっており、遺構・遺物の残存が認められなかった。この範囲についてのみ平板を用いて100分の1平面図を作成した他は、調査区断面図、遺構平面図・断面図とも20分の1で実測した。2層を掘り上げ、3層上面が検出された段階で地表面の標高を記録した。

火山灰層の層序の観察と、旧石器時代遺物・遺構の有無を確認するため、図14に示したように調査区全体をカバーする形で3層以下の試掘調査を行った。その面積は合計約136m²で全体の約7％である。

1期調査区では当初西端をO列までとして調査を開始して調査区断面図もO列西壁で作成したが、その後6月になってP列まで拡張することになった。2期調査区では当初からP列まで調査対象としたが、断面図を両調査区でつなげるためO・P列間にベルトを残した。さらに10月には標本館本体に暖房管をつなぐ工事が必要となったため、Q－2・3区にまたがって3×3mの範囲の拡張を行った。当時調査が終了していたP列以東は標本館建設のため削平されて急崖となっていたため、既調査区と完全につなぐことは安全確保の面から断念した。そのためこの調査区とP列との間はごく一部未調査部分がある。また両調査区とも工事とのかねあいや排土置き場の都合等から表土の除去も数回に分けて行っている。

調査を進めると、1期調査部分で、2000点を超える縄文時代早期の遺物と、宮城県内でも例の少ない当時の住居跡2棟が検出されたため、6月11日には現地説明会を開催して一般公開し、天候にも恵まれて106名の参加を得た。6月後半には2期調査区に着手した。7月初めには1期調査区で標本館建物の建設が本格的に始められ、すぐ北側で工事の行われるなかでの調査となった。また、8月からは川内北地区での課外活動施設新営に伴う調査（BK4本調査初年度）が開始されて2現場並行することになり、調査員2人から1人の体制となった。そのため調査の遅れが心配されたが、2期調査区は遺構・遺物の分布もまばらであったため、作業員を増員することで効率をあげるよう努力し、10月24日にはすべての調査を終えた。

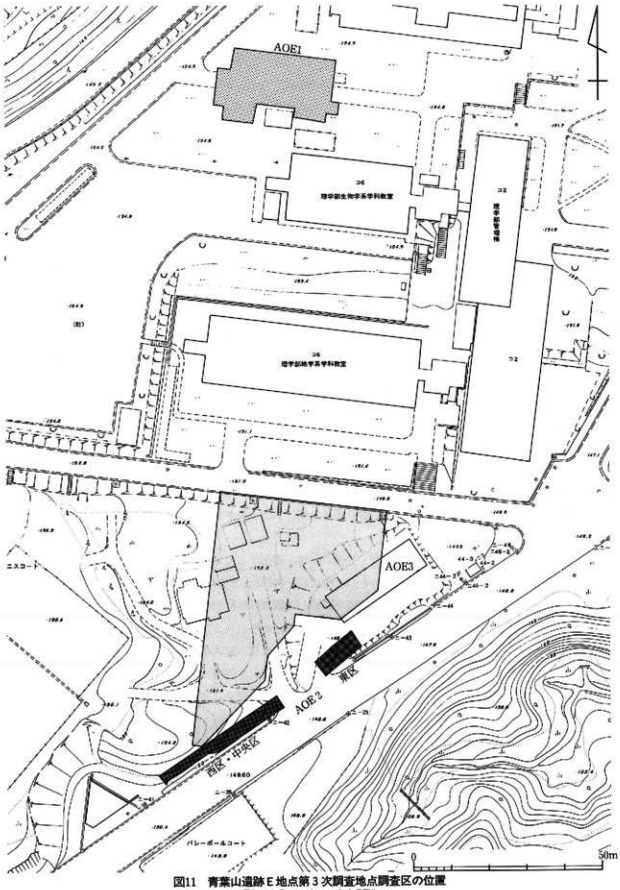


図11　青葉山遺跡E地点第3次調査地点調査区の位置

Fig.11 Location of AOE3

AOE3 i.e. the third excavation of Aobayama site Loc.E
AOE2 i.e. the second excavation of Aobayama site Loc.E
AOE1 i.e. the first excavation of Aobayama site Loc.E

3. 基本層序

基本層序は、13層に分けられる。各層の特徴については、図12、13に示されている。

遺跡の立地の項で述べたように、本遺跡は、広瀬川の開析した河岸段丘のうち、最も古い青葉山段丘のなかで低いほうから2番目の面（II面）に位置する。遺跡の南東には、川内山屋敷へ向かって開く沢の谷頭が存在し、遺跡は、その沢に面する緩斜面に立地している。そのため、調査区内においても、斜面の上方にあたる北西側と、下方に当たる南東側とでは、火山灰の堆積状況に大きな差異が認められる。

表土（1層）には、大学による盛土と、その下の旧表土が含まれる。本調査地点の北東に隣接する青葉山遺跡B地点の調査（年報2）や、同じく南西へ約300m離れた、大型計算機センター建設に伴う試掘調査では、盛土のなかから、江戸時代の遺物が少量ではあるが発見されており、盛土の一部は、仙台城二の丸跡にあたる川内地区からの客土であると考えられる。旧表土の上面からは、大学が移転する前にこの地に存在した開拓農家に伴う溝跡やゴミ穴などが見つかっている。また、平成8年度に実施した第6次調査（未報告）では、本調査地点の西側隣接地の旧表土面から、戦前の第二師団工兵隊が野戦演習に使ったと考えられる塹壕や、開拓農家で飼われていたと考えられるヤギの墓坑なども見つかっている。

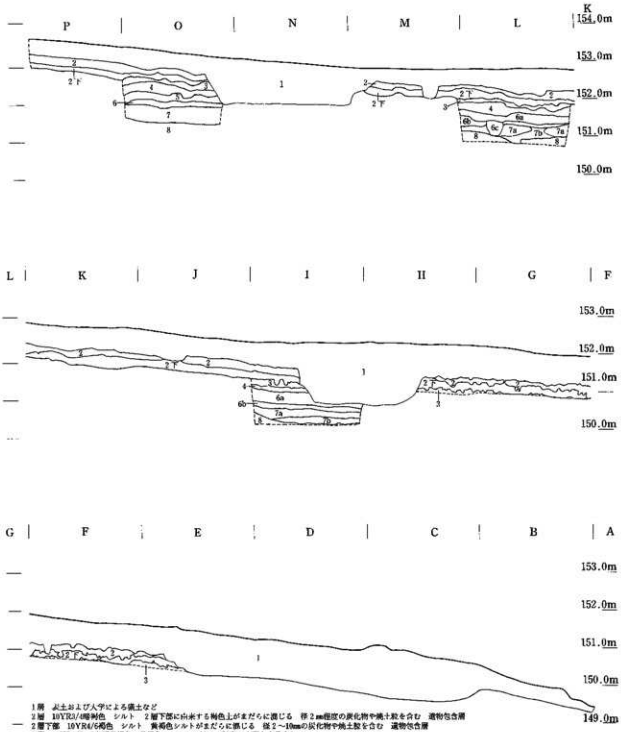
2層および2層下部としたものが、縄文時代早期や晩期の遺物、土師器を含む遺物包含層である。2層は、主に18列よりも北側に厚く、それより南にはほとんど分布していない。2層下部の上面では、風倒木の跡が見つかっており、2層は、その風倒木跡を覆う形で堆積している。

調査区の南東部分には、調査前に大学の仮設建物が存在しており、この部分では既に6層面まで削平されていた。

8層としたものが青葉山層と呼ばれる段丘礫層にあたる。段丘礫層の上面は必ずしも水平ではなく、最も低い調査区の南東部分で標高約148m、最も高いP－15区付近では同じく約151mを測る。3層から7層の堆積状況も場所によって異なり、斜面の上方にあたる調査区北西側の方が、斜面の下方にあたる南東部に比べ、良好な堆積状況を示す。

5層上面には、約26,000～32,000年前に降下したとされる川崎スコリア層（板垣ほか1980）がブロック状に認められる。5層までの堆積は、基本的に青葉山遺跡B地点と変わらないが、6層以下の堆積状況は、B地点に比べ非常に悪く、B地点で確認された愛島パミスは確認されなかった。

本地点では、3層以下で旧石器は発見されなかったが、隣接地では、これまでに旧石器時代の遺構、遺物が層位的に検出されている。3層上面では、B地点で晩期旧石器が3点検出されている（年報2）。3層下部から4層上面では、E地点の第5次調査で、石刃技法の発達した石器が10点出土している（未報告）。B地点の5層上面からも、縦長の剥片を素材とした後期旧石器時代初頭の石器20点が出土している（年報2）。また、E地点の第1次調査では、5層上面と6層上面で、陥し穴状の遺構が4基検出されている。E地点の第5次調査では、川崎スコリア層と愛島パミスに挟まれた層序から、斜軸尖頭器を含む中期旧石器が出土している（未報告）。さらにB地点では、愛島パミスの約1m下の層序から、前期旧石器時代の剥片石器2点と叩き石1点が出土している（年報2）。本調査地点でこれらの旧石器が発見されなかった理由としては、本地点が元々居住にあまり適さない傾斜地に位置していたことや、本来旧石器を含む層が堆積していたが、何らかの理由でそれが失われたこと等が考えられる。



1層　表土および人学による盛土など
2層　10YR3/4暗褐色　シルト　2層下部に白米する褐色上がまだらに混じる　径2mm程度の炭化物や焼土粒を含む　遺物包含層
2層下部　10YR4/6褐色　シルト　黄褐色シルトがまだらに混じる　径2～10mmの炭化物や焼土粒を含む　遺物包含層
3層　10YR6/8～5/8明黄褐色～黄褐色　シルト　径10mm程度の小礫を少量含む
4層　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　3層に比べしまりが良く、白っぽい
5層　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　上面に川崎スコリアのブロックが認められる
6a層　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト
6b層　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　径3mm以下の砂粒を多量に含む
6c層　6b層にくらべ黄色みがややつよくしまりが悪い　他は6b層に同じ
7層　7.5YR3/8明褐色　シルト～砂質シルト　一部に8層に由来する砂礫がブロック状に認められ、部位による変異が大きい　マンガン粒を多く含む
7a層　10YR6/8明黄褐色　粘土質シルト　径5mm以下のマンガン粒をまんべんなく含む　下部は7b層に近く赤みが強まる
7b層　10YR5/8黄褐色　砂質シルト　7a層よりも赤みが強い　部分的にマンガン粒の集中が認められる
8層　礫層　掘り幸大の引際を多量に含む　上面の凹凸が著しい

図12　青葉山遺跡E地点第3次調査断面図(1)　調査区北壁

Fig.12 Cross section of excavation at AOE3(1)

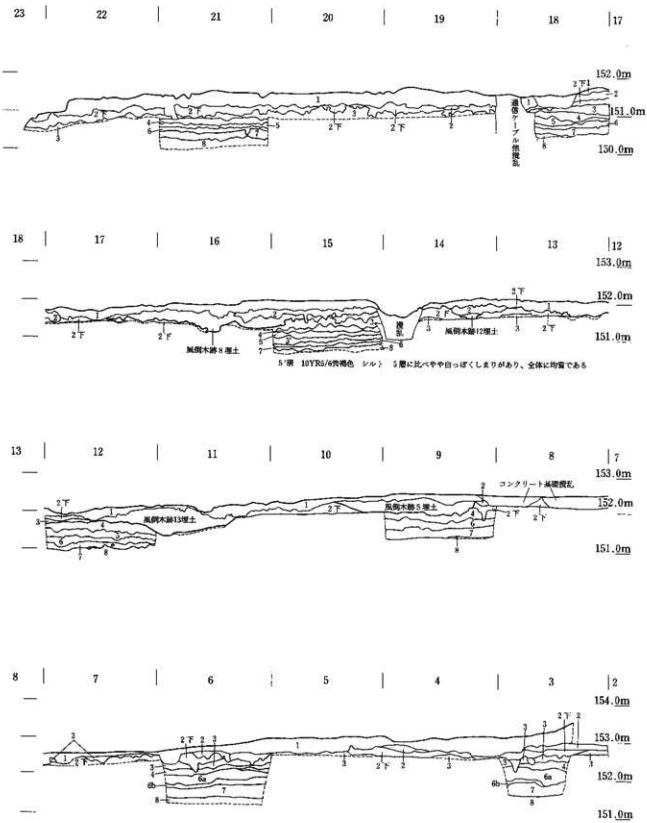


図13 青葉山遺跡E地点第3次調査断面図(2) OP列間南北ベルト東壁

Fig.13 Cross section of excavation at AOE3(2)

4. 検出遺構

(1) 遺構の分布

調査区は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。遺構は、調査区の北側に集中して発見されている（図14）。これらの遺構は、全て3層上面で確認されており、大部分は3層面から掘りこまれた可能性が高い。2棟の竪穴住居跡は、いずれも斜面の下方である調査区の北東部で検出された。この2棟の竪穴住居跡の距離は2m弱であり、近接している。

竪穴住居跡の西側では、80基を超す小ピットが検出されている。これらの小ピットの具体的な組み合わせやならびを捉えることは困難であるが、形状や埋土が竪穴住居跡の柱穴に類似するものが多数見られることから、その多くは柱穴になるものと考えられる。ただし、これらの小ピットの集中域では焼け面や焼土は発見されていない。

検出された10基の土坑のうち、3基は小ピットの集中域で、残りは全て小ピットの集中域の南側で発見された。

後述するように、小ピットの集中域の南側で発見された土坑のなかには、形態から貯蔵穴と考えられるものが含まれている。竪穴住居や小ピット群は、調査区外にも展開していた可能性が高いが、北側および南東側は既に削平されてしまっているため、遺構の有無を確認することはできない。

検出された遺構からは、南側の谷に向かって緩やかに傾斜する斜面に集落が営まれたことと、貯蔵穴が居住域からは分離され、住居よりもより斜面の上方に占地されたことが窺える。

(2) 住居跡

【1号竪穴住居跡】（図15、図版3）

E～G－4・5区において、3層上面から掘り込まれた竪穴住居跡を確認した。この竪穴住居跡の平面形は、長辺4.6m、短辺3.1mの隅丸長方形を呈し、床面積は約9㎡である。北西隅の壁際をピット11により破壊されている以外、他の遺構との重複はない。この地区は南西から北東方向に緩やかに傾斜しているため、南西側では、住居跡の壁の立ち上がりは比較的急で約30cmを測るものの、北東側では土砂の流失により壁が大きく失われ、皿状の窪みを呈する。床面は、西側が若干高めではあるが、ほぼ平坦である。

床面からは柱穴と考えられるピットが12基検出されているが、いずれも深さ20cm以下と浅い。このうち、ピット1～6は壁にかかる位置に掘られている。ピット2、8、9、5は、住居跡の中央やや南寄りを東西にほぼ一直線に列ぶ。また、ピット2、ピット5の北側には、各々対になると考えられるピット1、ピット6が存在し、ピット1と6を結んだラインは、ピット2、8、9、5を結ぶラインとほぼ平行となる。本住居は、この2列の柱列を基本的な骨組みとし、さらにピット7、3、4といった壁際に位置する柱で支えられていたと考えられる。なお、本住居からは炉跡や壁溝、建て替えの痕跡は発見されていない。

本住居跡の埋土は、大きく上下2層に分けられた。下層の埋土1b層は、壁際の堆積土で、住居跡の中央部や斜面の下方にあたる東壁付近には認められない。埋土上層の1a層は、浅い窪みとなった住居跡をほぼ完全に覆っており、住居跡の中央部に最も厚く堆積している。

本住居跡の床面および覆土中からは、縄文土器104点、石器72点が出土している（図38・51・52、図版8・22・23）。これらの出土遺物から、本住居跡の年代は、縄文時代早期後葉と判断される。

【2号竪穴住居跡】（図16、図版4・5）

F～H－2・3区において、3層上面から掘り込まれた竪穴住居跡を確認した。この竪穴住居跡の北側は道路により既に削平されており、中央部も暖房管により1.5mの幅で東西方向に大きく破壊されていた。そのため、住居跡の平面形は必ずしも明確にし得なかったが、本来、南東－北西方向に長い隅丸長方形であったと判断される。その場合、長辺は約6m、短辺5m弱、床面積は20㎡程度と推定され、1号竪穴住居跡よりかなり大きめである。

図14　青葉山遺跡E地点第3次調査遺構配置図
Fig.14 Plans of archaeological features at AOE3

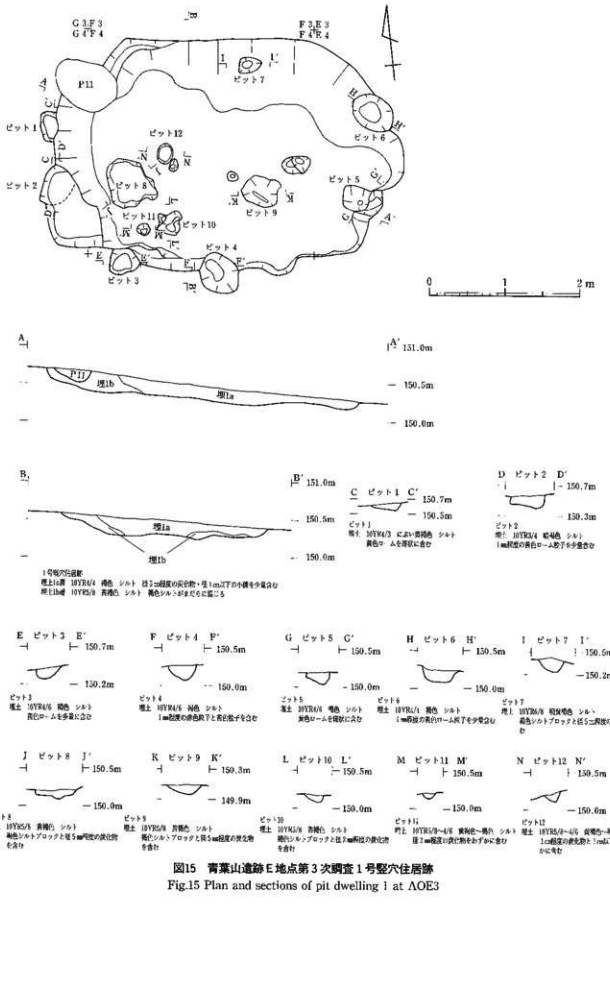


図15　青葉山遺跡E地点第3次調査1号竪穴住居跡

Fig.15 Plan and sections of pit dwelling 1 at AOE3

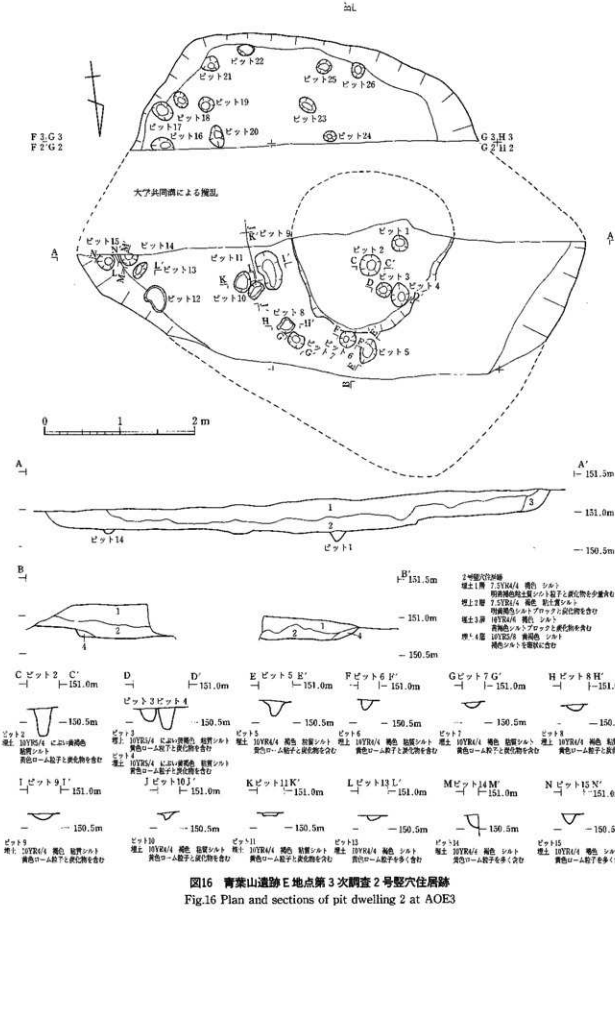


図16　青葉山遺跡E地点第3次調査2号竪穴住居跡

Fig.16 Plan and sections of pit dwelling 2 at AOE3

本住居跡の壁の立ち上がりは、約30cm前後を測る。本住居の床面の中央部には、直径約２m、深さ10cm程度の浅い窪みがある。この窪みの底面は平坦で、東よりの位置には、柱穴と考えられるピットが４基（ピット１～４）検出された。柱穴と考えられるピットは、他に、この窪みの北側に接する場所と、住居跡の東際に沿って検出されたが、中央の窪みより西側では検出されなかった。また、本住居跡の北際で検出されたピット12からは、442点（約30ℊ）もの多量のチップが埋土上部から集中して出土した。ピット12は、石器製作により生じたチップを廃棄するための施設として使われたと考えられる。住居跡中央の浅い窪みには、焼土が全く認められないうえ、窪み内に４本以上の柱が存在することなどから、ここに炉が存在したとは考えにくい。柱の配置を推定することは困難であるが、１号竪穴住居跡と様相が異なり、壁際に巡る細い柱が上屋を支える上で重要な役割を果たしていた可能性がある。なお、本住居跡からは、壁溝や建て替えの痕跡は発見されていない。

本住居跡の埋土は、４層に細分できたが、埋土３層と４層は壁際の堆積土であり、住居跡を大きく覆う層としては、埋土１層と２層の２枚である。

本住居跡からは、縄文土器160点、石器1400点が出土している（図36・37・53・54、図版８・９・24・25）。出土した石器のうち、173点が床面、442点は床面のピット12に集中しており、本住居内で石英安山岩を素材とした石器製作が行われた可能性は非常に高い。また、本住居跡の埋土２層からは、底部を除きほぼ全体像を窺い知ることのできる土器が出土している（№242：図36－１、図版９）。本住居の年代は、出土遺物から、縄文時代早期後葉と判断される。

⑶　土坑

調査時に土坑の名称を付したものから、風倒木跡と後世の撹乱を除いて、最終的に土坑と認定したものは、次の10基である（図17・18、図版６・７）。

【１号土坑】

Ｉ－７・８区で検出された。長軸約２m、短軸約1.5mの楕円形を呈し、３層上面からの深さは約30cmである。埋土は上下２枚に分かれ、下層から縄文土器の細片が１点出土している。

【４号土坑】

Ｋ－４～６区で検出された。長軸約5.7m、短軸約1.4mで、南北に長い長楕円形を呈する。３層上面からの深さは約80cmで、断面形は逆台形を呈する。埋土は８層に細分され、埋土中からは、縄文土器の細片６点とフレイク３点、チップ１点が出土している。

【６号土坑】

Ｌ－５・６区で検出された。長軸約２m、短軸約1.3mで、南北に長い楕円形を呈する。３層上面からの深さは深い部分で70cm程あるが、底面の凹凸は著しい。縄文土器の細片が２点出土している。

【７号土坑】

Ｊ－10区で検出された深さ約20cmの不整形を呈する浅い落ちである。遺物は出土していない。

【９号土坑】

Ｎ－７区で検出された深さ約10cm、長軸約１m、短軸約0.7mの楕円形を呈する浅い落ちである。遺物は出土していない。

【10号土坑】

Ｐ－６区で検出された。東側を後世の撹乱で大きく破壊されており、全体の形状や大きさは不明である。埋土は上下２枚に分かれる。遺物は出土していない。

【15号土坑】

Ｌ－９区で検出された。直径約1.6mの円形を呈する。３層上面から底面までの深さは約60cmあり、断面形は逆

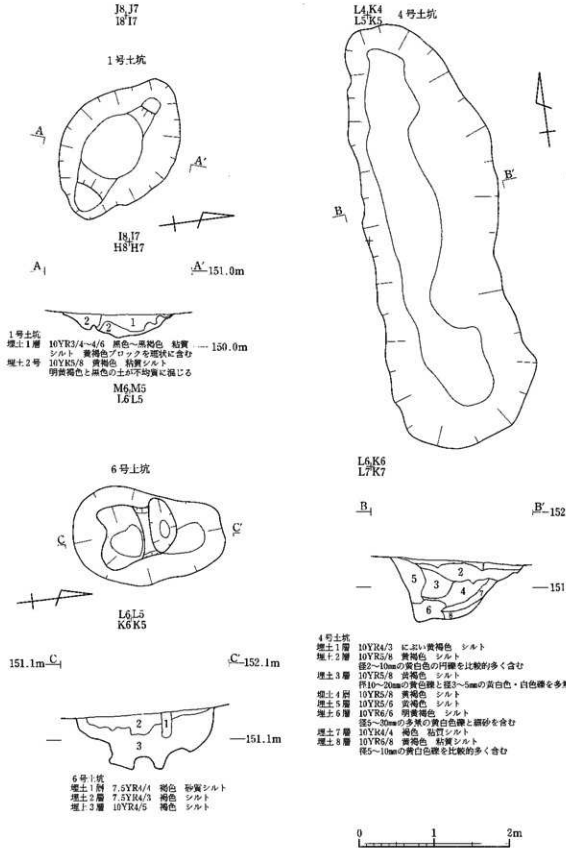


図17 青葉山遺跡E地点第3次調査1、4、6号土坑
Fig.17 Plans and sections of pit 1, 4 and 6 at AOE3

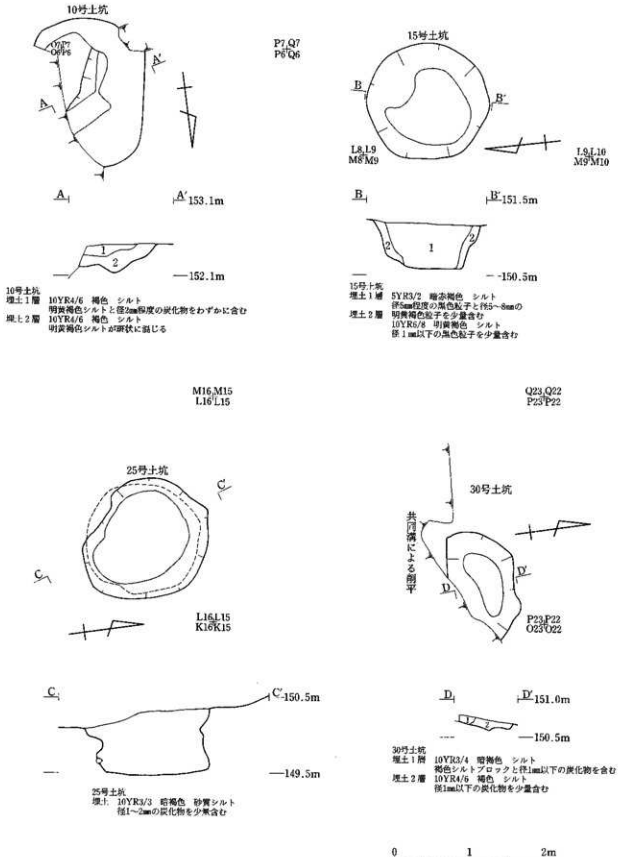


図18 青葉山遺跡E地点第3次調査10、15、25、30号土坑

Fig.18 Plans and sections of pit 10, 15, 25 and 30 at AOE3

台形である。埋土は壁際と中央部との2枚に分かれる。遺物は出土していない。

【17号土坑】

L－6区で検出された深さ約35cm、長軸約2m、短軸約1mの南北に長い長楕円形を呈する遺構である。遺物は出土していない。

【25号土坑】

L－16区で検出された。直径約1.7mの円形を呈する。断面は、中程で狭まり、底で再び広がる形態を呈し、底面はほぼ水平である。3層上面から底面までの深さは、約75cmである。遺物は出土していない。形態からみて貯蔵穴と考えられる。

【30号土坑】

P－23区で検出された浅い不整形の窪みである。南東隅を大学の共同溝により削平されている。埋土は上下2枚に分かれ、どちらにも炭化物が含まれる。遺物は出土していない。

(4) ピット

前述の通りピットの多くは、7列以北の調査区北側で発見されている。8列以南では、O・N－10区とP－12区付近にそれぞれ数基みられる程度である。後述するように、包含層の遺物の密度は、7列以北の調査区北側で高く、ピットと遺物の分布はほぼ重なり合う関係にある。7列以北で検出された88基のピットの分布を詳細に検討してみると、7列以北のなかでも、分布に偏りが認められる。すなわち、ピットは、4・6・17の3基の土坑周辺にはあまり認められず、あたかも3基の土坑を中心とする径10m程度の空白域をとりまく形で環状に分布する。2棟の竪穴住居跡は、この環状のピットの集中域の外側、北東部分に位置している。これらピットの多くは、柱穴と考えられるが、ピットの周辺には、竪穴状の掘り込みや、焼土や灰など炉跡の痕跡は認められない。また、2棟の竪穴住居跡の埋土や、その上の包含層には、石英安山岩を主体とするチップやフレイクが数多く発見されているのに対して、ピットの集中域では、土器に比べ石器の出土量は少ない。このことから、建造物の具体的な姿や性格を特定することはできないが、ピット集中域に存在した建物は、石器の製作を含めた日常生活が営まれる竪穴住居とは異なる機能を有していたと考えられる。

(5) 竪穴住居跡の検討

ここで本遺跡で検出された縄文時代早期後葉の2棟の竪穴住居跡について、周辺の遺跡の例と比較し検討を行いたい。

これまで宮城県内で確認された住居跡で最も古い段階のものは、日計式押型文土器に伴う住居跡で、白石市福岡の松田遺跡（丹羽茂1982、土岐山武1982）で3棟、仙台市太白区富沢南の下ノ内浦遺跡（古岡泰平編1988）で2棟検出されている。松田遺跡の竪穴住居跡は、2棟が隅丸長方形を、1棟は隅丸方形を呈する。隅丸長方形の住居は、大きい方が長軸4.8m、短軸4.4mで、小さなものは長軸4.75m、短軸3.2mを測る。隅丸方形の住居は1辺が約3.5mである。いずれも住居内部に明確な炉跡を持たない。3棟の住居跡のうち、明確な柱穴が検出されたのは1棟のみである。2棟の住居跡の床面に石皿が残されていた点や、住居跡以外に竪穴状遺構3基が検出されたことが注目される。下ノ内浦遺跡の住居跡は、2棟ともに不整形で、長軸が3m以下と小さく、内部に明確な柱穴や炉跡が検出されていない。

貝殻条痕文土器をともなう早期後葉の住居跡は、本遺跡のほか、仙台市太白区茂庭の川添東遺跡で2棟検出されている（主浜光朗ほか1997）。川添東遺跡の本時期の竪穴住居跡2棟は、どちらも隅丸長方形を呈する。規模は、大きいほうが、長軸5.6m、短軸4.6mで、小型のものは、長軸4.8m、短軸4.3mを測る。ともに住居跡の中央付近にやや深めの主柱穴を持ち、壁際に内傾する多数の壁柱穴が巡る。大きいほうの住居跡では、ほぼ中央の位置

で焼土が検出されているが、明確な炉跡とはみなされていない。いずれも床面に板状の石皿が残されていた点や、大きい方の住居跡が建て替えを行っている可能性がある点などが注目される。

縄文条痕土器をともなう早期末葉の住居跡は、仙台市太白区山田の北前遺跡と、同じく茂庭の上ノ原遺跡で検出されている。北前遺跡では早期末葉の住居跡が8棟検出され、切り合いや出土土器の内容から、同一型式内において2時期の変遷が認められるとされた（佐藤洋・斎野裕彦1982）。発見された住居跡は、いずれも隅丸長方形ないし不整方形を基調とする点では共通するが、大きさでは長軸が5～6mを超す大型の住居跡と3～3.5m程度の小型の住居跡とに分かれる。柱穴の配置はあまり明確に捉えられていないが、8棟のうち5棟の住居跡は、床面に浅い土坑を伴っている。炉跡は大型の住居跡でのみ発見されており、大型の住居跡については、柱穴の数が多いことや、多数の石器を伴っていることから、他の住居跡とは区別され、共同作業場や集会場等の性格を持つものではないかとの指摘がなされている。川添東遺跡では、この時期の住居跡が1棟検出されている。この住居跡は、一辺が幅広となる歪んだ隅丸方形を呈する。床面からは、住居跡の中央部を取り囲む形で主柱穴とおもわれる深めの柱穴が5基、壁際には一部壁にかかる形で多数の壁柱穴がそれぞれ見つかっている。住居跡内で炉跡は確認されていない。

このほかに、早期後葉か末葉か、所属時期の区別がつかない住居跡が、仙台市太白区茂庭の上ノ原山遺跡に2棟、川添東遺跡に1棟存在する。上ノ原山遺跡の住居跡はいずれも隅丸長方形を呈し、1棟は長軸約3m、短軸約2.5m、もう1棟は、長軸約3m、短軸約2mを測る（宝珠光明1995）。ともに住居跡内に炉を有していない。

以上の検討から、この地域の早期の竪穴住居跡に関して、次のような特徴を指摘できる。

住居の形態は、基本的に方形を基調としており、本遺跡で検出された住居跡のように、隅丸長方形のものが一般的である。床面積は6㎡に満たないものから25㎡を超す大型のものまで認められるが、おおよそ9㎡前後の小型のものと、20㎡程度の大型のものに分類され、前者が多い。本遺跡の場合、1号竪穴住居跡が小型のグループに、2号竪穴住居跡が大型のグループに属する。柱の本数や配置は、遺跡毎というよりは住居跡毎の変異が大きく、特定の傾向を示してはいない。ただし壁柱穴は、早期後葉から末葉の住居跡ではある程度認められるようである。本遺跡で検出された2棟の竪穴住居跡同様、ほとんどの住居跡が内部に炉を持たない。本遺跡の2号竪穴住居跡の床面で検出されたような浅めの落ちこみは、北前遺跡の早期末葉の竪穴住居跡では多く認められることから、ある程度普遍性を持った施設である可能性が高い。

5　出土遺物

(1)　遺物の出土状況

調査時には、表土（1層）および攪乱出土のものを除き、2層以下で出土した遺物については、出土位置を記録した。出土位置を記録した包含層出土遺物の点数は、2層で縄文土器307点、石器106点、2層下部で縄文土器1373点、石器1477点、土師器1点であり、遺構からは縄文土器287点、石器853点が出土している。この他に、2層下部には近代の磁器2点、近代の硬質陶器1点、2層には近世以降の可能性が高い土製品1点がそれぞれ混入していた。人工遺物以外では、大きめの礫についても出土位置の記録を採っており、2層で7点、2層下部で36点、遺構で23点を数える。後述するように、2層、2層下部から出土した遺物と、それらに覆われた遺構出土の遺物とでは、時間差を想定すべきような違いは認められない。2層、2層下部ともに、広い意味での遺物包含層には違いないが、ともに遺物の捨て場の堆積層のようなものではなく、2層、2層下部が形成される過程で、本来3層面や3層上面から掘り込まれた遺構に含まれていた遺物が、自然の営力により層のなかに取り込まれたものと理解される。

遺物の出土状況に関しては、個々の遺物の出土位置を呈示した上で議論を進める必要があるが、今回は時間的な制約から、遺物を土器と石器にわけ、それぞれグリッド、遺構単位で出土量を比較するにとどめた（図19～21）。本調査終了後、西側隣接地を平成6～8年度に調査しており（青葉山遺跡E地点第4～6次調査）、個々の遺物の出土位置についても、それらの報告を行うなかで改めて検討を行い、遺跡全体の空間利用を考える材料としたい。

2層自体調査区の北側に厚く堆積し、南側にはほとんど存在しないため、2層の土器や石器の出土も北側に偏る（図19）。調査区の北側で、H・I列付近を境に東西に遺物の分布が分かれるように見えるのは、単にこの部分の2層が攪乱により失われているためであり、特に意味はない。

2層下部の遺物の分布（図20）は、N～P－17～23区付近と9列以北の大きく2ケ所に分かれるが、土器、石器ともに圧倒的に後者の密度が高い。9列以北では、土器と石器で分布の密度に顕著な差が認められる。すなわち、2層下部の土器は、L～N－4・5区とG～I－5区付近で最も多く出土しているのに対して、石器の場合、より東側のF－2～4区付近への集中が顕著である。3層上面で検出された遺構と重ね合わせてみた場合、前者はピットの集中域に、後者は2棟の竪穴住居跡とほぼ重なり合う。

次ぎに遺構の遺物出土量について検討を行う（図21）。遺構に関しては、住居跡から最も多く出土している点では、土器と石器は共通しているが、詳細にみた場合、両者の分布には違いも認められる。すなわち、土器は、住居跡程ではないにせよ、L・K－5・6区付近の4・6・17号土坑やその周辺のピットからも出土するのに対して、石器は圧倒的に住居跡に集中し、住居跡以外からはほとんど出土していない。また、検出遺構の項で前述したように、2棟の竪穴住居跡を比べた場合、土器の出土量はさほど違わないにもかかわらず、石器の出土量は圧倒的に2号竪穴住居跡が卓越する。これは後述するように、2号竪穴住居で石英安山岩を主体とする石器製作が行われた結果である。F－2～4区付近の2層下部から集中して出土した石器に関しても、本来住居跡内に残されていたものが、原位置を失って上層に移動した可能性が高い。

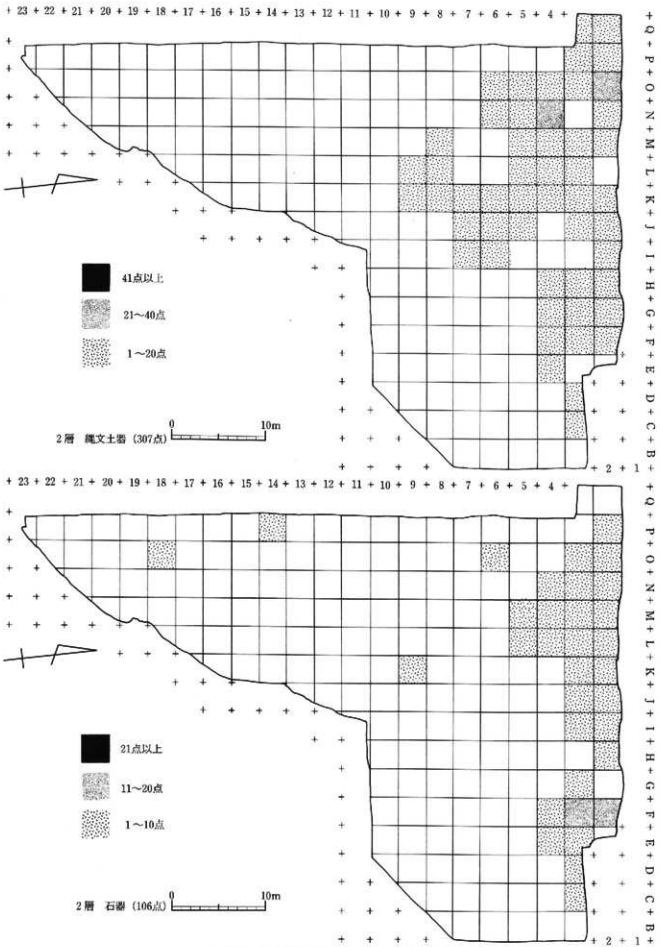


図19 青葉山遺跡E地点第3次調査グリッド別遺物密度図(1)

Fig.19 Density of remains at AOE3(1)

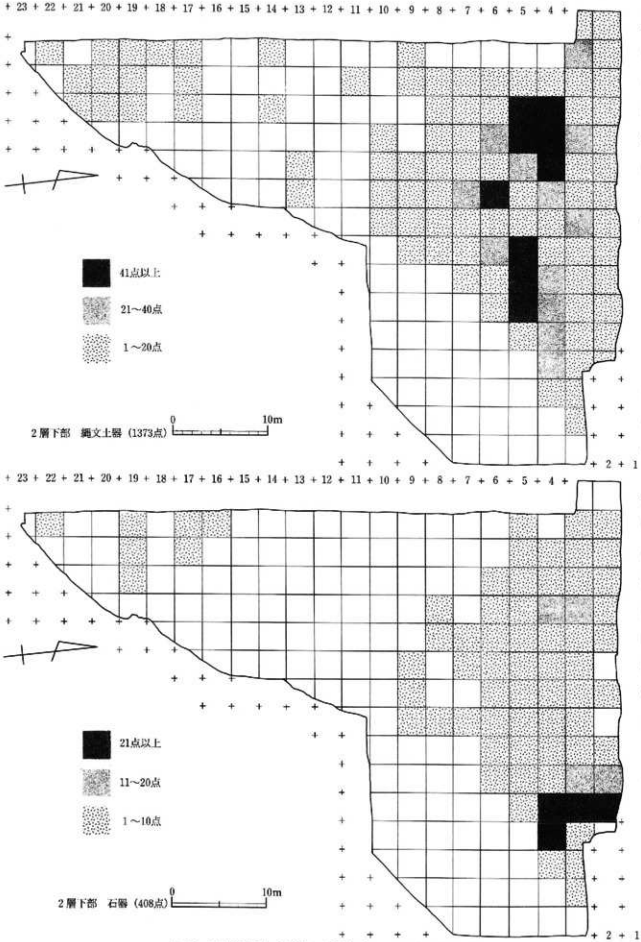


図20　青葉山遺跡E地点第3次調査グリッド別遺物密度図(2)
Fig.20 Density of remains at AOE3(2)

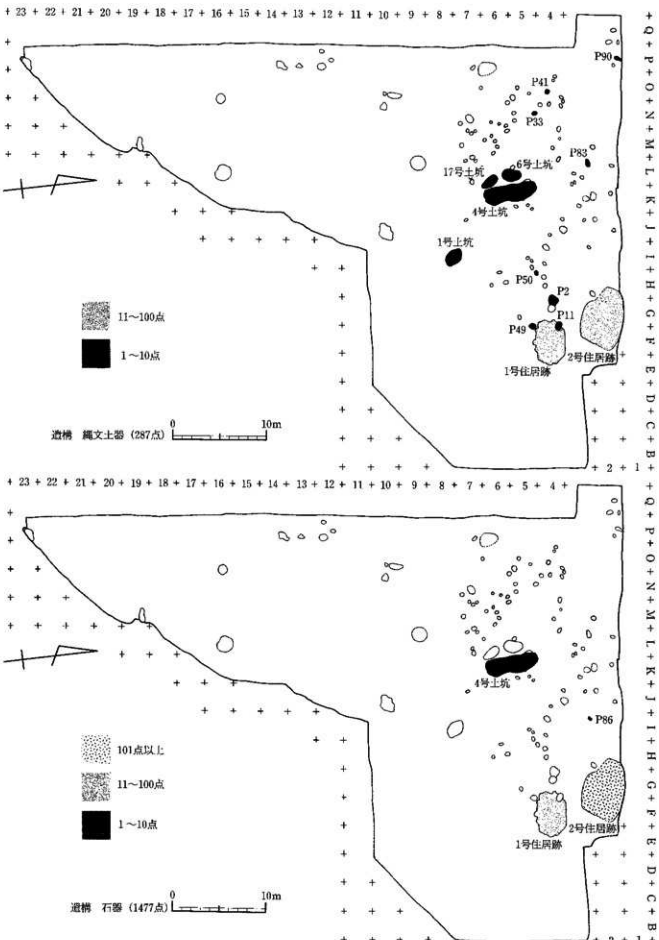


図21 青葉山遺跡E地点第3次調査グリッド別遺物密度図(3)

Fig.21 Density of remains at AOE3(3)

⑵ 縄文土器

① 整理・分析の方法

今回の調査で出土した縄文土器は、2152点である。後述するように、これらの大部分は早期後葉の貝殻条痕文土器であり、明らかに時期の異なるものは、早期中葉の貝殻沈線文土器と考えられる尖底の底部破片１点と、晩期と考えられる回転縄文の施文された深鉢の体部破片３点に過ぎない。従って以下では、この貝殻条痕文土器を中心に、その型式内容を検討する。

貝殻条痕文土器は細片が多く、破片どうしが接合するものも少なかった。整理の手順としては、接合を行った後、口縁部破片、底部破片、体部屈曲部破片、体部破片のうち有文の破片を抽出した。抽出資料は口縁部破片110点、底部破片23点、体部屈曲部および有文の体部破片129点の合計262点であり、これらについては、上述の明らかに時期の異なる土器とともに、諸属性の観察を行った（表４～７）。観察した属性は、資料の実態を考慮して、部位、口縁部の端面（断面）形態、口縁部の（平面）形態、内外面の器面調整、文様、胎土、器厚、炭化物付着の有無の以上８項目である。さらに、これら262点の抽出資料のなかから、細片を除く128点に関して、図化と写真撮影を行った（図36～44、図版８～15）。

② 早期後葉の土器

本遺跡出土土器の大部分を占める早期後葉の土器については、観察項目として挙げた諸属性に関して、層位別に出現頻度を検討するとともに、一部の属性について属性相互の相関の検討も併せて行い、土器群の特徴の把握に努めた（図25～34）。

【器形】

器形全体を推定できる資料は、２号竪穴住居跡から１点出土しているに過ぎない（図36－１：№242）。

この土器は、底部を欠くものの、口縁部から体部下半までのプロポーションを窺い知ることのできる唯一の資料である。体部に２段の屈曲を有し、口縁部は直線的に外傾する。上位の屈曲は内外面ともに明瞭であるが、下位の屈曲は内面ではほとんど痕跡的にしか捉えられない。体部も口縁部同様、直線的に外傾する。この土器は、突起や突起と突起の中間の最も低い位置に縦方向の屈曲を有しており、上から見たとき口縁部は多角形を呈する。屈曲の度合いは、突起と突起の中程に比べ、突起の部分のほうが強い。口縁全体では10角形を呈すると考えられるが、縦位の屈曲は体部下半には及ばず、体部は円形を呈する。底部は、ごくわずかに丸みを帯びつつも全て平底を基調としており、尖底のものは存在しない（図36－２・３・４・６・７）。

【口縁部端面（断面）形態】

口縁部の端面（断面）形態は、７類型に分類できた（図22）。最も多いものは、端面が外側から内側に向かって直線的に削がれるもの（１類）で、各層を通じて、全体の約半数を占めている（図25）。次いで、１類同様内削ぎではあるが端面がカーブを描く２類、端面が丸みを帯びる３類、端面が平坦に仕上げられる４類が多く、これら１類～４類までで、全体の８割から９割を占めている。

【口縁部装飾】

口縁部の装飾は、A類（平坦口縁）、B類（小波状口縁）、C類（大波状口縁）、D類（突起）の大別４類型、細別では９類型に分類できた（図23）。層により若干のばらつきは認められるものの、平坦口縁（A類）と、小波状口縁のうち口唇部外面側のみを口縁に直行する方向で刻むもの（Ba類）が、それぞれ全体の３割～５割を占めている（図26）。大波状口縁や突起を有する土器は下層（遺構）に多く、次第に減少していくように見える。

口縁部装飾について、口縁の端面形との相関をみたものが図33である。この図から、本遺跡出土土器のなかでは、内削ぎの口縁部の外側の端面に細かな刻みを加えた土器が最も多く、同じく内削ぎで口縁部に全く加飾しない土器がこれに次いで多いことが判る。

図22　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の口縁部断面形態
Fig.22 Variations of pottery rim profile from AOE3

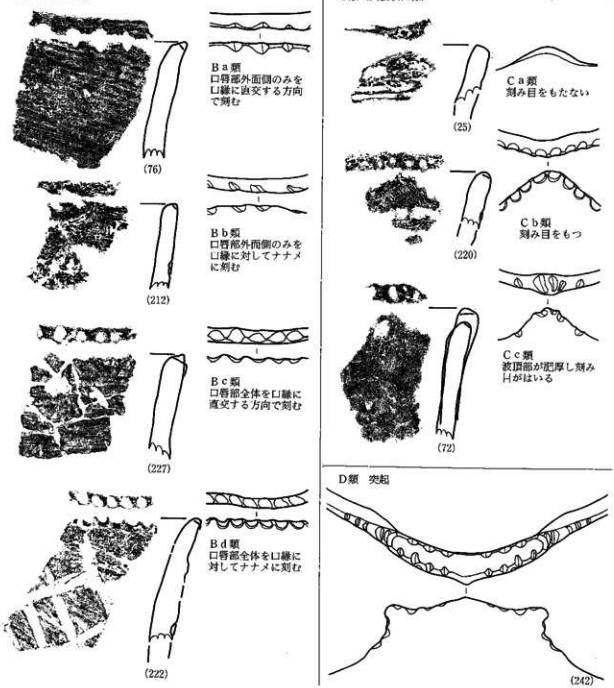


図23　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の口縁部装飾類型
Fig.23 Variations of decorated rim of pottery from AOE3

【文様】

意匠の展開を把握することのできない細片が多いことから、細片でも適用可能なように、文様要素の組み合わせを重視した分類を行った(図24)。即ち、文様要素の組み合わせを重視した場合、出土土器の文様は、沈線のみで文様を描くもの(A類)、沈線による区画内に連続刺突文を充填するもの(B類)、沈線に連続刺突文を沿わせるもの(C類)、沈線を使わず連続刺突文自体で意匠を描くもの(D類)、無文(E類)の5種類に大別できる。

沈線のみで文様を描くもの(A類)の意匠は、斜格子(Aa類:図版16－1)と、方形または菱形を基調とした複雑な意匠(Ab類)とが認められる。沈線による区画内に連続刺突文を充填するもの(B類)の意匠は、区画沈線が縦横の方形を基調とするもの(Ba類:図版16－2)と、区画沈線が斜めで菱形や三角形を基調とするもの(Bb類:図版16－3)の2種類が確認できる。沈線に連続刺突文を沿わせるもの(C類:図版16－4)では、沈線が斜めのものが目立つ。沈線を使わず連続刺突文自体で意匠を描くもの(D類)には、刺突を横一線に並べるもの(Da類:図版16－6・7)と、連続する刺突列で方形あるいは菱形を基調とする意匠が形成されるもの(Db類:図版16－5)の二者が存在する。刺突は、断面が円形ないし半円形の工具(図版16－6)によって行われており、断面角型の施文具(図版16－7)は非常に稀である。断面円形の工具のなかには、竹管のような中空のものも確実に存在するが、工具を器面に対して垂直に押し当てたものが少ないことから、工具の中空、中実については、どちらが多かったのか判然としない。

口縁部の文様帯と体部屈曲部の文様帯に関して、これらの文様がどのように使われているかの検討を行った(図27・28)。その結果、口縁部文様帯に関しては、A類あるいはB類が多く用いられていることが明らかとなった。また、沈線による区画内に刺突を充填するB類は、上層の包含層に比べ、下層(遺構)のほうが僅かであるが比率が高いようである。大部分が細片のため、文様を確認できなかった資料についても、確実に無文と断定することはできないが、上層の包含層に比べ、下層(遺構)出土の土器の口縁部文様帯は装飾性に富んでおり、次第に文様が簡素化していく様相を示している可能性がある。大部分の土器の体部屈曲部には、斜め下方からの刺突が行われており、それらが横方向に並んでいる。

口縁部の文様と、口縁部端面の形状との相関を調べたものが、図34である。資料点数が少ないため、充分な検討を行うことはできないが、口縁部に文様Db類を施文した土器と、無文とおもわれる土器の口縁部の端面形を比較した場合、前者は特定の端面形に偏ることがないのに対して、後者は、内削ぎのものが多いようである。

施文手法を具体的に復元可能な資料は、2号竪穴住居跡埋土2層から出土したNo.242の土器(図36－1、図版9)のみである。そこで次に、この土器の具体的な施文手法について述べる(図35)。器形の項で既に触れた通り、この土器の口縁部は10角形を呈しており、口縁部の文様帯は10面から構成されている。この土器は、口縁部文様帯には、刺突が充填された菱形の沈線区画と、斜めの沈線に平行する連続刺突列(押し引き)が認められる。2段の体部屈曲部には、刺突列が巡る。また、・くびれ部分　　には、縦横の沈線と横2列の連続刺突列(押し引き)が施されている。この土器の刺突には管状の工具が使用されており、図35には、工具をどの方向から押し当てることにより刺突が生じたかを示した。口縁部の文様帯に関しては、施文時に各々の面が強く意識された結果、面毎に刺突の方向を変えていることが明らかとなった。即ち、口縁を上に土器に正面したとき、図35のA面・C面では、連続刺突は左方向から行われているのに対して、B面では右方向から刺突が行われている。口縁部と違い面が形成されず円形を呈する体部の連続刺突は、一部に乱れがあるものの、基本的に右方向から行われている。この資料は、単に器形と文様とが結びついていることを示しているだけでなく、土器作りの上で、結果として表に残りにくい施文行為までもが強く規制され、それが遵守されることを具体的に示している。

【器面調整】

本土器群は早期後葉の貝殻条痕文土器群の範疇に含まれ、その名の通り、ハイガイやサルボウといった放射肋を有する貝殻による器面調整の痕跡が内外面に多く認められる(図版16－8)。貝殻条痕の他には、貝殻以外の工

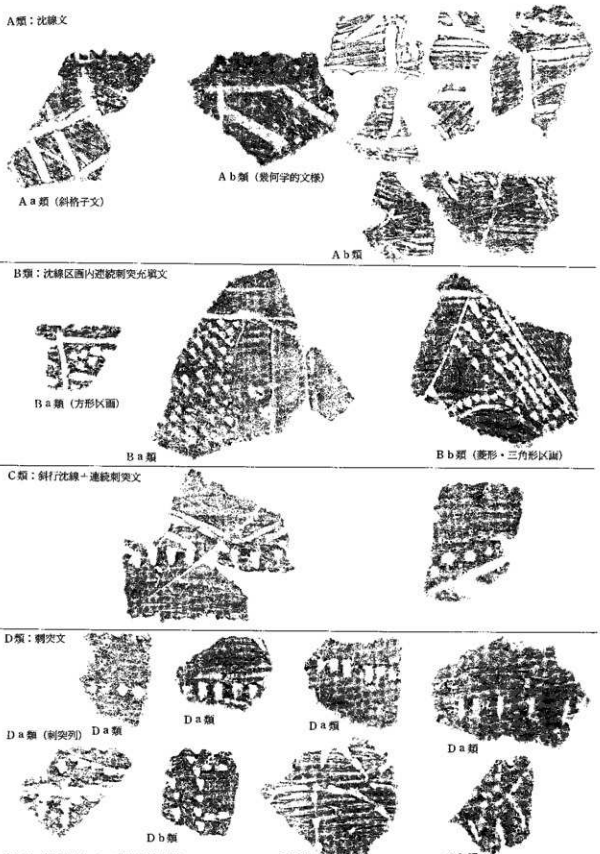


図24　青葉山遺跡E地点第３次調査出土土器の文様類型

Fig.24 Design variations of pottery from AOE3

具によるナデが少量認められる。層位別に見た場合、内外面ともに、下層（遺構）ほど貝殻条痕の比率が高く、上層（包含層）では、貝殻以外工具によるナデがやや増えるようである（図29・30）。貝殻による調整は、内外面とも、口縁部付近は横方向に行われ、底部付近ではやや左上がりの方向で行われる例が多く認められる。平底の部分についても、基本的に内外面ともに貝殻を用いた調整が加えられる。

【胎土】

本土器群は、いわゆる「繊維土器」の範疇に含まれ、胎土中に植物繊維を含むものが多く認められる。今回、本土器群の胎土を分類するにあたっては、植物繊維の混入を指標とした。その結果、本土器群の胎土は、繊維を多く含むもの、繊維を少量含むもの、繊維を全く含まないものの3者に大別できた。繊維の混入の多寡の基準は、繊維の痕跡が器表面に現れ、断面に細かな孔が一様に分布するものを繊維多とし、繊維の痕跡が断面の芯の部分にのみ認められるものを繊維少とした。本土器群では、全体の約9割に植物繊維の混入が認められ、各層において極めて安定した比率を示すことが明らかとなった（図31）。

【器厚】

出土土器の厚みに関して、口縁部破片については、口唇部からやや下がった部位で、体部破片に関しては平均的なところで計測し（表4～7）、口縁部で器厚の変化を検討した（図32）。全体では、6～8ミリ程度の厚みを持つ土器が多く、層毎に見た場合には、上層に向かって僅かではあるが、厚みが増す傾向が捉えられた。

【使用痕】

土器の使用痕としては、内外面への炭化物の付着と補修孔が認められた。最も残りの良かった№242の土器（図36－1）を例に見た場合、炭化物は外面では口縁部付近に、内面では体部下半に認められる。底部資料では内面に炭化物が付着した例が多く看取される。口縁部外面付近の炭化物は内容物のふきこぼれを、体部下半から底部にかけての炭化物は、内容物のこげつきを、それぞれ示していると考えられる。

以上、本遺跡出土土器の主体を占める早期後葉の貝殻条痕文土器について検討を行ってきた。その結果、本土器群の特徴は次のようにまとめることができる。

器形は、体部に2段ないし1段の屈曲を有し、底部は角がやや丸みを帯びた平底を呈する。また、上方から見たとき、口縁部が多角形を呈する土器も存在する。胎土には植物繊維を含み、器面全体が放射肋を持つ二枚貝によって調整される。口縁部の端面は内削ぎのものが多く、口唇部に細かな刻みを加えた小波状口縁が多く認められる。小波状口縁以外には、口縁部が平坦なものや、大波状を呈するもの、突起を有するものなどが認められる。文様は、口縁部や体部の上半、体部の屈曲部に施される。施文具には断面円形の工具が選ばれ、これにより沈線や刺突が表現される。沈線は直線的なものが多く、斜めの平行沈線や斜格子文の他、菱形、方形をはじめとする各種の幾何学文が描かれ、それらの区画内を連続刺突（押し引き）により充填する資料も多数認められる。連続刺突（押し引き）は、沈線区画内を埋める以外に、斜行沈線に平行に沿わせたり、それ自体で幾何学文を構成する場合もある。刺突は基本的に土器の左右あるいは下方から器面に対して斜めに施されており、器面に対して工具の先端を垂直に押し当てたものは極めて少ない。また、これと関連するが、区画沈線の交点に円形の刺突を加えたものは全く存在しない。体部の屈曲部には、斜め下方から施された刺突が横一列に並ぶものが多い。

③　早期中葉の土器（図36－8）

風倒木跡8から乳房状の尖底土器の底部破片が1点出土している（№262）。胎土には繊維を含まず、外面は明るい淡橙色、内面は灰褐色を呈し、焼成は良好である。貝殻条痕は内外面とも認められない。尖った小さめの底部から体部への立ち上がりは比較的緩やかで、外側に向かって大きく開く形態を呈する。このような特徴の底部は、竹ノ内式（馬目順一編1982）、大寺式（興野義一1970）、常世式など、東北南半の貝殻沈線文土器に認められることから、本資料にも早期中葉の年代が与えられよう。

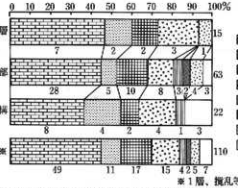


図25 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器口縁部断面形態の層位別出現頻度

Fig.25 Histograms of rim profiles of pottery from AOE3

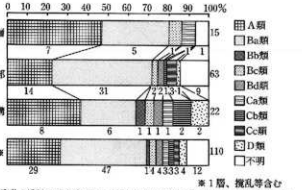


図26 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器口縁部装飾類型の層位別出現頻度

Fig.26 Histograms of rim decorations of pottery from AOE3

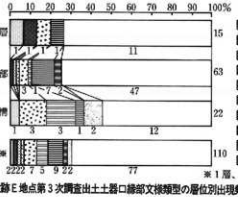


図27 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器口縁部文様類型の層位別出現頻度

Fig.27 Histograms of design-variations on rim of pottery from AOE3

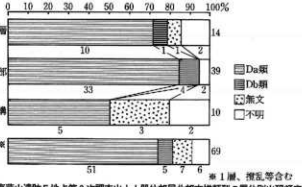


図28 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器体部屈曲部文様類型の層位別出現頻度

Fig.28 Histograms of design-variations on turning point of body of pottery from AOE3

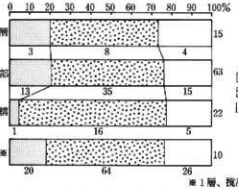


図29 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の内面調整

Fig.29 Histograms of modify-variations on the inside of pottery from AOE3

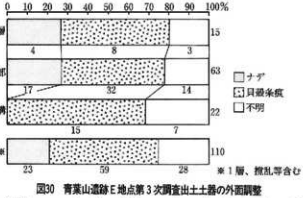


図30 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の外面調整

Fig.30 Histograms of modify-variations on the outside of pottery from AOE3

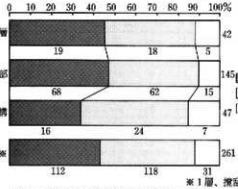


図31 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の胎土

Fig.31 Histograms of paste-variations of pottery from AOE3

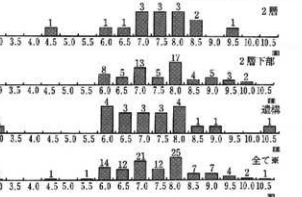
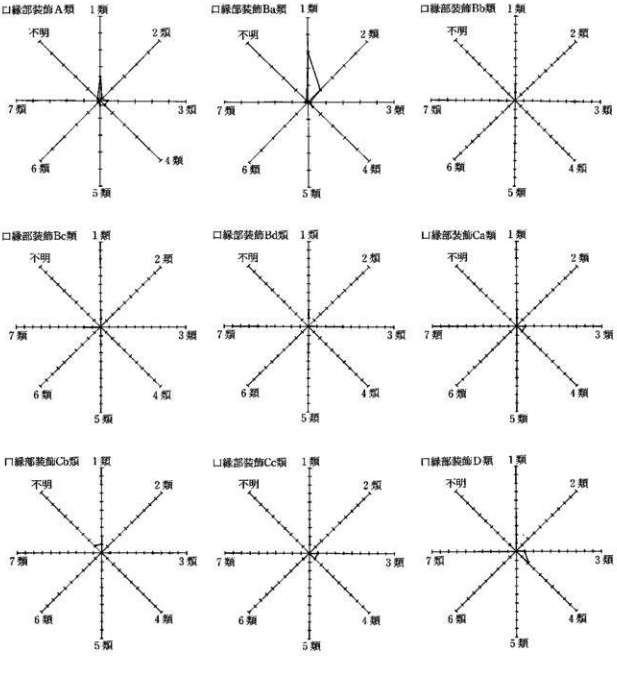
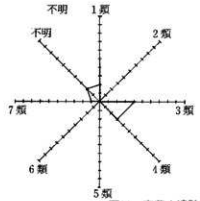


図32 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の器厚の層位的変化

Fig.32 Thickness of pottery from AOE3

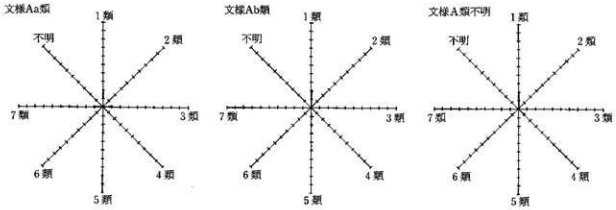


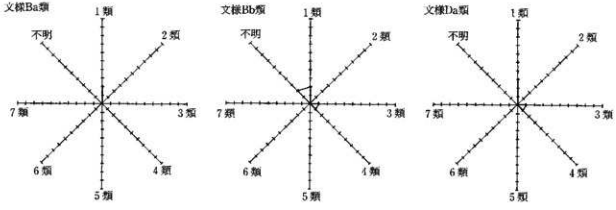


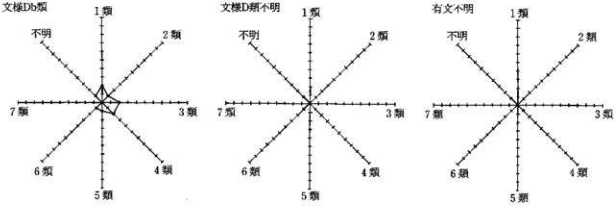
口縁部装飾	A	Ba	Bb	Bc	Bd	Ca	Cb	Cc	D	不明
端面形1類	14	29	1	1	0	1	1	0	0	2
端面形2類	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0
端面形3類	4	1	0	0	4	1	1	1	1	4
端面形4類	4	4	0	0	0	1	0	1	2	3
端面形5類	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0
端面形6類	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
端面形7類	0	2	0	2	0	0	0	0	0	1
端面形不明	2	1	0	0	0	0	1	0	1	2

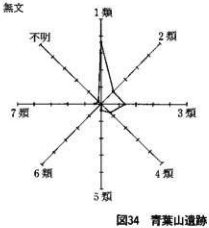
図33　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の口縁部装飾と端面形状との関係

Fig.33 Relationship between decolation of lip and rim profile of pottery from AOE3









文様類型	Aa	Ab	A不明	Ba	Bb	Da	Db	D不明	有文不明	無文
端面形1類	0	2	1	2	2	3	2	0	0	37
端面形2類	0	0	0	0	0	0	1	0	0	10
端面形3類	1	0	0	0	1	0	2	0	0	13
端面形4類	0	0	1	0	1	1	2	0	1	8
端面形5類	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
端面形6類	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
端面形7類	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
端面形不明	0	0	0	0	2	0	1	1	1	2

図34　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の口縁部文様と端面形状との関係
Fig.34 Relationship between design and rim profile of pottery from AOE3

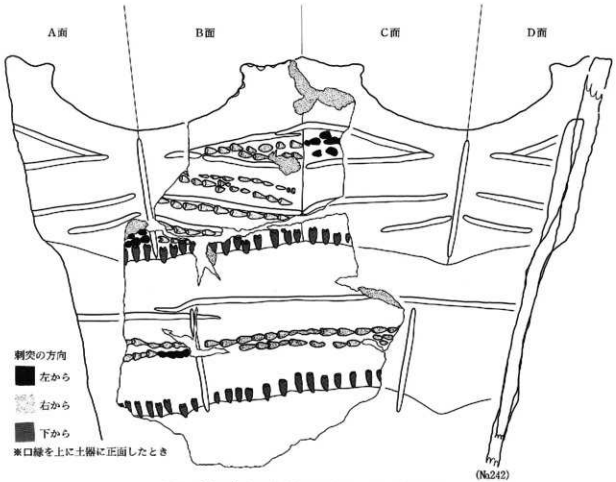


図35　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の施文手法
Fig.35 Design-techniques of pottery from AOE3

④　晩期の土器（図40—13・14、図44—11）

2層から2点、2層下部から1点、合計3点、外面に回転縄文を施文した破片が出土している。縄文原体はいずれも単節のLR縄文であり、回転方向には違いが認められるものの、深鉢の体部破片と考えられる。今回の調査地点の西側隣接地の調査（青葉山遺跡E地点第4次調査：未報告）や、青葉山遺跡B地点の調査（年報2）では、晩期中葉から後葉の土器が出土しており、これらの土器の年代も晩期中葉から後葉の可能性が高いものと考えられる。

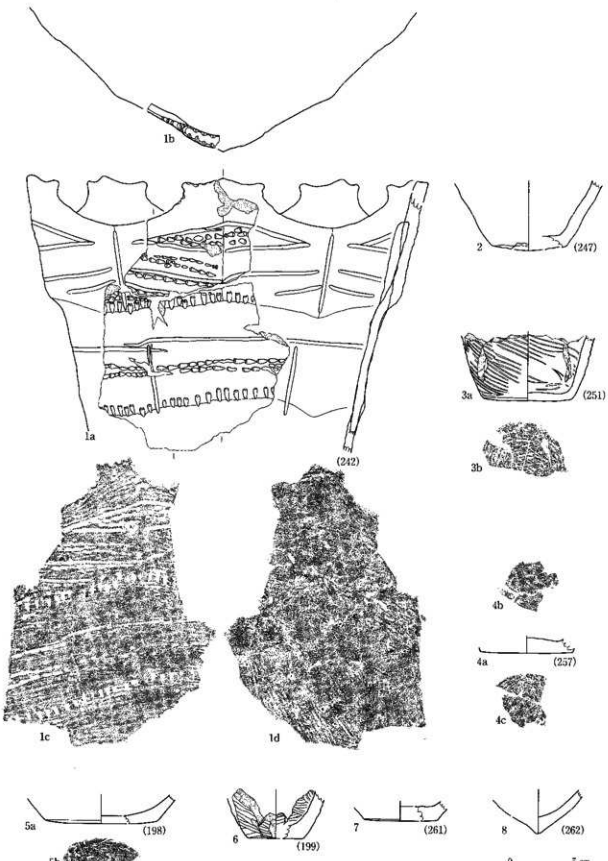
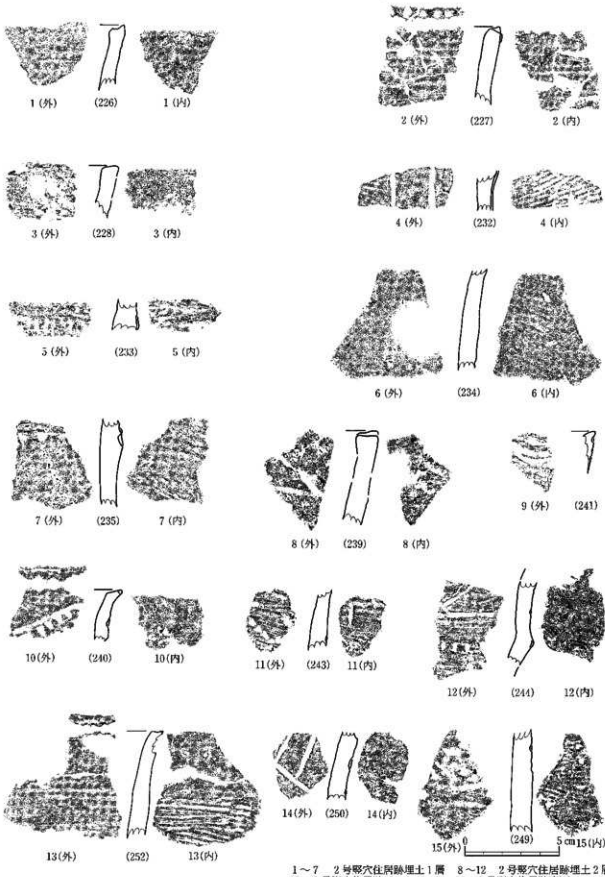


図36　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(1)
Fig.36 Pottery from AOE3(1)

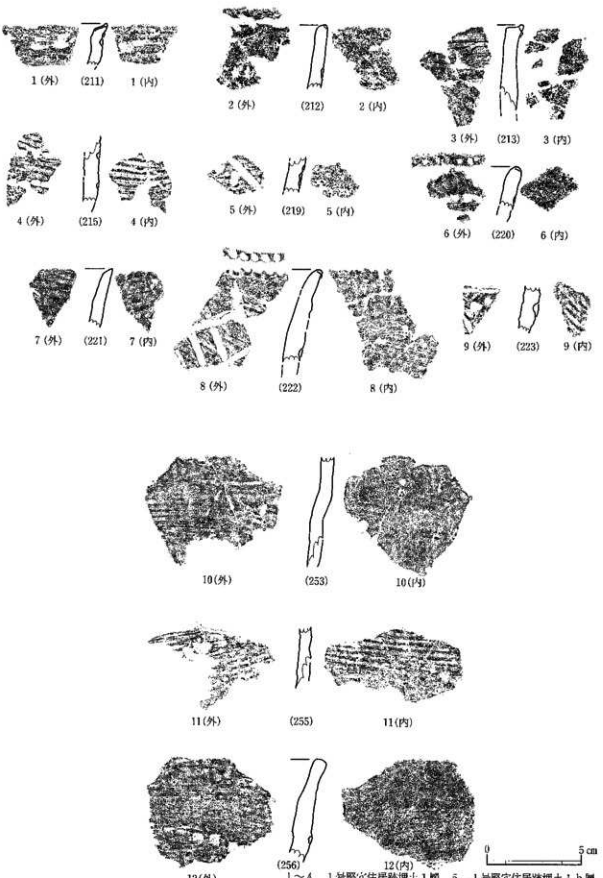
1・2　2号竪穴住居跡埋土2層　3　2号竪穴住居跡床面　4　Pit50
5・6　2層下部　7　風倒木跡5　8　風倒木跡8



1～7　2号竪穴住居跡埋土1層　8～12　2号竪穴住居跡埋土2層
13　2号竪穴住居跡ピット1　14・15　2号竪穴住居跡床面

図37　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(2)

Fig.37 Pottery from AOE3(2)



1～4　1号竪穴住居跡埋土1層　5　1号竪穴住居跡埋土1b層
6～9　1号竪穴住居跡床面　10　16号土坑　11　Pit41　12　Pit50

図38　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(3)

Fig.38 Pottery from AOE3(3)

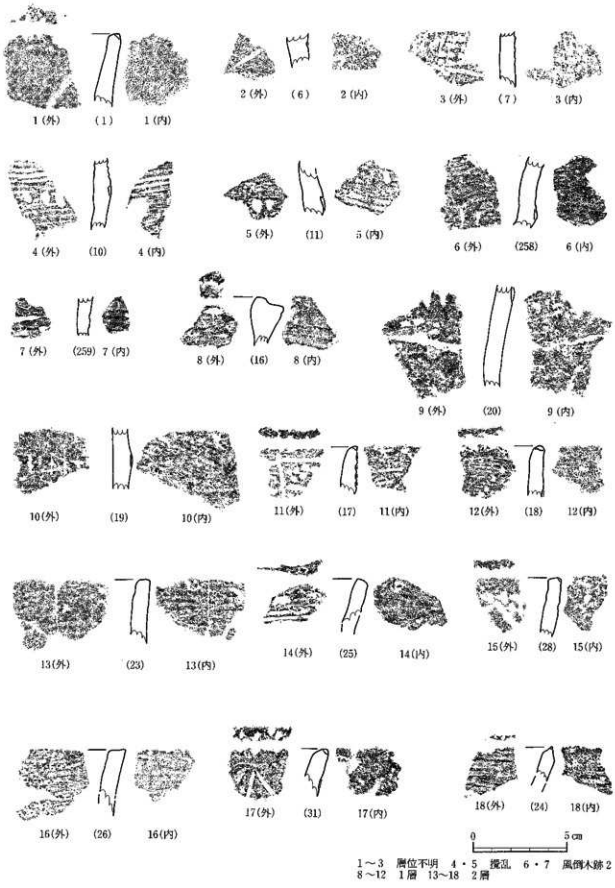


図39 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(4)
Fig.39 Pottery from AOE3(4)

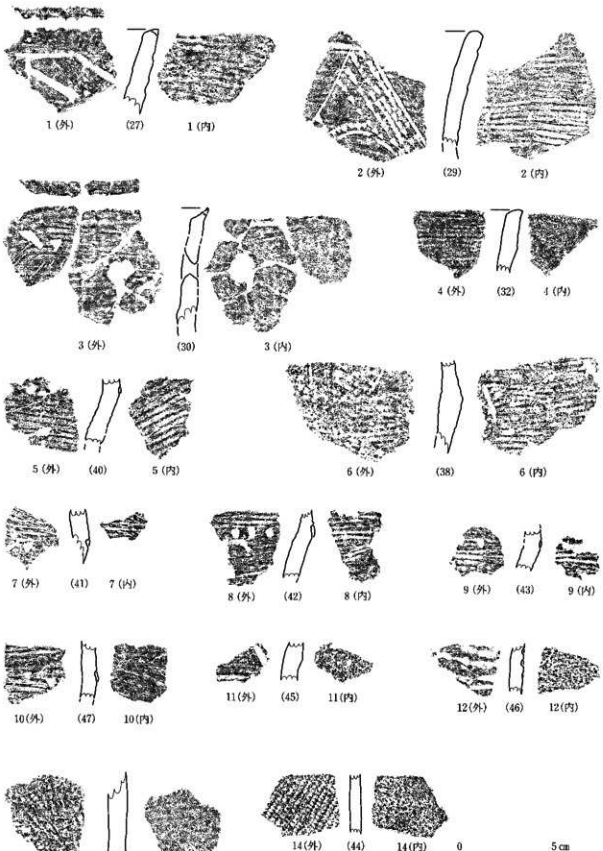
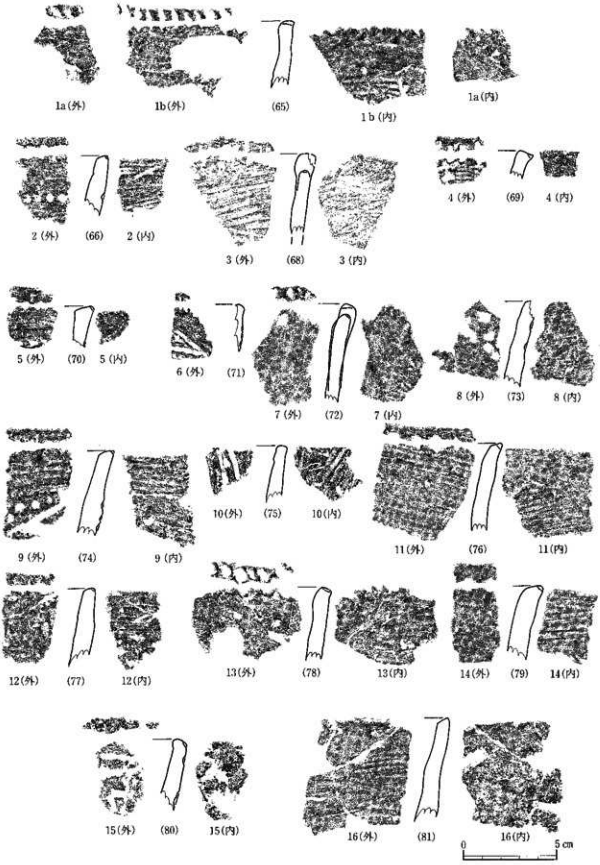


図40　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(5)　1～14　2層

Fig.40 Pottery from AOE3(5)



1～16　2層下部

図41　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(6)

Fig.41 Pottery from AOE3(6)

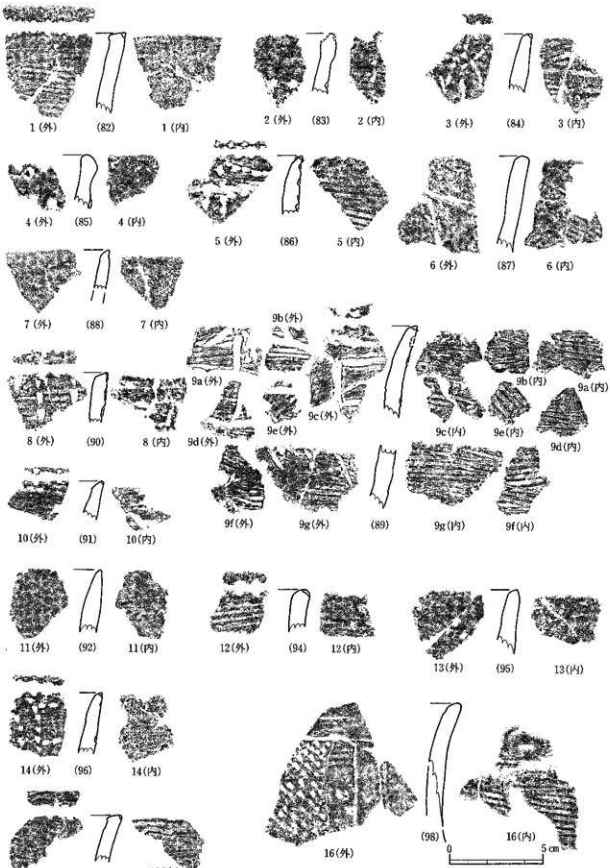
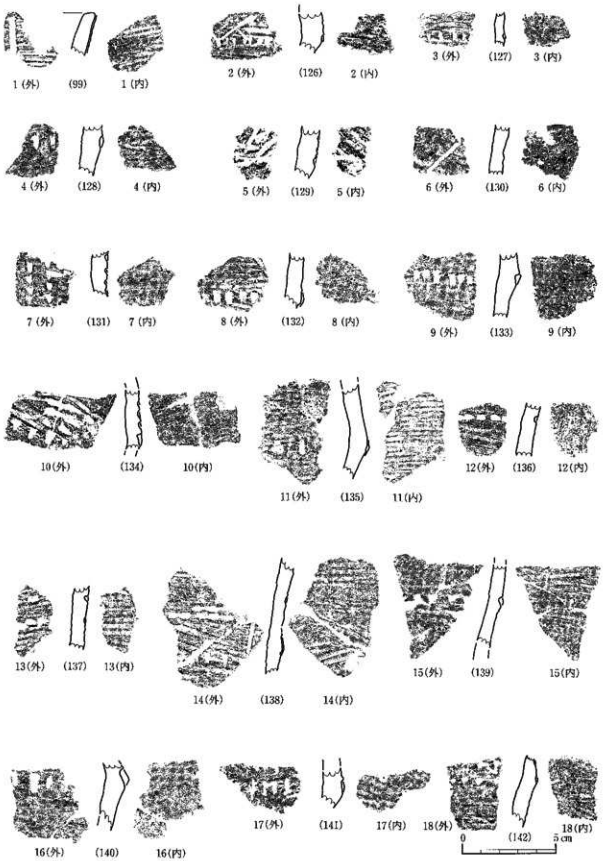


図42　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(7)

1～16　2層下部

Fig.42 Pottery from AOE3(7)



1～18　2層下部

図43　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(8)

Fig.43 Pottery from AOE3(8)

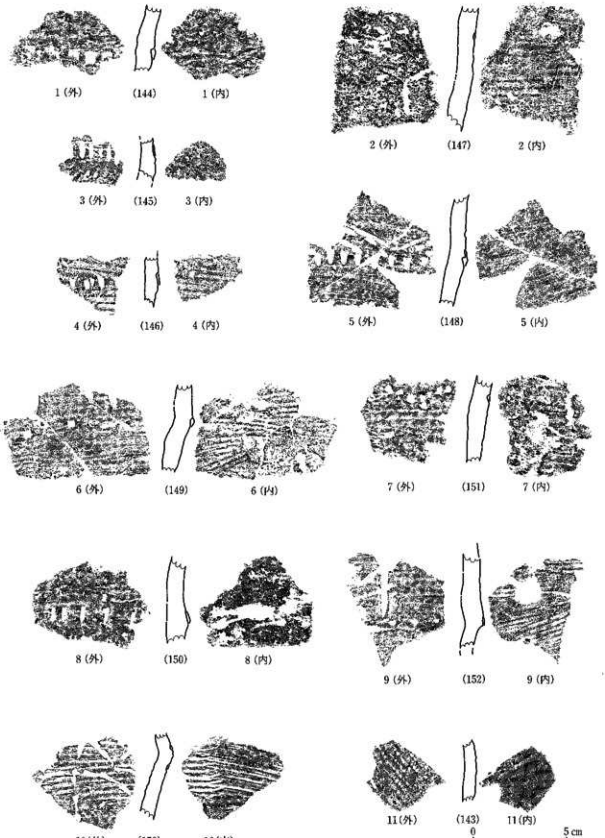


図44　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(9)　1～11　2層下部
Fig.44 Pottery from AOE3(9)

表4　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器観察表(1)

Tab.4 Attribute list of pottery from AOE3 (1)

番号	地区・遺構	層位	部位	端面形	口縁形態	器面調整	文様	炭化物	器厚	胎土	備考	図	図版
1	不明	不明	口縁部	1	Ba	内N・外N	A		9.0	2		39	15
2	不明	不明	口縁部	3	Ca	内不・外不			5.5	2			—
3	不明	不明	口縁部	1	Ba	内不・外不			6.5	1		—	—
4	不明	不明	口縁部	1	不明	内N・外不			6.5	2			—
5	不明	不明	口縁部	3	不明	内S・外不			6.0	1		—	—
6	不明	不明	体部	不明	不明	内不・外N	Aa		11.0	2		39	15
7	不明	不明	体部	不明	不明	内S・外S	B		7.5	2		39	15
8	不明	不明	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		8.0	3		—	
9	攪乱(M3区)	—	口縁部	1	Ba	内N・外N			7.0	1		—	—
10	攪乱(M3区)	—	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		7.5	1		39	15
11	攪乱(K1区)	—	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.5	2		39	15
12	攪乱(M3区)	—	体部屈曲部	不明	不明	内N・外S	E		7.5	2		—	—
13	攪乱(M3区)		口縁部	1	Ba	内S・外S			7.5	3			
14	攪乱(M3区)	—	体部	不明	不明	内不・外不	B		8.0	2		—	—
15	攪乱(M3区)	-	底部	不明	不明	内S・外S			7.0	1			—
16	不明	1層	口縁部	不明	D	内S・外S			6.5	3		39	15
17	L7区	1層	口縁部	1	Ba	内S・外S	Ba		7.0	1		39	15
18	E4区	1層	口縁部	3	Bd	内S・外S	Db		8.0	1		39	15
19	不明	1層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外N	E		9.0	1		39	15
20	不明	1層	体部屈曲部	不明	不明	内N・外N	Da		9.0	2		39	15
21	N5区	1層	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		7.5	2		—	—
22	N4区	1層	体部	不明	不明	内S・外S	Ba		7.0	1		—	—
23	J2区	2層	口縁部	4	A	内S・外S			8.5	2		39	14
24	F3区	2層	口縁部	1	Ba	内S・外S			6.5	2		39	14
25	O2区	2層	口縁部	4	Ca	内N・外S			7.5	1		39	14
26	K9区	2層	口縁部	1	A	内S・外S			7.0	2		39	14
27	M8区	2層	口縁部	1	Ba	内S・外N	Ab		9.5	1		40	14
28	C3区	2層	口縁部	4	Ba	内N・外N	Db		7.0	2		39	14
29	N5区	2層	口縁部	3	不明	内S・外S	Bb		7.5	2		40	14
30	F4区	2層	口縁部	2	Ba	内S・外S			8.0	1	補修孔	40	14
31	L5区	2層	口縁部	7	Bc	内不・外N	Aa		8.5	2		39	14
32	L9区	2層	口縁部	1	A	内不・外S			8.0	1		40	14
33	C3区	2層	口縁部	3	A	内不・外不			6.0	2		—	—
34	K8区	2層	口縁部	2	A	内N・外N			7.5	1		—	—
35	F2区	2層	口縁部	1	A	内不・外不			4.5	3		—	-
36	不明	2層	口縁部	1	A	内S・外不			7.0	2		—	—
37	不明	2層	口縁部	1	Ba	内S・外S			8.0	1			
38	N5区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Db		8.5	1		40	14
39	C3区	2層	体部	不明	不明	内N・外不	LR縄文		10.0	3	晩期	40	15
40	P2区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		9.0	1		40	14
41	N4区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		40	14
42	O3区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		40	14
43	O3区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		40	14
44	P2区	2層	体部	不明	不明	内N・外不	LR縄文	内面	5.5	3	晩期	40	15
45	O2区	2層	体部	不明	不明	内N・外N	有り不明		7.5	2		40	14
46	F2区	2層	体部	不明	不明	内不・外不	B		7.5	1		40	15
47	L6区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		7.5	1		40	15
48	M4区	2層	体部	不明	不明	内S・外S	Da		7.5	3		—	—
49	N4区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外不	Da		7.0	1		—	—
50	C3区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外S	Da		7.5	2		—	-
51	D3区	2層	体部	不明	不明	内S・外不	有り不明		7.5	1		—	—
52	F4区	2層	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		不明	2			—
53	N2区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外不	有り不明		7.0	1		—	—
54	N6区	2層	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		6.0	2		—	—
55	O2区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Da		8.0	1			-
56	F3区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.5	2		—	—
57	O5区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		7.5	2		—	—
58	O2区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外不	有り不明		8.5	2			-
59	J3区	2層	体部	不明	不明	内S・外不	Bb		7.5	2		—	—
60	K9区	2層	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		8.0	2			-
61	N6区	2層	体部	不明	不明	内S・外S	Db		7.0	1		—	—
62	O2区	2層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	E		9.0	2		—	—
63	J6区	2層	底部	不明	不明	内N・外不			不明	3			
64	F3区	2層	底部	不明	不明	内不・外不			不明	2		—	—
65	G4区	2層下部	口縁部	3	Bd	内S・外N			7.0	2		41	10
66	J9区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外N	Da		9.5	1		41	10
67	M5区	2層下部	口縁部	1	A	内N・外N			7.0	2		—	—
68	I5区	2層下部	口縁部	3	Cc	内S・外S			7.0	1		41	10
69	I2区	2層下部	口縁部	4	Ba	内N・外S			6.0	3		41	10
70	I7区	2層下部	口縁部	1	Ba	内N・外S			6.0	2		41	10
71	P3区	2層下部	口縁部	不明	Ba	内不・外N	Bb		不明	2		41	10
72	K5区	2層下部	口縁部	3	D	内S・外S			8.0	2		41	10
73	F5区	2層下部	口縁部	不明	不明	内S・外N	Db		8.0	1		41	10
74	M7区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S	Bb		8.0	1		41	10
75	H5区	2層下部	口縁部	4	A	内S・外N	Bb		6.0	1		41	10

表5 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器観察表(2)

Tab.5 Attribute list of pottery from AOE3(2)

番号	地区・遺構	層位	部位	胎成形	口縁形態	器面調整	文様	炭化物	器厚	胎土	備考	図	図版
76	G5区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S			8.0	2		41	10
77	H3区	2層下部	口縁部	3	Ba	内S・外N			8.0	2		41	11
78	G5区	2層下部	口縁部	3	Bd	内S・外N			7.0	2		41	11
79	G5区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外N			9.5	2		41	11
80	G5区	2層下部	口縁部	6	Cc	内不・外不	Db		8.0	3		41	11
81	F4区	2層下部	口縁部	1	A	内N・外S			7.5	1		41	11
82	O2区	2層下部	口縁部	1	Ba	内N・外S			8.0	2		42	11
83	G2区	2層下部	口縁部	不明	不明	内S・外S	D		7.0	1		42	11
84	I2区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S	Db		7.0	1		42	11
85	I9区	2層下部	口縁部	6	A	内不・外不	D		9.0	3		42	11
86	N4区	2層下部	口縁部	5	Bc	内S・外N	Db		8.0	1		42	11
87	L10区	2層下部	口縁部	3	A	内S・外不			8.0	2		42	11
88	G4区	2層下部	口縁部	1	A	内N・外N			6.0	2		42	11
89	K6区	2層下部	口縁～体部	1	Ba	内S・外S	Ab		8.0	1		42	11
90	M4区	2層下部	口縁部	2	Ba	内S・外S	Db		6.5	1		42	11
91	O2区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S			7.5	1		42	11
92	K4区	2層下部	口縁部	5	A	内N・外N			10.0	2		42	11
93	G5区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S			8.0	1		—	-
94	P18区	2層下部	口縁部	7	Ba	内S・外S			8.5	3		42	12
95	K4区	2層下部	口縁部	1	A	内S・外N			8.0	2		42	12
96	M4区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外N	Db		8.0	1		42	12
97	G5区	2層下部	口縁部	4	Ba	内S・外S			7.0	1		42	12
98	O2区	2層下部	口縁部	1	Cb	内S・外S	Ba		8.5	1		42	12
99	P2区	2層下部	口縁部	4	不明	内S・外S	A		8.5	1		43	12
100	M4区	2層下部	口縁部	2	Ba	内S・外S			7.5	1		-	-
101	O5区	2層下部	口縁部	2	Ba	内S・外S			7.0	1		—	—
102	K6区	2層下部	口縁部	1	A	内N・外N			6.5	1			—
103	K3区	2層下部	口縁部	1	Ba	内不・外不			9.0	2		—	-
104	M6区	2層下部	口縁部	1	Ba	内N・外S			6.5	2			—
105	K6区	2層下部	口縁部	3	A	内N・外N			8.0	2		—	
106	L4区	2層下部	口縁部	3	A	内S・外S			9.0	3		—	—
107	H7区	2層下部	口縁部	1	不明	内N・外S			7.0	2		-	-
108	O3区	2層下部	口縁部	3	不明	内S・外S			9.5	2		—	—
109	L5区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S			8.0	2			—
110	I4区	2層下部	口縁部	2	Ba	内S・外S			7.0	1		—	-
111	H5区	2層下部	口縁部	7	Bc	内不・外N			7.0	2		-	—
112	I4区	2層下部	口縁部	1	Ba	内N・外不			8.0	2		—	
113	F3区	2層下部	口縁部	4	不明	内不・外不			6.5	2		—	—
114	N5区	2層下部	口縁部	2	Ba	内S・外S			8.0	2			-
115	O2区	2層下部	口縁部	1	Ba	内S・外S			7.5	1		—	-
116	N4区	2層下部	口縁部	4	Ba	内不・外不			7.5	2		-	—
117	N19区	2層下部	口縁部	1	Ba	内不・外S			8.5	2		—	
118	I4区	2層下部	口縁部	1	Ba	内不・外不			8.0	2		—	—
119	G5区	2層下部	口縁部	1	Ba	内不・外不			9.0	1			-
120	G5区	2層下部	口縁部	5	A	内不・外不			6.0	2		—	—
121	M4区	2層下部	口縁部	4	不明	内S・外不			7.0	3		-	—
122	M5区	2層下部	口縁部	3	不明	内不・外S			9.0	3		—	
123	M5区	2層下部	口縁部	1	A	内N・外S			6.0	1		—	—
124	不明	2層下部	口縁部	1	A	内不・外不			7.0	3			-
125	C3区	2層下部	口縁部	7	Ba	内S・外S			6.0	1		—	-
126	F5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Aa+Da		9.0	2		43	12
127	L4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内N・外S	Da		4.0	2		43	12
128	I7区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		9.0	2		43	12
129	L5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Db		8.5	2		43	12
130	K4区	2層下部	体部	不明	不明	内N・外N	Aa		6.5	2		43	12
131	K4区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	Db		8.0	1		43	12
132	O4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内N・外S	A+Da		7.5	1		43	12
133	M3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外N	Da		7.5	2		43	12
134	G3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内N・外N	Db+Da		7.0	1		43	12
135	K6区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		7.5	1		43	12
136	N4区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外S	D		8.0	1		43	12
137	M5区	3層下部	体部	不明	不明	内S・外S	Db		7.0	1		43	12
138	H4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	A+2Da+Da		6.0	1		43	12
139	L8区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		6.0	1		43	12
140	M4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		43	13
141	G5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		43	13
142	I8区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		9.0	1		43	13
143	P9区	2層下部	体部	不明	不明	内N・外不	LR縄文		6.0	3	晩期	44	13
144	H5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		7.0	1		44	13
145	L3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		44	13
146	H5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		6.0	1		44	13
147	K4区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		9.0	1		44	13
148	F3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	C+Da		7.5	1		44	13
149	J7区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		44	13
150	H5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外N	Da		8.0	1		44	13

表6 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器観察表(3)

Tab.6 Attribute list of pottery from AOE3(3)

番号	地区・遺構	層位	部位	端面形	口縁形態	器面調整	文様	炭化物	器厚	胎土	備考	図	図版
151	K3区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	Db		9.0	2		44	13
152	J8区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	A+Da		8.5	1		44	13
153	D4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Db・Db		7.5	1		44	13
154	C3区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外S	有り不明		8.0	1		—	—
155	L6区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		9.5	3		—	—
156	K6区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	A		7.0	1		—	—
157	M6区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内不・外S	Da		10.0	1		—	—
158	P2区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外S	Da		7.0	1		—	—
159	I3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内不・外S	Da		8.0	1			
160	G3区	2層下部	口縁部	7	不明	内不・外不			10.0	3		—	—
161	M5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Da		7.5	2			
162	G4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		7.5	2		—	—
163	C3区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		8.0	1		—	—
164	M4区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		7.0	2		—	—
165	L4区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		9.5	2		—	—
166	G5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Da		7.0	1		—	—
167	K6区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		9.0	2		—	—
168	H4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1			
169	I6区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.5	1		—	—
170	E4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		10.5	2		—	—
171	G4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	2		—	—
172	K7区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		9.0	1		—	—
173	P17区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	A		7.0	2			
174	C3区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	Db		8.0	1		—	—
175	N5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		8.0	1		—	—
176	O17区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外N	有り不明		9.5	3		—	—
177	G5区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		6.0	1		—	—
178	G4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	不明		7.0	1			
179	L8区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		6.0	1		—	—
180	J3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Da		9.5	1		—	—
181	G5区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		9.5	2		—	—
182	G4区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外S	有り不明	内面	8.0	2		—	—
183	L6区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外不	Db		7.5	2			
184	F4区	2層下部	体部	不明	不明	内N・外N	Db		7.5	3		—	—
185	G4区	2層下部	口縁部	4	Cc	内不・外不	Db		6.5	3		—	
186	H5区	2層下部	体部	不明	不明	内N・外不	2Db		6.5	2		—	—
187	不明	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内不・外S	Da		7.5	1		—	—
188	I4区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Db		8.5	2			
189	N2区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内N・外不	Da		7.0	2		—	—
190	H4区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明		7.5	2		—	
191	M4区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外S	Db		9.5	1		—	—
192	L3区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内N・外S	Db		6.0	2		—	—
193	H5区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外不	有り不明	内面	8.5	3			
194	I8区	2層下部	体部	不明	不明	内不・外不	Db		7.0	2		—	—
195	J7区	2層下部	体部	不明	不明	内S・外N	有り不明		7.0	2		—	
196	I5区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内不・外S	不明		不明	2		—	—
197	I7区	2層下部	体部屈曲部	不明	不明	内不・外不	Da		7.0	2		—	—
198	M19区	2層下部	底部	不明	不明	内面ミガキ	底部回転糸切後ヘラ削り		6.0	3	内黒土師器	36	14
199	F3区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			8.5	1		36	14
200	P3区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			不明	1		—	—
201	K3区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			不明	1		—	—
202	I5区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			9.0	2		—	—
203	M4区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			11.5	2			
204	M4区	2層下部	底部	不明	不明	内不・外不			不明	2		—	—
205	L3区	2層下部	底部	不明	不明	内N・外N		内面	6.5	2		—	—
206	O2区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			6.5	2		—	—
207	P14区	2層下部	底部	不明	不明	内S・外S			7.5	1		—	—
208	J7区	2層下部	底部	不明	不明	内不・外不			5.0	2			
209	P14区	2層下部	底部	不明	不明	内不・外S		内面	8.0	1		—	—
210	I5区	2層下部	底部	不明	不明	内不・外S			不明	2		—	—
211	1号竪穴住居	埋土1層	口縁部	1	A	内S・外S	Da+		6.5	1		38	8
212	1号竪穴住居	埋土1層	口縁部	1	Bb	内S・外S	Da		6.5	1		38	8
213	1号竪穴住居	埋土1層	口縁部	2	Ba	内不・外S			7.5	1		38	8
214	1号竪穴住居	埋土1層	口縁部	1	Ba	内S・外S			8.0	2		—	—
215	1号竪穴住居	埋土1層	体部	不明	不明	内S・外S	D		7.0	1		38	8
216	1号竪穴住居	埋土1層	体部	不明	不明	内不・外不	B		6.5	1		—	
217	1号竪穴住居	埋土1層	体部	不明	不明	内不・外不	D		9.0	2		—	—
218	1号竪穴住居	埋土1層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外S	不明		11.5	2		—	—
219	1号竪穴住居	埋土1b層	体部	不明	不明	内不・外S	Bb		8.0	1		38	8
220	1号竪穴住居	床面	口縁部	3	Cb	内不・外不	Db		7.5	3		38	8
221	1号竪穴住居	床面	口縁部	1	A	内S・外S			6.0	1		38	8
222	1号竪穴住居	床面	口縁部	3	Bd	内S・外S	Aa		8.0	2		38	8
223	1号竪穴住居	床面	体部	不明	不明	内S・外S	Bb		8.0	2		38	8
224	1号竪穴住居	床面	口縁部	不明	Cb	内不・外不	有り不明		6.0	3		—	—
225	1号竪穴住居	床面	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	A		6.0	1		—	—

表7 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器観察表(4)

Tab.7 Attribute list of pottery from AOE3(4)

番号	地区・遺構	層位	部位	波頂形	口縁形態	器面調整	文様	炭化物	器厚	胎土	備考	図	図版
226	2号竪穴住居	埋土1層	口縁部	2	Ba	内S・外S			7.0	1		37	8
227	2号竪穴住居	埋土1層	口縁部	1	Bc	内S・外S			7.0	2		37	8
228	2号竪穴住居	埋土1層	口縁部	4	A	内N・外不			8.5	2		37	8
229	2号竪穴住居	埋土1層	口縁部	5	A	内不・外不			7.0	2		—	-
230	2号竪穴住居	埋土1層	口縁部	1	A	内S・外S			8.0	2		—	—
231	2号竪穴住居	埋土1層	口縁部	1	Ca	内S・外不			6.0	1		—	-
232	2号竪穴住居	埋土1層	体部	不明	不明	内S・外S	Ab		7.5	2		37	8
233	2号竪穴住居	埋土1層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	E		10.0	2		37	8
234	2号竪穴住居	埋土1層	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		8.0	2		37	8
235	2号竪穴住居	埋土1層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Da		9.0	3		37	8
236	2号竪穴住居	埋土1層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外不	Da		11.5	2		—	
237	2号竪穴住居	埋土1層	体部	不明	不明	内不・外不	有り不明	内面	8.0	3		—	—
238	2号竪穴住居	埋土1層	体部屈曲部	不明	不明	内不・外不	Da		8.0	3		—	—
239	2号竪穴住居	埋2	口縁部	4	D	内S・外不	有り不明		10.5	2		37	8
240	2号竪穴住居	埋2	口縁部	1	Ba	内S・外S	Bb		7.5	1		37	8
241	2号竪穴住居	埋2	口縁部	不明	A	内不・外S	Bb		不明	1		37	8
242	2号竪穴住居	埋2	口縁～体部	4	D	内S・外S	Bb+2Da+C Da+Ab+2Da+Da	内外面	6.5	2		36	9
243	2号竪穴住居	埋2	体部	不明	不明	内N・外S	Db		8.0	3		37	8
244	2号竪穴住居	埋2	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	Ab+Da+Ab		9.0	2		37	9
245	2号竪穴住居	埋2	体部	不明	不明	内不・外S	Aa		不明	2		-	—
246	2号竪穴住居	埋2	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	有り不明		5.5	1		—	-
247	2号竪穴住居	埋2	底部	不明	不明	内S・外S		内面	8.0	2		36	8
248	2号竪穴住居	床面	口縁部	2	Ba	内S・外S			3.0	1		—	
249	2号竪穴住居	床面	体部	不明	不明	内S・外不	B		10.5	2		37	9
250	2号竪穴住居	床面	体部	不明	不明	内N・外S	Aa		7.0	2		37	9
251	2号竪穴住居	床面	底部	不明	不明	内S・外S		内面	6.5	2		36	9
252	2号竪穴住居	ピット1	口縁部	2	Ba	内S・外S			8.0	1		37	9
253	6号土坑	埋土1層	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	K		7.0	2		38	10
254	4号土坑	埋土	口縁部	不明	A	内S・外不			6.0	3		-	—
255	Pit41	埋土	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		7.0	1		38	10
256	Pit50	埋土	口縁部	4	A	内S・外S	Da		9.0	2		38	10
257	Pit50	埋土	底部	不明	不明	内S・外S			不明	2		36	10
258	風倒木2	—	体部屈曲部	不明	不明	内S・外S	K		8.0	2		39	15
259	風倒木2	—	体部	不明	不明	内S・外S	有り不明		6.5	2		39	15
260	風倒木2		底部	不明	不明	内S・外S			6.5	2		-	-
261	風倒木5	—	底部	不明	不明	内不・外N			8.0	2		36	15
262	風倒木8		底部	不明	不明	内N・外N			6.0	3	早期中葉	36	15

※表中の略号について

表のなかで用いている記号の示す内容について、波頂形、口縁形態、文様の項目に関しては、本文を参照されたい。器面調整に関しては、Sは貝殻条痕文、Nは貝殻以外の調整具によるナデ、不は調整の種類が不明、をそれぞれ示す。器厚の欄の数値の単位はミリである。胎土については、1は胎土中に繊維を多く含むもの、2は繊維を少量含むもの、3は繊維を全く含まないものを表している。

(3) 石器

今回の調査で、剝片石器・磨製石器・礫石器117点、リタッチドフレーク52点、石核21点、剝片441点、チップ1,248点、剝片・チップ以外の石片114点、総計1,993点の石器が出土した。剝片石器・磨製石器・礫石器の内訳は、石鏃19点、石錐2点、石匙8点、石篦14点、不定形石器としたもの61点、破損により器種不明の両面加工石器10点、磨製石斧1点、凹石1点、磨痕と敲打痕を有する礫石器1点である。器種の定義、類型の説明を行いながら述べるため、器種・類型ともに最も豊富に出土している遺物包含層2層・2層下部出土石器群から記述していく。

① 遺物包含層2層・2層下部出土の石器群

【石鏃】(図45－1～7、図版17－1～7)

石鏃は、この層から未成品を含め7点出土した。全て無茎鏃である。類型化は基部形状に基づいて行った。1類は凹基無茎鏃で、基部の抉りの深さにより1a類、1b類の2類型に細分される。2類は平基無茎鏃である。1a類(図45－1、2、図版17－1、2)は基部の抉りの深いもので、2点出土した。図45－1(図版17－1)は頁岩製で、両側辺をやや内弯させ、尖頭部が細く鋭くなるように整形されている。図45－2(図版17－2)は凝灰岩製で、尖頭部は再生を受けていると考えられる。いずれも両面加工により薄手に作られている。1b類(図45－3～5、図版17－3～5)は基部の抉りの浅いもので、3点出土した。全て頁岩製である。図45－3(図版17－3)は尖頭部近くで両側辺が内弯し、鋭い尖頭部を作り出している。この石鏃は両面加工で作られているが、図45－4(図版17－4)は周縁のみ、図45－5(図版17－5)はほぼ片面のみの加工で作られている。この他に、石英安山岩製石鏃の未成品(図45－7、図版17－7)と破損品(図45－6、図版17－6)1点ずつが出土している。この層からの2類の出土はなかった。

【石錐】(図45－8、図版17－8)

玉髄製の石錐が1点出土した。横長剝片の一端を加工して断面三角形の錐部を作り出している。図左側面には錐部の一側辺を成す折れ面があり、折面を利用した石器製作がみとめられる。

【石匙】(図45－9～13、図版17－9～13)

石匙は5点出土した。全て縦型石匙であり、細身のものが多い。図45—10、12、13(図版17—10、12、13)のように、丁寧に加工されたか、または何度も刃部再生を受けて両面加工状になったものと、図45－9、11(図版17－9、11)のように素材の縁辺を調整したのみの比較的簡単なつくりのものがみられる。いずれも良質の珪質頁岩を用いている。ほとんどが刃角の小さい薄い刃部を有するが、図45—10(図版17—10)は末端に急角度の刃部を持つ。

【石篦】(図45－14～17、図版17　14～17、図46　18～24、図版18—18～24)

石篦は、11点出土した。全体の形状により3類型に分類した。1類(図45—14、図版17—14)は両側辺がほぼ平行するいわゆる短冊形を呈するものである。石篦全体の中で1点のみ出土している。2類(図45—15、17、図版17—15、17、図46　18、20、21、23、図版18—18、20、21、23)は、基部がすぼまり、刃部に最大幅のくる撥形のもので、最も多く、6点みられる。図45—15(図版17—15)、図46　18(図版18—18)などの大型品は基部頂部まで丁寧に加工されている。他の中型品は、基部頂部に素材の打面または折れ面を残す傾向がある。3類(図45—16、図版17—16、図46—24、図版18—24)は、両側辺の中央がくびれる分銅形のもので、2点出土している。いずれも上下両端に刃部を有している。4類(図46　19、22、図版18—19、22)は、全体がほぼ楕円形を呈するもので、2点出土している。2類と3類には頁岩や玉髄が選択され、1類と4類には石英安山岩や凝灰岩が用いられている。

【不定形石器1類】(図46—25、図版18—25、図47—27、28、31、図版19—27、28、31)

剝片の縁辺を連続的な剝離で加工して薄い刃部を作り出した、いわゆるサイドスクレイパー。15点出土し、石英安山岩、頁岩、玉髄、鉄石英など多様な石材を用いている。図46—25(図版18—25)は玉髄の縦長剝片を用い

たものである。図47—27（図版19—27）は頁岩製である。実測背面の大半が火を受けている。図47—28（図版19—28）は鉄石英の折れて細くなった剥片を用いたものと考えられる。図47—31（図版19—31）は石英安山岩の自然面を残す素材を用いている。実測図下面に折れ面がみられる。

【不定形石器2類】（図46—26、図版18—26、図47—33、図版19—33）

剥片の縁辺を連続的に剥離して急斜度の刃部を作り出したもの。5点出土している。図46—26（図版18—26）は玉髄製で背面に大きなネガティブ面を有し、腹面は節理面である。図47—33（図版19—33）は頁岩の不整形な剥片を素材としている。これらの素材は、剥片石器に適した石質であるが、その形状は石鏃や石篦に使われるものとは異なっている。

【不定形石器3類】（図47—29、図版19—29）

折面から調整を加えた石器で、1点出土している。石材は軟質の泥岩で、両側面に折れ面を有する素材を用いている。

【不定形石器4類】（図47—34、図版19—34）

両面加工によりほぼ卵形または三角形に整形された小型石器。3点出土しており、石英安山岩と頁岩が使用されている。図47—34（図版19—34）は石英安山岩製で、両面を粗い剥離で整形している。

【不定形石器5類】

おもに片面を加工して全体を楕円形に整形した大型の石器。この層からの出土はなかった。

【不定形石器6類】（図47—30、図版19—30）

片面を集中的に加工し、ほぼ平坦な面を作り出した石器。1点出土している。図47—30（図版19—30）は石英安山岩製で、素材の腹面側を丁寧に加工し平坦に整形している。末端はやや尖るように細かい調整で整えられている。

【不定形石器7類】（図47—32、図版19—32）

素材の縁辺を粗く剥離したもの。2点出土している。刃部と考えられる部位はみとめられず、形態にも統一性がないため、あるいは何かの未成品とも考えられる。図47—32（図版19—32）は石英安山岩の自然面を残す素材を用いている。

【破損により器種不明の両面加工石器】（図47—35～40、図版19—35～40）

図47—35（図版19—35）は頁岩製で、石匙に類似した両面加工の薄い刃部を有している。図47—36（図版19—36）は玉髄製で、上下両端に折れ面を有しており、下端に集中的に両面加工が施されている。図47—38（図版19—38）は、良質の頁岩を用いて精巧に作られた石器である。実測腹面には破損時の剥離痕がみられる。図47—39（図版19—39）は尖頭器状を呈すると考えられるが、先端部の作り出しが不明瞭である。石材は石英安山岩である。

【磨製石斧】（図48—41、図版20—41）

白色の凝灰岩製擦切石斧である。刃部はわずかしか残っていないが、片刃に近いと考えられる。背面はほぼ平坦に、腹面は丸みを持って研磨され、横断面は蒲鉾形を呈する。

【凹石】（図48—42、図版20—42）

安山岩の円礫両面に浅い凹孔を有する。肉眼観察では両面の凹孔は同じ様な作業で生じたものと考えられる。

【磨面と敲痕を有する石器】（図48—43、図版20—43）

磨面は3面あると考えられるが、どの面も擦痕は不明瞭であるため、実測図では磨面の範囲を破線で示すにとどめた。安山岩製で、頂部には敲打痕がみられる。

【石核】（図49—44～47、図版21—44～47、図50—48、49、図版21—48、図版22—49）

石核は14点出土している。頁岩2点、泥岩1点のほかはすべて石英安山岩である。図49—44（図版21—44）は頁岩の小型石核である。頁岩の小型剥片を多く生産した痕跡がみられる。図49—46（図版21—46）は石英安山岩

の小型石核で、背面、上面、左側面にある一定の打面からほぼ同方向に連続剥離を行った痕跡がみられる。図50—48（図版21—48）は頁岩の大型石核で、作業面がほぼ1面に集中している点が特徴的である。剥離は主に図左右両側面を打面として行われている。残核からは小型の横長剥片を多く生産したことが観察できる。図50—49（図版22—49）は石英安山岩の大型石核で、作業面はほぼ2面に固定されている。剥離方向は多様であるが、縦長剥片を生産したと考えられる剥離痕が多くみられる。

② 第1号竪穴住居跡出土の石器群

【石鏃】

石英安山岩を用いた石鏃の未成品と考えられるものが2点出土している。

【不定形石器1類】（図51—50、図版22—50）

1点出土している。玉髄製で、やや鋸歯状の刃部を有する。図上面に折れ面がみられるが、素材のものか、使用後に破損したものかは明確でない。

【不定形石器2類】（図51—52、図版22—52）

石英安山岩製の1点が出土している。自然面を残す大型縦長剥片の末端に刃部を作り出している。

【不定形石器4類】（図51—51、図版22—51）

石英安山岩製で、1点出土している。腹面をより丁寧に加工し、ほぼ平坦な面を形成している。

【不定形石器7類】（図51—53、図版22—53）

石英安山岩の折れた素材を用いている。1点出土している。

【石核】（図51—54、55、図版22—54、図版23—55、図52—56～58、図版23—56～58）

石核は6点出土している。流紋岩1点と凝灰岩が1点のほかは、すべて石英安山岩である。1面に自然面を残すものが多く見られる（図51—54、図版22—54、図52—56～58、図版23—56～58）。図51—54（図版22—54）には、背面の作業面を打面として図下面で連続的に小型剥片を生産した痕跡がある。図52—56（図版23—56）は流紋岩の石核で、図上面を主な打面として縦長剥片を生産したと考えられる。図52—57（図版23—57）は石英安山岩で、多方向の剥離痕がみられる作業面や、同一方向の連続した剥離痕がみられる作業面がある。図52—58（図版23—58）は泥岩の大型剥片を素材としたもので、素材の周縁をめぐるように剥片を剥離している。

③ 第2号竪穴住居跡出土の石器群

【石鏃】（図53—59～63、図版24—59～63）

平基無茎鏃の2類（図53 59～61、63、図版24—59～61、63）は、8点出土し、石鏃全体で最も多くみられる類型である。全て第2号竪穴住居跡の埋土から出土している。石材は、8点中5点が石英安山岩で、1類が頁岩と凝灰岩で占められていることと対照的である。図53—59、63（図版24—59、63）は頁岩製で比較的大型・厚手の石鏃である。図53— 60、61（図版24—60、61）は石英安山岩製で、小型だが厚みのある石鏃である。図53—62（図版24—62）は頁岩製石鏃の先端部である。

【石錐】（図53—64～66、図版24—64～66）

3点出土している。図53—64（図版24—64）は唯一の横型石匙である。つまみ部は両面加工で作り出されているが、刃部には微細な剥離痕のみがみられるため、素材の縁辺をそのまま刃部としていたと考えられる。石材は頁岩である。図53—66（図版24—66）は小型の縦型石匙で、節理面のある素材を用いている。頁岩製で、末端には急角度の刃部を有する。破損した図53—65（図版24—65）も含め、いずれもつまみ部上面に素材の打面または折れ面を残している。

【石篦】（図53—67、68、図版24—67、68）

頁岩製の石篦が2点出土している。中型品だが両者とも入念な剥離によって撥形に整形されており、基部頂部に素材の打面または折れ面を残さないなど、2層・2層下部の石篦と若干様相が異なる。

【不定形石器1類】（図53—69、70、73、図版24—69、70、73）

9点出土している。図53—69（図版24—69）は流紋岩の横長剥片を用いている。図53—70（図版24—70）は頁岩製で上端に折れ面を有し、両側辺に内弯する刃部を持つ。図53—73（図版24—73）は、自然面を多く残す石英安山岩の大型剥片を素材としている。

【不定形石器2類】（図54—77、図版25—77）

5点出土しており、全て石英安山岩製である。図54—77（図版25—77）は、素材の剥片の図上面、右面に折れ面がみられ、大型の横長剥片を折って用いたものと考えられる。

【不定形石器3類】（図54—76、図版25—76）

流紋岩製の1点が出土している。左右両側面に折れ面を有し、それにより尖頭部が形成されている。

【不定形石器4類】（図54—71、74、75、図版24—71、図版25—74、75）

ほとんどが石英安山岩製で、9点出土している。図54—71、74（図版24—71、図版25—74）は、素材の自然面や節理面を残しているが、反対側の面は丁寧に加工されている。図54—75（図版25—75）は唯一の頁岩製のものである。

【不定形石器5類】（図54—72、図版24—72）

全体でも1点のみの出土である。良質の珪質頁岩を用いており、主に片面加工により整形しているが、図右側辺には両面加工が施されている。

【不定形石器6類】（図54—78、図版25—78）

石英安山岩の自然面を多く残す素材を用いており、1点出土している。背面は深い剥離によってほぼ平坦に加工されている。

【不定形石器7類】

3点出土している。すべて石英安山岩製である。

【破損により器種不明の両面加工石器】（図54—79、図版25—79）

4点出土している。図54—79（図版25—79）は石英安山岩製で尖頭器状の石器とも考えられるが、尖頭部の作り出しは不明瞭である。

【石核】（図54—80、図版25—80）

第2号竪穴住居跡からは1点のみ出土している。石材は石英安山岩で、自然面を多く残している。図上下左右の側面を主な作業面としており、それらの作業面から縦長、横長など様々な形状の剥片を生産している。

④ **ピット等出土の石器**

【石錐】（図54—81、図版25—81）

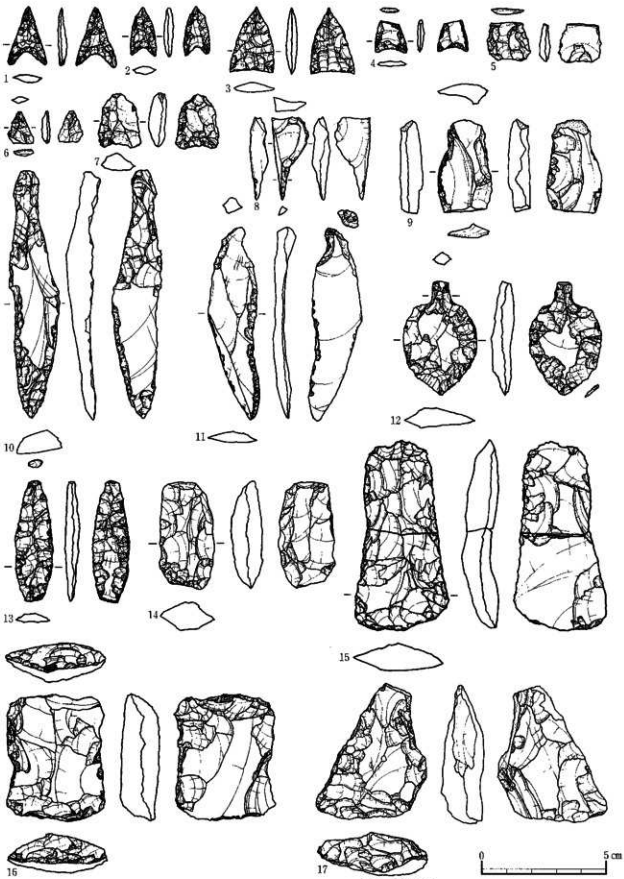
ピット86から石錐が1点出土している。頁岩製で、細長いつまみ部と幅広で短い断面菱形の錐部を持つ。上面に素材のものと考えられる折れ面がみられる。

【石匙】（図54—82、図版25—82）

風倒木跡8から1点出土している。玉髄製で、図右側面に折れ面を有する素材を用いている。両面に素材の面を少しずつ残すが、全体に深い剥離で丁寧に加工されているといえる。

【不定形石器1類】

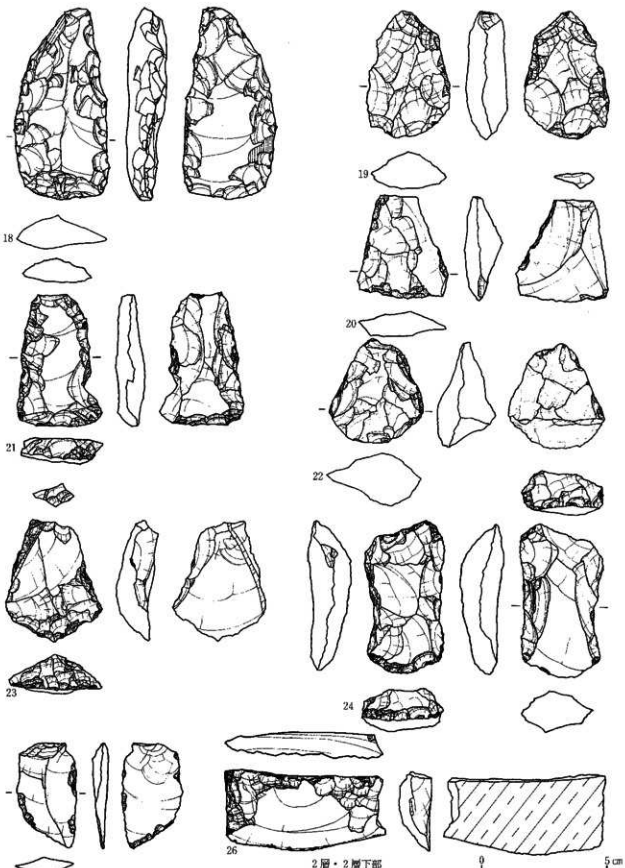
ピット27から石英安山岩製の1点が出土している。



2層・2層下部
1～7　石鏃　8　石錐　9～13　石匙　14～17　石箆

図45　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(1)

Fig.45 Stone implements from AOE3(1)



2層・2層下部
18～24　石鏃　25・26　不定形石器

図46　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(2)

Fig.46 Stone implements from AOE3(2)

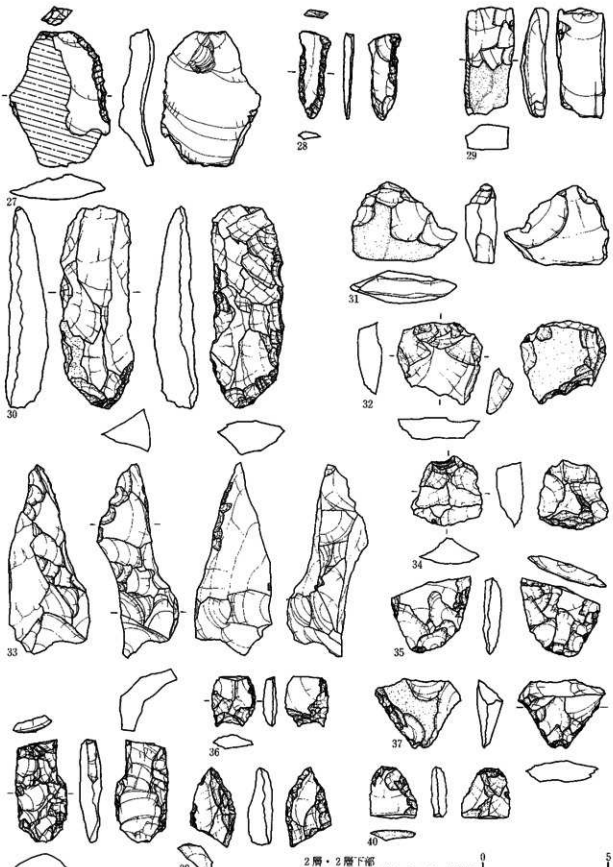
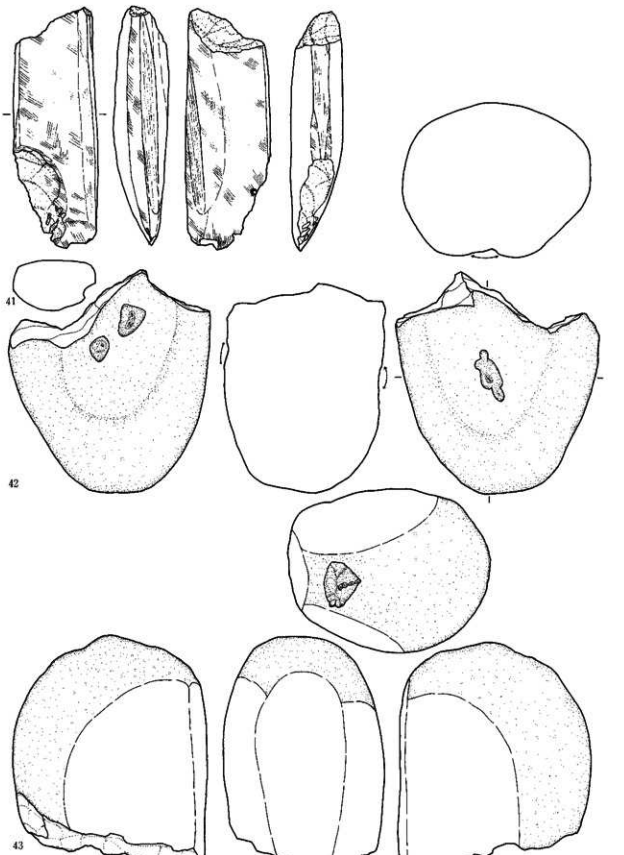


図47　青葉山遺跡 E 地点第 3 次調査出土石器(3)

Fig.47 Stone implements from AOE3(3)



2層・2層下部
41　磨製石斧　42　凹石　43　磨石・敲石

図48　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(4)

Fig.48 Stone implements from AOE3(4)

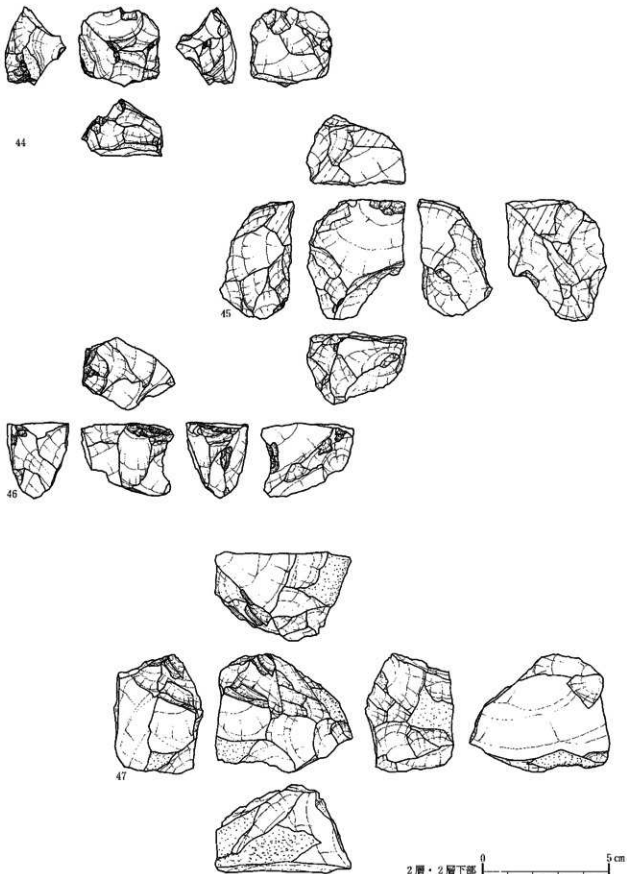


図49　青葉山遺跡 E 地点第 3 次調査出土石器(5)
Fig.49 Stone implements from AOE3(5)

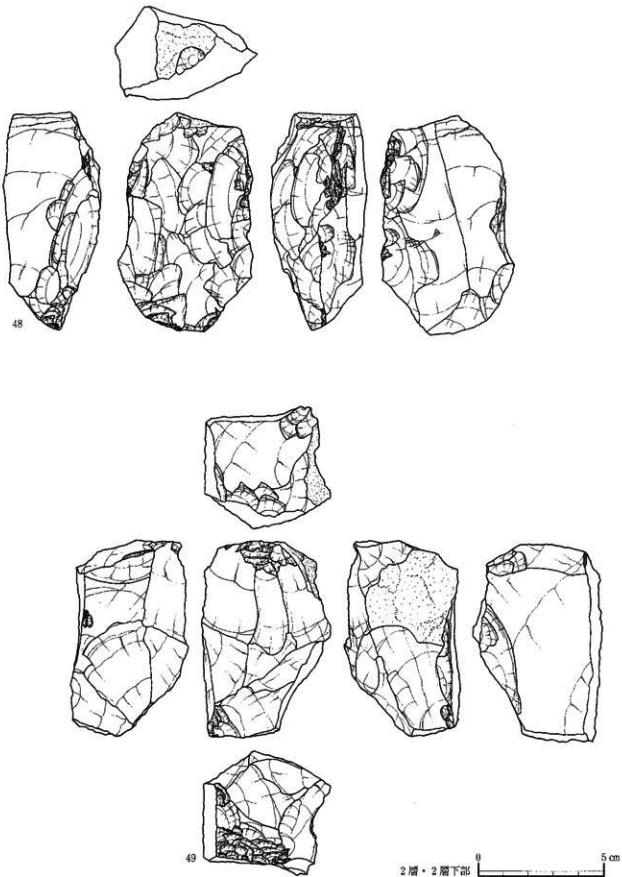


図50　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(6)
Fig.50 Stone implements from AOE3(6)

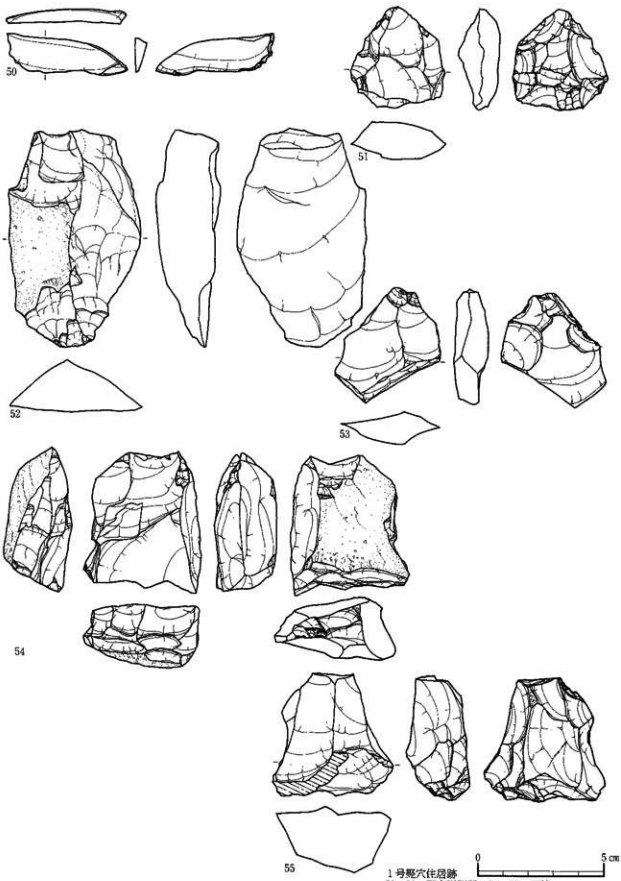


図51　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(7)

Fig.51 Stone implements from AOE3(7)

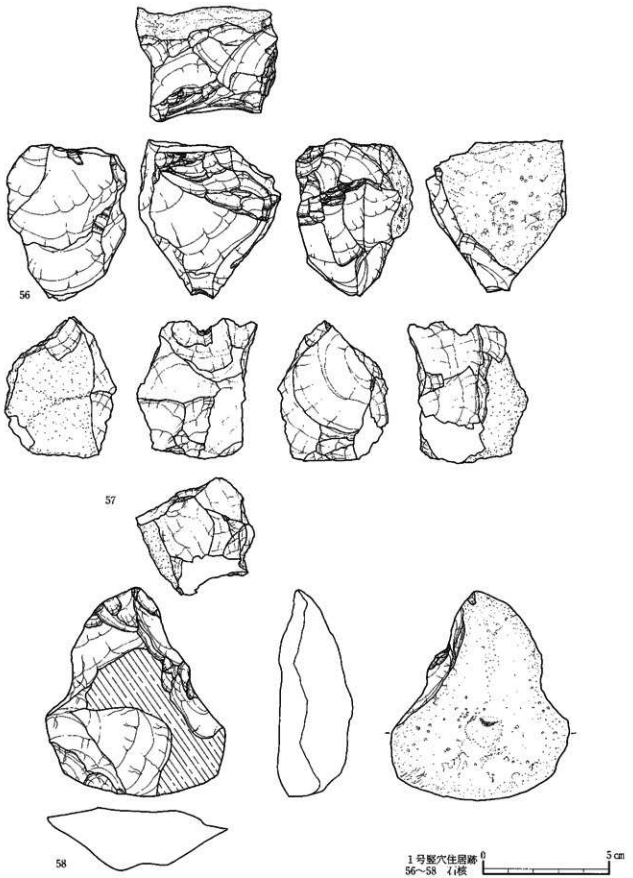
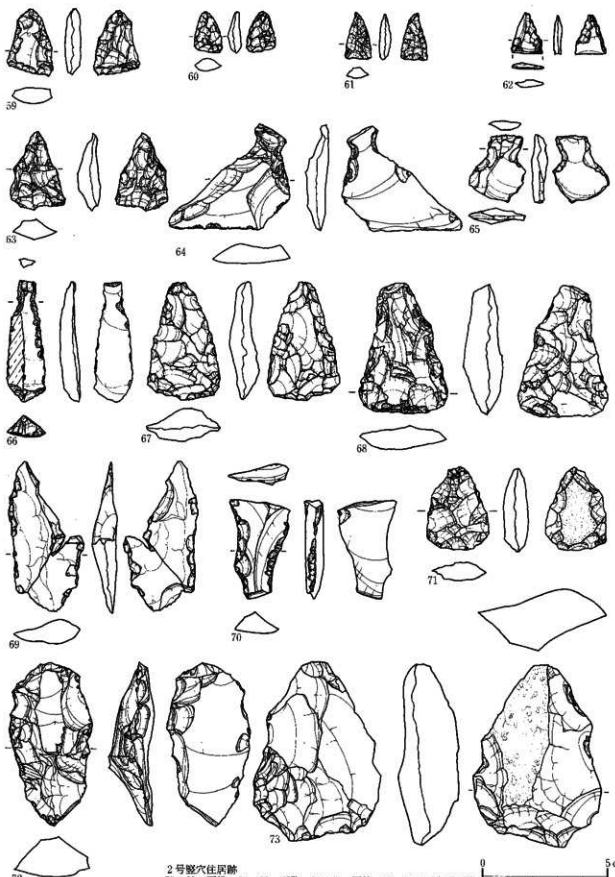


図52　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(8)

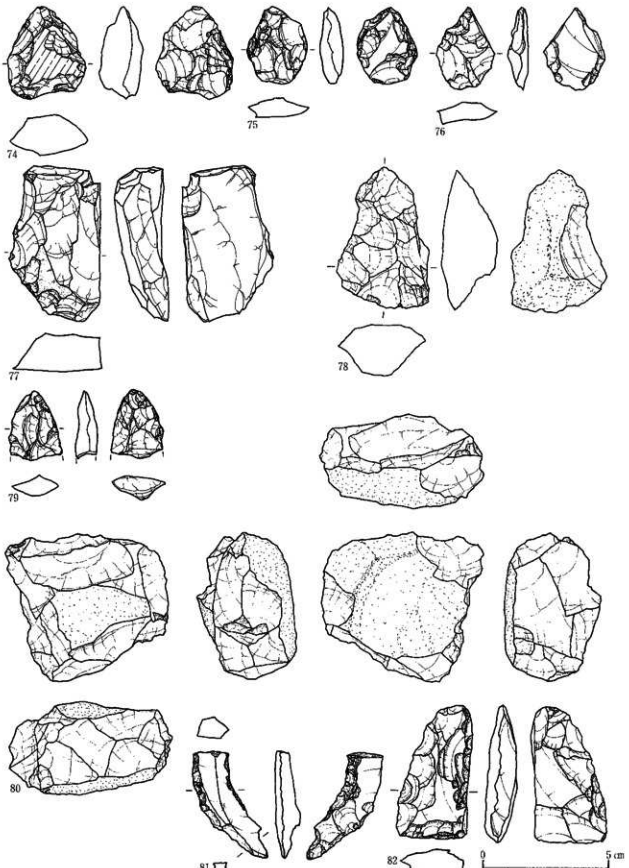
Fig.52 Stone implements from AOE3(8)



2号竪穴住居跡
59～63　石鏃　64～66　石匙　67・68　石錐　69～73　不定形石器

図53　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(9)

Fig.53 Stone implements from AOE3(9)



2号竪穴住居跡・ピット・風倒木跡
74～78 不定形石器 79 破損品 80 石核 81 石鏃 82 石匙

図54 青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(1)

Fig.54 Stone implements from AOE30(1)

表 8　青菜山遺跡 E 地点第 3 次調査出土石器観察表(1)

Tab.8 Attribute list of stone implements from AOE3(1)

No.	出土地区	層位・遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図No.	写真No.
1	L5区	2層	石器	18.90	10.25	3.40	0.6	緑泥岩		45-2	17-2
2	E3区	2層	石鏃	21.20	16.80	6.65	1.7	石英安山岩	未成品	45-7	17-7
3	F4区	2層上部	石鏃	(15.10)	16.55	3.60	(1.1)	頁岩		45-5	17-5
4	N5区	2層下部	石鏃	26.00	17.50	4.50	1.7	頁岩		45-3	17-3
5	E4区	2層上部	石鏃	(12.45)	(9.80)	3.00	(0.3)	石英安山岩		45-6	17-6
6	G3区	2層下部	石鏃	23.30	16.90	3.20	0.8	頁岩		45-1	17-1
7	G2区	2層上部	石鏃	(12.05)	12.40	1.70	(0.3)	頁岩		45-4	17-4
8	C4区	2層下部	石匙	32.40	13.65	3.70	1.6	玉髄		45-8	17-8
9	E4区	2層	石匙	47.40	14.50	3.90	4.0	頁岩		45-13	17-13
10	P14区	2層	石匙	75.00	19.75	6.65	6.6	頁岩		45-11	17-11
11	L6区	2層下部	石匙	98.25	17.50	9.65	14.0	頁岩		45-10	17-10
12	F4区	2層上部	石匙	41.70	29.35	7.35	9.1	頁岩		45-12	17-12
13	K5区	2層下部	石匙	(36.15)	22.20	7.75	(6.4)	頁岩		45-9	17-9
14	F3区	2層	石匙	51.95	36.45	14.70	32.2	凝灰岩		45-17	17-17
15	G3区	2層	石匙	42.50	37.15	21.15	26.2	頁岩		46-22	18-22
16	M4区	2層下部	石匙	76.80	37.10	17.50	43.8	頁岩		46-18	18-18
17	L3区	2層下部	台石	42.40	22.65	12.75	19.7	石英安山岩		45-14	17-14
18	J6区	2層下部	石錘	57.25	32.40	16.10	34.9	頁岩		46-21	18-21
19	I5区	2層上部	石皿	52.30	34.55	10.80	20.3	頁岩		46-24	18-24
20	F3区	2層下部	石皿	40.50	36.50	13.00	10.8	凝灰岩		46-19	18-19
21	K4区	2層下部	石皿	47.80	38.30	14.55	23.7	頁岩		46-23	18-23
22	G2区	2層下部	石皿	50.85	39.85	13.85	37.4	玉髄		45-16	17-16
23	F2区	2層下部	石皿	77.65	37.00	11.50	33.0	頁岩		45-15	17-15
24	P3区	2層下部	石皿	50.60	33.55	17.35	22.7	石英安山岩		46-19	18-19
25	L4区	2層	不定形石器1類	(29.80)	39.12	5.80	(7.0)	玉髄			
26	L4区	2層下部	不定形石器1類	(68.30)	37.85	7.65	(16.8)	頁岩			
27	M3区	2層下部	不定形石器1類	27.65	26.65	7.60	4.3	真岩			
28	K4区	2層下部	不定形石器1類	53.25	24.90	10.00	16.5	石英安山岩			
29	J6区	2層下部	不定形石器1類	49.70	33.15	14.70	21.8	玉髄			
30	I4区	2層下部	不定形石器1類	71.00	33.45	7.25	3.4	石英安山岩			
31	G2区	2層下部	不定形石器1類	39.60	41.80	12.20	12.2	石英安山岩		47-31	19-31
32	J5区	2層下部	不定形石器1類	25.35	27.15	5.80	3.2	真岩			
33	F2区	2層下部	不定形石器1類	30.20	24.60	5.20	3.4	石英安山岩			
34	M2区	2層下部	不定形石器1類	66.00	49.05	16.05	38.9	鉄石英			
35	P3区	2層下部	不定形石器1類	48.50	40.50	12.65	23.0	石英安山岩			
36	P3区	2層上部	不定形石器1類	28.50	24.60	13.40	9.2	鉄石英			
37	J5区	2層下部	不定形石器1類	42.70	24.30	6.30	5.5	玉髄		46-25	18-25
38	K3区	2層下部	不定形石器1類	53.35	38.25	9.40	17.9	頁岩		47-27	19-27
39	P3区	2層下部	不定形石器1類	13.35	31.25	5.20	1.4	鉄石英		47-28	19-28
40	M4区	2層	不定形石器2類	(28.95)	62.30	13.25	(31.5)	玉髄		46-26	18-26
41	M5区	2層	不定形石器2類	33.60	25.45	8.70	6.7	石英安山岩			
42	J3区	2層下部	不定形石器2類	38.55	58.95	12.80	21.6	石英安山岩			
43	L3区	2層下部	不定形石器3類	32.85	76.00	20.20	32.7	頁岩		47-33	19-33
44	H2区	2層下部	不定形石器3類	24.35	26.35	15.55	7.4	石英安山岩			
45	F4区	2層下部	不定形石器3類	42.55	18.50	9.25	10.4	頁岩		47-29	19-29
46	N5区	2層下部	不定形石器4類	23.90	21.30	8.35	4.4	頁岩			
47	F2区	2層下部	不定形石器4類	26.50	27.25	12.05	6.9	石英安山岩		47-34	19-34
48	G2区	2層下部	不定形石器4類	29.05	19.70	7.00	3.5	石英安山岩			
49	M3区	2層下部	不定形石器5類	79.95	27.75	14.40	34.8	石英安山岩		47-30	19-30
50	F2区	2層下部	不定形石器7類	34.50	28.80	10.80	10.8	石英安山岩		47-32	19-32
51	F2区	2層	不定形石器7類	25.15	24.20	9.00	3.2	石英安山岩			
52	G3区	2層	不明	(40.25)	20.50	6.80	(6.7)	真岩		47-38	19-38
53	F3区	2層	不明	(35.60)	32.00	6.15	(6.1)	頁岩		47-35	19-35
54	H3区	2層下部	不明	17.45	19.35	5.65	2.3	玉髄		47-36	19-36
55	M4区	2層下部	不明	27.65	26.65	6.55	4.3	真岩		47-37	19-37
56	G5区	2層下部	不明	20.15	18.85	6.25	1.9	石英安山岩		47-40	19-40
57	F3区	2層下部	不明	18.65	30.65	8.25	3.8	石英安山岩		47-39	19-39
58	N2区	2層	礫敲石器	(94.65)	33.65	29.25	(93.3)	凝灰岩		48-41	20-41
59	F4区	2層上部	剥片	85.35	76.05	63.45	641.0	安山岩		48-42	20-42
60	M4区	2層下部	磨石・敲石	(87.72)	80.45	54.50	(526.0)	安山岩		48-43	20-43
61	O6区	2層	石核	56.85	39.80	30.00	46.7	石英安山岩			
62	K3区	2層	石核	37.95	36.70	29.20	38.9	石英安山岩		49-68	21-68
63	I7区	2層	石核	47.30	39.30	25.40	36.8	石英安山岩		49-45	21-45
64	K9区	2層	石核	53.85	64.65	23.20	97.6	石英安山岩			
65	L6区	2層下部	石核	57.70	48.00	36.95	69.8	石英安山岩			
66	F4区	2層下部	石核	77.70	51.30	43.30	200.9	石英安山岩		50-49	22-49
67	F4区	2層下部	石核	86.10	78.60	37.60	290.2	石英安山岩			
68	L5区	2層下部	石核	84.75	55.90	37.55	168.4	真岩		50-48	21-48
69	K6区	2層下部	石核	48.25	81.60	23.50	83.7	石英安山岩			
70	K6区	2層下部	石核	41.90	90.55	23.10	80.8	凝灰			
71	I7区	2層下部	石核	30.80	32.90	20.25	20.7	真岩		49-44	21-44
72	K6区	2層下部	石核	78.45	68.90	38.80	158.1	石英安山岩			

表9　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器観察表(2)

Tab.9 Attribute list of stone implements from AOE3(2)

No	出土地区	層位・遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図No	写真No
73	L6区	2層下部	石核	52.10	55.25	41.65	78.2	石英安山岩		49-47	21-47
74	E4区	2層下部	石核	63.50	68.05	25.35	95.3	石英安山岩			
75	E4区	第1号住居埋土1層	石鏃	24.95	17.60	6.15	2.3	石英安山岩	未成品		
76	F4区	第1号住居埋土1層	石鏃	15.60	(9.40)	3.80	(0.4)	石英安山岩	先端部		
77	F4区	第1号住居埋土1a層	不定形石器1類	13.40	49.20	4.70	3.3	玉髄		51-50	22-50
78	F4区	第1号住居埋土1a層	不定形石器2類	87.25	52.40	23.50	81.3	石英安山岩		51-52	22-52
79	F4区	第1号住居床面	不定形石器4類	37.80	37.20	14.40	19.6	石英安山岩		51-51	22-51
80	F4区	第1号住居埋土1層	不定形石器7類	47.50	34.60	13.60	17.5	石英安山岩		51-53	22-53
81	E4区	第1号住居埋土1層	石核	55.80	47.10	23.95	65.8	石英安山岩		51-54	22-54
82	F5区	第1号住居埋土1層	石核	47.40	52.80	24.40	47.9	石英安山岩		51-55	23-55
83	F5区	第1号住居埋土1層	石核	56.50	43.25	41.40	102.1	石英安山岩		52-57	23-57
84	F4区	第1号住居埋土1層	石核	62.85	52.60	41.60	161.1	流紋岩		52-56	23-56
85	F4区	第1号住居埋土1層	石核	54.45	53.60	27.70	79.3	石英安山岩			
86	F4区	第1号住居埋土1a層	石核	63.45	83.10	29.00	140.0	凝灰岩		52-58	23-58
87	G2区	第2号住居埋土1層	石鏃	(15.65)	12.20	2.40	(0.5)	玉髄		53-62	24-62
88	F2区	第2号住居埋土2層	石鏃	21.00	13.65	2.95	0.7	凝灰岩			
89	G2区	第2号住居埋土2層	石鏃	31.25	21.65	8.15	4.4	頁岩		53-63	24-63
90	G2区	第2号住居埋土2層	石鏃	10.30	8.60	1.50	0.1	頁岩			
91	F2区	第2号住居埋土2層	石鏃	15.75	10.95	4.60	0.6	石英安山岩		53-60	24-60
92	C1区	第2号住居埋土2層	石鏃	18.50	10.95	5.00	0.7	石英安山岩		53-61	24-61
93	F3区	第2号住居埋土1層	石鏃	24.00	(9.70)	5.55	(0.7)	石英安山岩			
94	G3区	第2号住居埋土2層	石鏃	24.90	28.30	6.05	3.2	頁岩		53-59	24-59
95	G3区	第2号住居埋土2層	石鏃	(10.70)	25.45	3.15	(0.5)	石英安山岩			
96	G3区	第2号住居埋土2層	石鏃	16.15	10.70	3.65	0.5	石英安山岩			
97	F2区	第2号住居埋土1層	石匙	(26.20)	(20.80)	6.00	(2.8)	凝灰岩		53-65	24-65
98	F3区	第2号住居埋土1層	石匙	47.80	15.10	6.75	4.3	頁岩		53-66	24-66
99	F3区	第2号住居床面	石匙	41.90	37.25	6.20	9.4	頁岩		53-64	24-64
100	F2区	第2号住居埋土2層	石匙	51.75	35.50	15.10	20.6	頁岩		53-68	24-68
101	G2区	第2号住居埋土1層	石匙	46.30	28.75	9.00	11.2	頁岩		53-67	24-67
102	G2区	第2号住居埋土1層	不定形石器1類	32.20	22.60	10.25	6.3	石英安山岩		53-73	24-73
103	H2区	第2号住居埋土2層	不定形石器1類	29.35	26.30	10.30	7.9	石英安山岩			
104	G2区	第2号住居床面	不定形石器1類	19.15	16.15	6.50	1.8	石英安山岩			
105	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器1類	60.55	28.55	8.80	10.0	流紋岩		53-69	24-69
106	G3区	第2号住居埋土1層	不定形石器1類	21.20	13.10	4.65	1.2	頁岩			
107	F3区	第2号住居埋土1層	不定形石器1類	38.10	48.10	9.05	16.6	石英安山岩			
108	G3区	第2号住居埋土2層	不定形石器1類	30.55	18.40	7.60	3.4	石英安山岩			
109	C3区	第2号住居床面	不定形石器1類	28.75	18.15	6.70	2.9	石英安山岩			
110	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器1類	38.25	24.30	7.45	6.1	頁岩		53-70	24-70
111	F1区	第2号住居床面	不定形石器2類	34.80	34.15	19.40	43.4	石英安山岩		54-77	25-77
112	F2区	第2号住居埋土1層	不定形石器2類	68.70	47.05	19.30	38.4	石英安山岩			
113	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器2類	37.65	32.20	11.05	10.5	石英安山岩			
114	G3区	第2号住居埋土2層	不定形石器2類	42.00	40.85	13.45	21.5	石英安山岩			
115	F3区	第2号住居埋土2層	不定形石器2類	28.20	30.60	12.70	8.9	石英安山岩			
116	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器3類	24.70	24.00	6.95	4.5	流紋岩		54-76	25-76
117	F1区	第2号住居埋土1層	不定形石器4類	33.20	24.90	9.20	6.2	石英安山岩		53-71	24-71
118	G1区	第2号住居埋土1層	不定形石器4類	27.70	23.90	8.20	4.2	石英安山岩			
119	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器4類	35.40	31.25	16.35	12.8	石英安山岩		54-74	25-74
120	G2区	第2号住居埋土1層	不定形石器4類	31.95	24.85	11.60	6.0	石英安山岩			
121	G3区	第2号住居埋土1層	不定形石器4類	30.70	23.60	8.60	5.6	頁岩		54-75	25-75
122	F3区	第2号住居埋土1層	不定形石器4類	26.90	17.35	8.05	2.5	石英安山岩			
123	F3区	第2号住居埋土1層	不定形石器4類	20.75	20.65	9.90	3.6	石英安山岩			
124	G3区	第2号住居埋土2層	不定形石器4類	24.75	18.85	6.90	2.8	石英安山岩			
125	G3区	第2号住居埋土2層	不定形石器4類	36.65	27.45	6.95	5.6	石英安山岩			
126	G2区	第2号住居埋土2層	不定形石器5類	31.70	34.15	15.50	31.0	頁岩		53-72	24-72
127	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器6類	36.50	55.65	23.25	33.7	石英安山岩		54-78	25-78
128	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器7類	40.00	39.10	13.30	16.8	石英安山岩			
129	F3区	第2号住居埋土1層	不定形石器7類	46.20	26.80	15.05	13.2	石英安山岩			
130	F2区	第2号住居埋土2層	不定形石器7類	46.75	39.75	20.25	29.1	石英安山岩			
131	G1区	第2号住居埋土1層	不明	31.00	23.40	10.25	5.3	石英安山岩			
132	F2区	第2号住居埋土2層	不明	13.65	21.05	8.15	1.7	石英安山岩			
133	F2区	第2号住居埋土2層	不明	27.45	20.50	8.10	3.4	石英安山岩		54-79	25-79
134	G3区	第2号住居埋土2層	不明	20.25	13.20	6.30	1.5	頁岩			
135	C1区	第2号住居床面	石核	54.10	56.90	38.80	125.0	石英安山岩		54-80	25-80
136	P16区	風倒木痕8埋土	石篦	53.60	28.55	9.30	16.6	玉髄		54-82	25-82
137	J11区	Pit27埋土	不定形石器1類	47.00	60.20	15.35	33.4	石英安山岩			
138	I3区	Pit86埋土	石錐	50.00	14.45	7.70	6.4	頁岩		54-81	25-81

(4) その他の遺物

その他の遺物としては、M19区２層下部出土の土師器坏（No198）が１点ある（図36－５、図版14）。ロクロを使用したもので、内面には黒色処理を行い放射状に磨いている。底部外面は、回転糸切りの後に、周縁部に手持ちヘラケズリが施されている。底部付近しか残っていないが、底径は復元してみると９cm程度で、口径16～17cm程度の、口径と底径の比が0.5前後の、体部があまり大きく開かない器形と推定される。このような特徴からみて、９世紀前半代でも新しい時期とされる多賀城跡第60次調査ＳＥ2101Ｂ井戸跡III層出土資料（真山・丹羽1992）や、９世紀後半とされる多賀城跡第61次調査11層出土資料（柳沢・進藤1992）に類し、本資料も９世紀中葉から後半と考えられる。

6. 考察

(1) 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器からみた縄文時代早期貝殻条痕文土器の編年

① 研究の流れと問題の所在

山内清男は1920～30年代、縄文土器の起源を追求するなかで、主として関東以北の遺跡から出土する、いわゆる「繊維土器」に着目し、器形、文様、「條痕」の有無などに基づいて、繊維土器の編年を確立しようとした（山内清男1929a）。仙台湾周辺では、松本彦七郎、山内清男、伊東信雄、斎藤忠らにより、七ケ浜町大木囲貝塚をはじめ、柴田町槻木（松崎）貝塚（山内1929a・b、伊東信雄1940）、塩釜市舶入島貝塚（斎藤忠1930、角田文衛1936）、鳴瀬町室浜貝塚、同川下警貝塚（松本彦七郎1929・1930）、小牛田町素山貝塚（伊東前掲）といった著名な貝塚があいついで調査され、層位的出土事例に基づき古手の縄文土器の編年が組み立てられていった。

繊維土器をめぐる編年研究の上では、胎土中の繊維の有無や「條痕」の有無にとりわけ関心が払われていた。「繊維土器」以前の土器が認識されていく過程では、槻木貝塚の調査が重要な意味をもっていた。1927年10月の第1回発掘では、「粗大で、厚く繊維の混入のある土器」（大多数）と、「より薄く、繊維の混入のない、又は著しくない土器」（稀）の両者が識別されてはいたが、「同時に行はれたものと見るのが適當」とされ、時間差は想定されていない（山内1929a）。1928年の春に行われた第2回発掘では、表土及び貝層では「粗大な、繊維の混入のある、内面に條痕のある土器」（「槻木上層式」=「槻木2」）が大多数を占め、貝層以下黒土層では「槻木下層式」=「槻木1」が主体とされ、両者に時間差が認められるようになった（山内1929b）。「槻木1」の文様については、「直線と角をなして走る細隆起線」を挙げ、「縄紋のある例は皆無である」とされた（山内1929b）。

素山貝塚では、貝層下の黒褐色土層（第四層）から「沈線文土器」が、貝層中からは「條痕土器」と「縄文條痕土器」が出土した（伊東前掲）。伊東は、この層位的事実に基づいて、「素山下層式」から「素山上層式」への変遷を指摘すると同時に、貝層中から出土した「條痕土器」と「縄文條痕土器」については、「槻木上層式とおなじものであって、関東地方の茅山式土器と時代を同じうする」との見解を示した。

一方、この時期、関東地方で貝殻条痕文土器を出土する遺跡として注目されていたのが、三浦半島に所在する茅山貝塚であり、赤星直忠、大場磐雄、山内清男により「茅山式土器」が提唱された（大場磐雄1930、山内清男1930、赤星直忠1930）。赤星が「茅山式土器」の特徴として挙げたのは、内外面のアカガイ属による貝殻条痕、胎土中の多量の繊維、尖底の存在、細隆起線紋・沈線紋・點列紋・沈線點列紋・貝押紋型紋などの文様、縄文が極めて稀であること、有孔突起をはじめとする特徴的な突起、体部の隆起帯などであった（赤星前掲）。

終戦直後、千葉県三日月山貝塚の調査を行った吉田格は、底部の形状の変化などに着目し、1949年、東京考古学会の席上で、茅山式土器を野島式—茅山式—三日月山式の3型式に細分する案を公にした。

今日、一般に茅山式土器は、野島式、鵜ケ島台式、茅山下層式、茅山上層式に分けられ、各々の型式の細分が試みられているが、その基礎を築いたのが、赤星直忠、岡本勇らの指導により横須賀市立博物館、横須賀考古学会が行った三浦半島における一連の早期の遺跡の調査である。茅山貝塚（赤星直忠・岡本勇1957）にはじまり、平根山遺跡（赤星・岡本・村越1958）、馬の背山遺跡（岡本1959）、大浦山遺跡（岡本1960）、鵜ケ島台貝塚（岡本1961）、吉井城山貝塚（岡本1962）と続くこの一連の発掘調査は、関東地方の早期縄文土器の編年研究上、極めて重要な成果をもたらした。その後、関野哲夫、瀬川裕市郎、井上賢、鈴木敬介らにより、より細かな視点で野島式から茅山下層式への型式変遷が論じられるようになった（関野哲夫1980、瀬川裕市郎1982、井上賢1994、鈴木啓介1998）。しかし、そうした細分案のなかで検討の対象となったのは、型式学的操作に適した精製土器がほとんどで、赤星らにより「茅山式土器」が提唱された当初からその存在が注目されていた粗製土器を含めた土器群全体のあり方については、本格的な議論が行われているとはいいがたい状況にある。

東北地方では、戦後の早期縄文土器研究は、貝殻沈線文土器をはじめとして、より古い土器の研究が盛んになり、貝殻条痕文土器については、縄文条痕土器との関連で取り上げられることはあっても、本格的な議論の対象

とはならなかった。東北南部では、近年の調査で貝殻条痕文土器の資料が蓄積されるようになり、その変遷案も示されるようになったが(木間宏ほか1989)、未だ地域的な研究の枠を出ておらず、関東地方など他地域の土器との異同の検討が充分行われているとは言いがたい。また、東北中部仙台湾周辺では、後藤勝彦による七ケ浜町吉出浜貝塚の調査資料(後藤勝彦1968)を除けば、貝殻条痕文土器の資料には恵まれなかった。そうしたなか、林健作により東北地方の早期縄文土器の編年案が呈示され、蛇王洞洞穴資料(芹沢長介・林謙作1965)に基づき「槻木1」の編年的位置づけが確定すると同時に、素山上層式の細分が試みられた(林1965)。この細分案は、「素山上層式」を、茅山下層式に併行する「素山II a式」と、「茅山上層式」に併行する「素山II b式」に分離しようとする試みであったが、近年林自身が素山貝塚の調査資料の再検討で述べているように、必ずしも資料の実態を正確に把握したものではなかった(林1990)。またこの段階では、「槻木1式」と素山貝塚上層出土資料との間にはヒアタスがあり、両者を埋める資料、すなわち関東地方の「鵜ケ島台式」に併行する土器の存在が予想されてはいたが、適当な資料がなく、林の編年表ではこの部分が空白となっていた。

青葉山遺跡E地点第3次調査資料は、まさにこの空白を埋める最も良好な資料である。本論では、青葉山遺跡の調査資料を中心に、近年行われた周辺遺跡の調査成果も加味して、貝殻条痕文土器の変遷を明らかにすると同時に、東北南部や関東地方の土器との比較検討を行いたい。

② 青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器の編年的位置づけ

青葉山遺跡E地点の第3次調査で出土した早期の貝殻条痕文土器(以下では青葉山遺跡出土土器と省略)は、次のような特徴を有する。

器形は、体部に2段ないし1段の屈曲を有し、底部は角がやや丸みを帯びた平底を呈する。尖底の土器は存在しない。また、上方から見たとき、口縁部が多角形を呈する土器も存在する。胎土には植物繊維を含み、器面全体が放射肋を持つ二枚貝によって調整される。口縁部の端面は内削ぎのものが多く、口唇部に細かな刻みを加えた小波状口縁が多く認められる。小波状口縁以外には、口縁部が平坦なものや、大波状を呈するもの、W字状の突起を有するものなどが認められる。文様を持つ土器と持たない土器とが存在し、前者は半数以下である。有文土器では、口縁部や体部の上半、体部のくびれ部に文様が施される。施文具には断面円形の工具が選ばれ、これにより沈線や刺突が表現される。文様は、取り幅の狭い沈線と刺突(「押し引き」と呼ばれる連続刺突を含む)によって表現され、微隆起線や縄文、幅広の沈線は全く存在しない。沈線は直線的なものが多く、斜めの平行沈線や斜格子文の他、菱形、方形をはじめとする各種の幾何学文が描かれ、それらの区画内を連続刺突(押し引き)により充填する資料も多数認められる。連続刺突(押し引き)は、沈線区画内を埋める以外に、斜行沈線に平行に沿わせたり、それ自体で幾何学文を構成する場合もある。刺突は基本的に土器の左右あるいは下方から器面に対して斜めに施されており、器面に対して工具の先端を垂直に押し当てたものは極めて少ない。また、これと関連するが、区画沈線の交点に円形の刺突を加えたものは全く存在しない。体部の屈曲部には、斜め下方から施された刺突が横一列に並ぶものが多い。

従来、仙台湾周辺では、このような型式学的特徴を有する土器は、断片的にしか確認されておらず、したがって、それに冠すべき適当な型式名称も存在していない。そのため、この土器群を論じる場合には、この時期の土器の編年研究が進んでいる関東地方の「鵜ケ島台式」や「茅山下層式」を取り上げ、それらとの異同を検討する必要がある。

広義の「茅山式土器」は、1954年の茅山貝塚の調査で得られた知見をもとに「茅山下層式」と「茅山上層式」に細分された(赤星・岡本前掲)。「茅山下層式」に先行する「野島式」については、野島貝塚出土土器を基準資料に、「田戸式」と「茅山式」をつなぐ土器との位置づけがなされていたが(赤星1948)、茅山貝塚の調査により、「茅山下層式」より古いことが層位的に確かめられた。また、その段階で、「野島式」と「茅山下層式」との間には大きな断絶が存在することが認識され、両者をつなぐ土器として**鵜ケ島台式**の名称が取り上げられた。

その後、1958年の三浦市鵜ケ島台遺跡、1960年の横須賀市吉井城山第一貝塚の両貝塚の調査により、「鵜ケ島台式」ならびに「茅山上層式」の型式内容が明らかとなり、この時期の土器の編年大綱がほぼ固まった。

鵜ケ島台遺跡の調査報告書のなかで、型式設定者の岡本勇の示した「鵜ケ島台式」土器について、先に行った青葉山遺跡出土土器の説明と比較する形で、次に紹介する。器形は、体部に2段の屈曲を有し、段と段との間にゆるいくびれ部がかたちづくられる。体部下半はなんら屈曲を示すことなく底径のやや大きな平底につながる。胎土中には繊維が多く含まれ、内外面ともに貝殻によって横方向に器面調整がなされている。口縁部の端面は内削ぎのものが一般的で、口縁部は小波状を呈したものが多い。文様帯は口縁部や体部のくびれ部に形成される。施文具には、径5、6ミリの円形竹管や半截竹管が多用され、径1センチを超えるような太めの竹管は稀である。文様は、微隆起線、沈線、刺突で表現される。代表的な意匠としては、低い微隆起線や沈線による幾何学的な区画のなかを刺突や沈線で充填したものや、沈線や刺突列による格子目文がある。どちらの意匠でも要所要所には、円形竹管の押捺が認められ、円形竹管文はそのような区画文とは別に単独でも多用される。

器形、胎土、調整、口縁部の端面形状、口縁部の装飾の点では、青葉山遺跡出土土器との強い共通性が窺える。しかし文様に関しては、文様帯の位置や区画文の基本的な形態などに共通性が認められる一方で、文様の表現手法や意匠の点で看過できない差異もまた存在する。すなわち青葉山遺跡出土土器は、施文手法に関しては、微隆起線を全く欠いているし、意匠の点では、「鵜ケ島台式」のメルクマールの一つとして重要視されている円形竹管文や、区画内充填文としての沈線文が認められない。

次に「茅山下層式」の型式学的特徴を見てみよう。器形は、体部に2段ないし1段の屈曲を有するが、「鵜ケ島台式」に比べ、屈曲の度合いは弱いとされる。底部は平底である。口縁部はゆるい波状をなし、頂部に突起や特徴的な中空の把手が認められる。文様帯の配置は、基本的に「鵜ケ島台式」を踏襲するが、文様帯の幅は狭くなる傾向が認められる。文様は、円形竹管や半截竹管とともに、指頭により描かれる。沈線や微隆起線による区画文が失われ、竹管による連続刺突列や指頭によると考えられる幅広の凹線で、意匠が直接表現される。意匠の点では、渦文や流水文といった、「鵜ケ島台式」にはほとんど認められない曲線が多く用いられる点が注目される。また、「茅山下層式」には、少数ではあるが、単節の斜行縄文が伴っている。「鵜ケ島台式」と比較して、体部の屈曲の不明瞭化、文様帯の縮小化、意匠表現手法の単純化が進んでおり、全体としては、土器製作技術の手抜き傾向が顕著に認められる。

「茅山下層式」は、青葉山遺跡出土土器と比較した場合、文様帯幅の縮小、区画内充填手法の喪失、縄文の採用など、全体的に新しい要素が認められる。青葉山遺跡出土土器は、文様帯の幅、施文具、意匠等、文様表現全般にわたって、「茅山下層式」よりも「鵜ケ島台式」との類似性が強い。ここでに先に指摘した「鵜ケ島台式」との共通のうち、微隆起線および区画内充填文としての沈線文の有無の問題について検討してみたい。

前述のとおり、青葉山遺跡出土土器と「鵜ケ島台式」の文様は、微隆起線や、円形竹管文、区画内を埋める沈線文の有無という点を除けば、意匠の基本的な構成の上では共通する部分が大きい。「鵜ケ島台式」にみられる微隆起線は、「野島式」から受け継がれた表現技法であり、「鵜ケ島台式」の変遷を捉える上で重要な要素の一つと考えられる。即ち、「野島式」においては、文様表現上、微隆起線が多用されており、単に区画に使われるのみならず、区画内を埋める充填文としても重要な役割を果たしていた。一方「鵜ケ島台式」では、微隆起線は意匠の区画にのみ用いられ、区画内の充填には沈線や刺突が用いられている。刺突は、「鵜ケ島台式」から「茅山下層式」へと受け継がれていく要素である。「鵜ケ島台式」の細分に関しては、これまでに多くの研究者によって検討がなされているが、未だ統一的な見解に到っているとはいいがたい状況にある。筆者は、区画文自体の表現手法や区画内の充填手法が「鵜ケ島台式」の変遷を把握する上で重要な要素の一つであると考える。すなわち、「鵜ケ島台式」の文様は、区画文の表現は微隆起線主体から沈線文主体へと、区画内の充填文は沈線から連続刺突文（押し引き）、そして不連続な刺突へと、変化すると考えられる。そのような理解の上に立つとき、微隆起線を欠き、区

画内の充填手法が連続刺突列に限定される青葉山遺跡出土土器は、編年上、「鵜ケ島台式」のなかでも新しい部分に併行すると考えることが可能である。青葉山遺跡出土土器のなかに、沈線による区画文を持たず、連続刺突で直接幾何学的文様を表現する土器が一定量含まれている点からも、上記の推定が正しいことが立証される。

③　「青葉山E式」の提唱―東北地方出土早期貝殻条痕文土器の地域性と編年―

これまでの検討で、青葉山遺跡出土土器は、関東地方の「鵜ケ島台式」のなかでも比較的新しい段階に併行することが明らかとなった。ここで改めて、東北地方における貝殻条痕文土器の変遷をたどり、地域性の問題を検討したい。

東北地方中部仙台湾周辺

【「槻木1式」】(図55)

1928年の春に山内清男によって行われた、槻木（松崎）貝塚の第2回発掘調査で、貝層以下黒土層から出土した土器のうち、貝殻沈線文土器を除いた資料を標式とする。「直線と角をなして走る細隆起線」（山内1929b）が特徴的な文様であることは広く知られるところである。呈示された資料が少ないうえ全て細片のため、意匠構成をはじめ型式内容に不明な点が多い。標式資料はすべて文様が微隆起線で表現されている点が注目されるが、微隆起線で描かれた文様の土器のみで構成されていたかは大きな問題である。関東地方の「野島式」に併行すると考えられるが、「野島式」の中に含められるか否かについては、現状では判断できない。ただし、茅山貝塚貝層下の土層（十層）から出土した「野島式」は全て、「細隆起線によって描かれた区画のなかを集合沈線をもってみたすという文様手法に特色づけられて」いるとされ（赤星・岡本前掲）、「槻木1式」が、時間的な幅をもつ「野島式」のなかのある段階そのものである可能性も残されている。今後、良好な一括資料が得られた段階で、再検討が必要である。

【仮称「上ノ原山段階」】(図56)

仙台湾周辺にも円形竹管文をもつ「鵜ケ島台式」そのものと考えられる資料が存在する。円形竹管文は必ず微隆起線による区画線の交点に配されている点が注目される（図56―1、11、13、18、19）。先の検討から、「鵜ケ島台式」のなかでも比較的古い要素を持った土器群と考えられる。槻木（松崎）貝塚では、「槻木1式」より上の貝層から、多数の縄文条痕土器（「槻木2」）に混じって出土している。このような特徴をもつ資料は、山形県三カノ源遺跡（加藤稔編1982）や同市土生田遺跡（柏倉亮吉・加藤稔編1969）からも出土しており、「鵜ケ島台式」の古い段階の土器は、東北地方中部の広い範囲に分布していた可能性が高い。

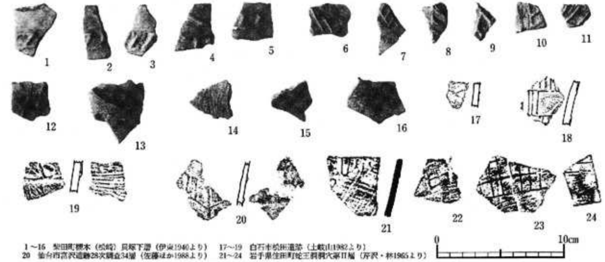
【「青葉山E式」】(図57)

青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器を基準資料とする。具体的な型式内容については先に述べたとおりである。関東地方の「鵜ケ島台式」の新しい部分に併行するが、それとは型式内容に違いが認められることから、新たに「青葉山E式」を設定した。「鵜ケ島台式」と最も異なる点は、「鵜ケ島台式」のメルクマールの一つとされる円形竹管文の欠如である。円形竹管文は「野島式」と「鵜ケ島台式」とを分ける指標とされ、「鵜ケ島台式」に盛行し、「茅山下層式」に引き継がれる重要な要素である。「青葉山E式」が、器形、胎土、調整、口縁部の端面形状、口縁部の装飾、文様帯の位置、区画文の形態など、基本的には「鵜ケ島台式」と同じ土器作り技術体系を持ちながらも、文様において独自性を示している点は注目される。「青葉山E式」の分布は、いまだ十分に把握できていないが、岩出山町天神山遺跡（小徳晶1982）、素山貝塚（伊東前掲）、蔵王開拓A遺跡（片倉信光ほか1976）など、仙台湾周辺の遺跡で出土している。

【仮称「川添東段階」】(図58)

川添東遺跡SI2・4出土土器や、吉田浜貝塚II層出土の第2類土器が比較的良好な資料である。

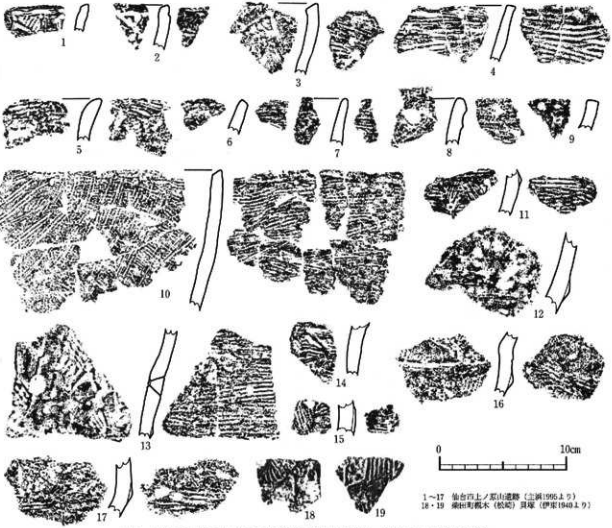
時期的には「茅山下層式」に併行するが、型式内容には違いも多く認められる。器形は、体部に2段ないし1段の屈曲を有するものとともに、屈曲を持たない土器が比較的多く認められる。屈曲のある土器でも、屈曲の度



1～16　柴田町槻木（松崎）貝塚下層（伊東1940より）　17～19　白石市松田遺跡（土岐山1982より）
20　仙台市富沢遺跡28次調査34層（佐藤ほか1988より）　21～24　岩手県住田町蛇王洞洞穴第II層（芹沢・林1965より）

図55　仙台湾周辺における早期後葉の縄文土器(1)　「槻木１式」

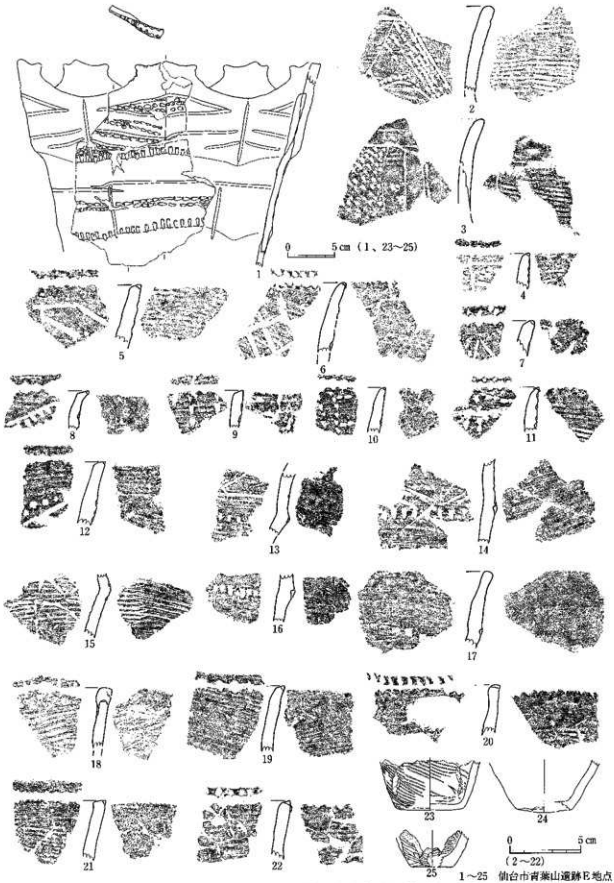
Fig.55 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period around Sendai Bay(1)



1～17　仙台市上ノ原山遺跡（主浜1995より）
18・19　柴田町槻木（松崎）貝塚（伊東1940より）

図56　仙台湾周辺における早期後葉の縄文土器(2)　仮称「上ノ原山段階」

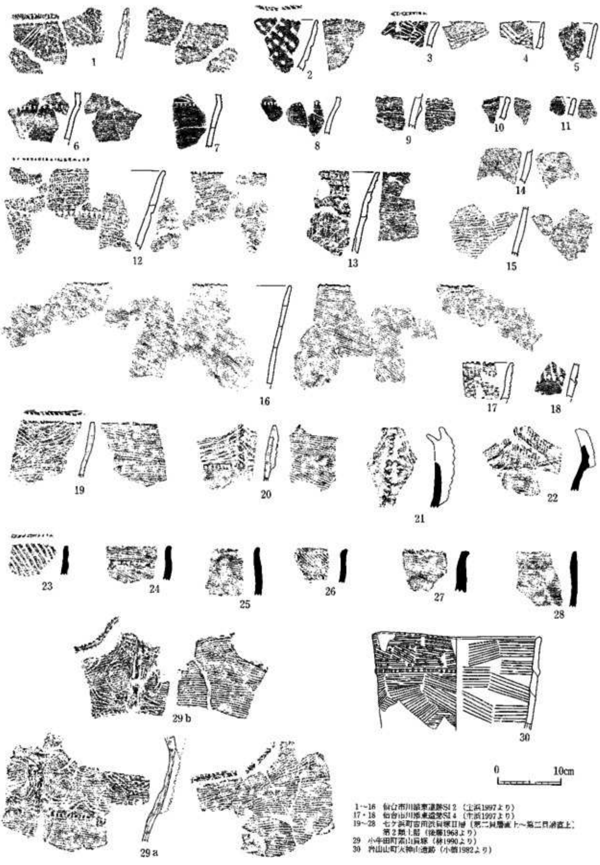
Fig.56 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period around Sendai Bay(2)



1~25 仙台市青葉山遺跡E地点

図57 仙台湾周辺における早期後葉の縄文土器(3) 「青葉山E式」

Fig.57 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period around Sendai Bay(3)



1～16　仙台市川添東遺跡SI 2（主浜1997より）
17・18　仙台市川添東遺跡SI 4（主浜1997より）
19～28　七ヶ浜町吉田浜貝塚II層（第二貝層直下～第三貝層直上）第2類土器（後藤1968より）
29　小牛田町素山貝塚（林1990より）
30　岩出山町大神山遺跡（小舘1982より）

図58　仙台湾周辺における早期後葉の縄文土器(4)　仮称「川添東段階」

Fig.58 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period around Sendai Bay(4)

合いは「青葉山E式」に比べ弱まる傾向にある。「青葉山E式」では眉曲部が文様帯の境界をなしていたが、本段階に属する土器のなかには、眉曲が細い粘土帯の貼り付けに置き換わる例が認められる（図58—30）。また、「青葉山E式」では、口縁部に縦方向の屈曲を持ち、口縁が多角形を呈する土器が存在したが、本段階では、縦方向の屈曲もまた、細い粘土帯の貼付に置き換わっている（図58—1、20、21、29）。口縁部の装飾は、基本的に「青葉山E式」を踏襲するが、「茅山下層式」に見られるような中空の把手が新たに出現する（図58—21）。文様帯は口縁部と体部のくびれ部に認められるが、口縁部だけのものが多くなる上、口縁部文様帯自体も狭まる傾向にある。「青葉山E式」同様、貝殻条痕のみで文様を持たない粗製土器が一定量存在する（図58—16、25、27、28）。文様は、細い沈線や連続刺突列で表現されるが、基本的に区画文は失われる。意匠構成は十分に把握できていないが、「青葉山E式」に見られない曲線的な文様が出現する点では、「茅山下層式」に共通する。

東北地方南部阿武隈川中・上流域

【「野島式」併行期】（図59）

この時期の資料は、各地の遺跡で出土しているが、良好な一括資料は見あたらない。器形は、底部が尖る砲弾形を呈する。文様帯は口縁部に1段のみ形成される。文様が微隆起線のみで表現される土器と、微隆起線と沈線を併用して文様を描く土器がある。先に述べたように「槻木1式」の問題は残るが、大きくは「野島式」（赤星1948）の範疇で捉えることができよう。今後、資料の増加により、より細かな細分が可能と考えられる。

【「鵜ケ島台式」新段階】（図60）

阿武隈川中・上流域では、「鵜ケ島台式」の古い段階に属するような資料は極めて少ないため、ここで詳細を述べることはできない。一方、新段階に対比できる土器は、良好な資料が、泉川遺跡、前原B遺跡等に存在している。

器形は、体部に2段ないし1段の屈曲を有し、底部は平底を呈する。また、上方から見たとき、口縁部が多角形を呈する土器も存在する（図60—44）。口縁部の端面は内傾ぎのものが多く、口唇部の内外両側に細かな刻みを加えた特徴的な小波状口縁が認められる（図60—10、21、36、39）。小波状口縁以外には、口縁部が平坦なものや、突起を有するものなどが認められる。文様を持つ土器と持たない土器とが存在し、前者は半数以下である。有文土器では、口縁部や体部の上半、体部のくびれ部に文様が施される。文様は、沈線による幾何学的な区画内を刺突で充填したものが多く、区画沈線の要所要所に円形竹管が押捺される。微隆起線もごく少量認められるが、区画文に用いられることはない（図60—36）。「青葉山E式」に見られたような沈線による斜格子目文も存在するが、交点には必ず円形竹管文を伴っている点で異なる（図60 -30、34）。体部の屈曲部には、斜め下方から施された刺突が横一列に並ぶものが多い。

その型式内容は、まさに「鵜ケ島台式」の新しい段階そのものといってよく、「青葉山E式」とは異なる。

【仮称「中ノ沢A段階」】

本間宏氏が設定した「龍門寺・中ノ沢A段階」（本間前掲）にほぼ相当するが、後述するように龍門寺遺跡の資料は、「茅山下層式」そのものであり、中ノ沢A遺跡の資料とは時期的に併行関係にあるものの、質的に異なるため含めていない。本段階の型式内容については本間氏の論考に詳しいためここでは省略し、主に「茅山下層式」との異同を検討する。ともに、2段ないし1段の屈曲を有し、底が平底になるなど、器形に関しては、両者は類似する。文様帯の配置や幅に関しても、とくに大きな違いは認められないが、文様は大きく異なる。すなわち、文様描出技法の点では、「茅山下層式」に多い指頭を用いたような幅広の凹線が見られず、意所の点では、「茅山下層式」程には曲線が用いられない。中ノ沢遺跡や鍛冶久保遺跡には、口縁部の幅の狭い文様帯に、半截竹管を用いて縦方向あるいは斜め方向の集合沈線文を施した土器が存在する（図61　1、9、11）。いわき市龍門寺遺跡の資料には、指頭によると考えられる幅広の凹線で渦文を描いた土器（報告書の第53図2の土器）が存在する。地理的により関東地方に近いいわき周辺は、石岡市地蔵久保三村貝塚出土土器（慶應義塾高等学校考古学会1956）

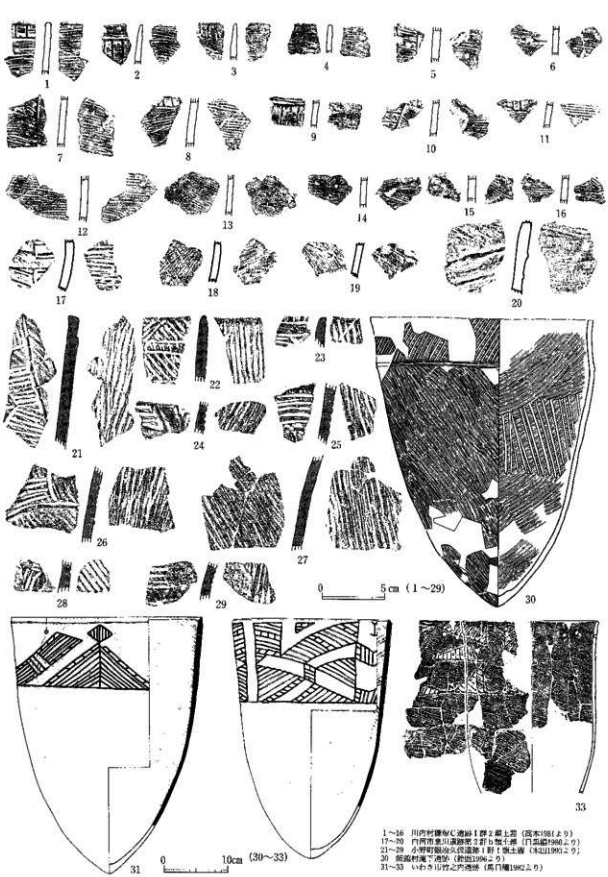
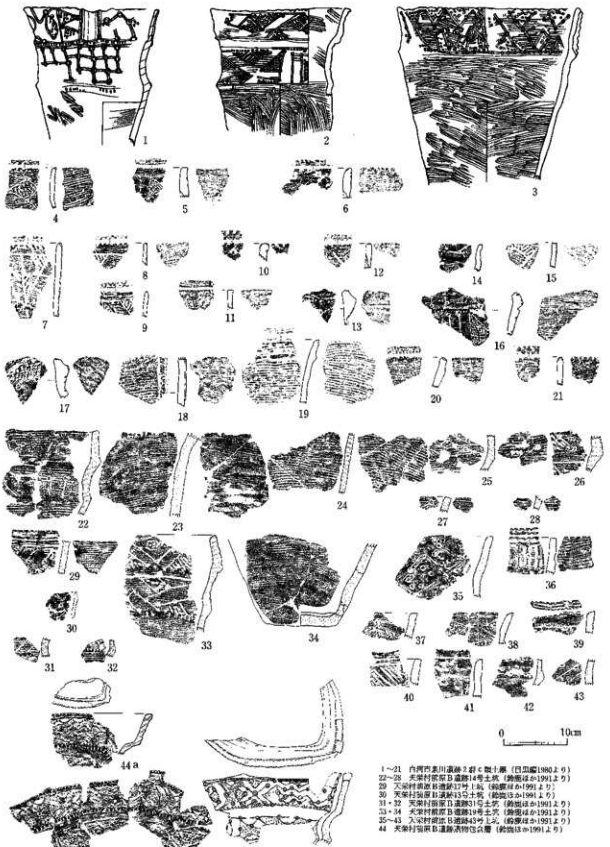


図59 阿武隈川中・上流域における早期後葉の縄文土器(1) 「野島式」併行

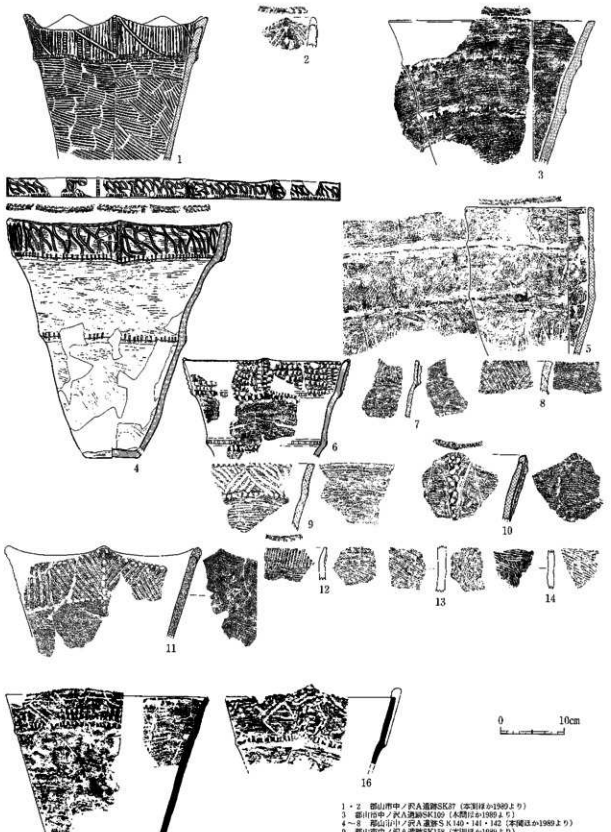
Fig.59 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period at the reaches of the Abukuma River(1)



1～21 白河市表川遺跡J群c敷土層（白河編1980より）
22～26 天栄村栗原B遺跡14号土坑（発掘ほか1991より）
29 天栄村栗原B遺跡17号土坑（発掘ほか1991より）
30 天栄村羽原B遺跡135土坑（発掘ほか1991より）
31～32 天栄村栗原B遺跡31号土坑（発掘ほか1991より）
33～34 天栄村栗原B遺跡19号土坑（発掘ほか1991より）
35～43 天栄村栗原B遺跡43号上坑（発掘ほか1991より）
44 天栄村羽原B遺跡表採包含層（発掘ほか1991より）

図60　阿武隈川中・上流域における早期後葉の縄文土器(2)　「鵜ケ島台式」新段階併行

Fig.60 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period at the reaches of the Abukuma River(2)



1・2　都山市中ノ沢A遺跡SK87（本調ほか1989より）
3　都山市中ノ沢A遺跡SK109（本調ほか1989より）
4～8　都山市中ノ沢A遺跡SK140・141・142（本調ほか1989より）
9　都山市中ノ沢A遺跡SK158（本調ほか1989より）
10　都山市中ノ沢A遺跡SK167（本調ほか1989より）
11～14　小野町鍛冶久保遺跡SK02（水田1993より）
15・16　郡山市古糸田遺跡（笹原1966より）

図61　阿武隈川中・上流域における早期後葉の縄文土器(3)　「中ノ沢A段階」（「茅山下層式」併行）

Fig.61 Pottery belonging to the late stage of the Initial Jomon period at the reaches of the Abukuma River(3)

表10　縄文時代早期後葉貝殻条痕文土器の編年表

Tab.10 **Chronological** sequence of pottery with incised lines by shell-edge belonging to late stage of the Initial Jomon period

東北中部（仙台湾周辺）	東北南部（阿武隈川中・上流域他）	関東地方
「槻木1式」 基準資料：昭和3年春の槻木（町）貝塚第2回発掘調査貝層下黒土層出土資料（伊東1940の第11図）のうち、貝殻沈線文土器を除いた資料	**「野島式」** ・小野町銀冶久保遺跡1－1類（本田1993） ・川内村猿塚C遺跡I群2類（斎木1981） ・棚倉町日向前A地点第2群（井上1977） ・飯舘村滝下遺跡（鈴琉1996） ・会津高山町能島遺跡I群2類（本間1991）	**「野島式」**
「鵜ケ島台式」古段階 基準資料：仙台市太白区上ノ原山遺跡（主浜1995）出土の貝殻条痕文土器 ・岩出山町天神山遺跡II群4類の一部（小笹1982） ・昭和2年10月の槻木（町）貝塚第1回発掘調査出土資料の一部（山内1929aの写真資料の7の土器）	**「鵜ケ島台式」古段階** ・天栄村竹柄遺跡出土土器の一部（石本1991）	**「鵜ケ島台式」古段階**
「青葉山E式」 基準資料：仙台市青葉区青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器 ・岩出山町天神山遺跡II群4類の一部（小笹1982） ・栗山貝塚B地点（伊東1940）の図版23の1，2の土器	**「鵜ケ島台式」新段階** 基準資料：天栄村広原B遺跡14，19，43号土坑出土土器（鈴琉ほか1991） ・白河市泉川遺跡第2群c類（目黒編1980） ・天栄村竹柄遺跡出土土器の一部（石本1991）	**「鵜ケ島台式」新段階**
仮称「川添東段階」 基準資料：仙台市太白区川添東遺跡（主浜1997）S I 2・4出土土器 ・七ケ浜町吉田浜貝塚II層（第二貝層直上～第三貝層直上）出土第2類土器（後藤1968） ・栗山貝塚A地点上層出土土器の一部（伊東1940）	**仮称「中ノ沢A段階」** 基準資料：郡山市中ノ沢A遺跡S K87，10，9，140～142他出土土器（本間ほか1989），小野町銀冶久保遺跡S I 02出土土器（本田1993） ・郡山市古亀田遺跡出土の貝殻条痕文土器（日黒1966）	**「茅山下層式」**

に代表される、霞ケ浦周辺にみられるような「茅山下層式」そのものの分布圏内であった可能性が高い。

④ むすび

「鵜ケ島台式」ならびに「茅山下層式」に相当する貝殻条痕文土器は、北は東北地方中部の仙台平野や村山盆地から、南は中国地方にまで広い分布圏を有し、伊豆の御蔵島のような地域にも進出するほどの浸透力を持っていたといわれる。関東地方では、この時期に遺跡数が急増することから、人口の増加ならびにそれを支えるだけの生産力の発展を想定し、土器の分布圏の拡大とあわせて、社会、文化の上昇期と評価される場合もある。

一方、貝殻条痕文土器の衰退とともに、早期末葉には各地で強い地域色を持った土器群が成立し、以後、東北地方と関東地方の土器はそれぞれ別の道筋を歩むことになる。

今回は、青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器を中心に、東北地方の貝殻条痕文土器を取り上げ、関東地方の土器との比較を通じて、その型式変遷の概略を論じた。

青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器は、「鵜ケ島台式」の新しい段階に併行し、それと共通の土器製作技術体系をもちながらも、文様の点で明らかに独自性を有していたことが判り、「青葉山E式」を設定した。「青葉山E式」の分布圏については確定できていないが、仙台湾の周辺地域ではいくつかの遺跡でその存在を確認できる。「青葉山E式」に先行する段階には、仙台湾周辺を含めて東北中部以南には、古手の「鵜ケ島台式」そのものが分布している。一方、「青葉山E式」に後続する時期には、地域性が拡大し、東北南部の阿武隈川中・上流域にも「茅山下層式」とは異なる内容の土器群が成立する。

「青葉山E式」は、まさに貝殻条痕文土器のなかの地域性が顕在化しはじめた段階にあたり、やがて東北地方の南半部に地域色豊かな縄文条痕土器が成立する下地となった土器群であると理解できよう。

(2) 青葉山遺跡E地点第3次調査出土資料からみた縄文時代早期後葉の石器群について

① 石器組成

今回の調査で出土した剥片石器・磨製石器・礫石器117点の石器組成をみると、石鏃19点、石錐2点、石匙8点、石篦14点、不定形石器1類26点、2類11点、3類2点、4類13点、5類1点、6類2点、7類6点、器種不明の破損した剥片石器10点、磨製石斧1点、凹石1点、磨石と敲石に使用されたもの1点である。最も数が多いのは、不定形石器1類と分類した、剥片の縁辺に連続する剥離で刃部を作り出した石器（22.2%）である。次いで石鏃（16.2%）、石篦（11.9%）、不定形石器4類と分類したもの（11.1%）などが多くみられる。

剥片の縁辺に連続する剥離で刃部を作り出した不定形石器1類と、同様に作り出された石篦状の刃部を持つ不定形石器2類を加えると37点になり、剥片石器全体の31.6%をしめる。これらの器種は、製作と廃棄の頻度が高かった石器であると考えられる。

次に、縄文時代早期に属する周辺遺跡出土の石器群と比較してみる（図62）。比較対象としたのは、早期前葉の下ノ内浦遺跡3次調査（渡部紀1988）、早期後葉の上ノ原山遺跡（主浜光朗1995）、早期末葉の富沢遺跡15次調査（斎野裕彦ほか1987）、早期後葉の富沢遺跡28次調査（佐藤甲二・横山裕平1988）、早期後葉の川添東遺跡（主浜光朗ほか1997）、早期後葉の天神山遺跡（小檜山1982）、早期末葉の北前遺跡1次調査（佐藤洋・斎野裕彦編1982）出土の石器群である。

下ノ内浦遺跡、富沢遺跡、青葉山遺跡E地点第3次調査、北前遺跡は、不定形石器が5割以上で主体をしめ、礫石器が2割以下と少ないという共通点をもつ。定形石器の多い上ノ原山遺跡や礫石器の多い川添東遺跡は、これらと異なるグループであるといえる。特に距離の離れた岩出山町天神山遺跡では石篦と礫石器が非常に多いなど、全く異なる石器組成を示している。

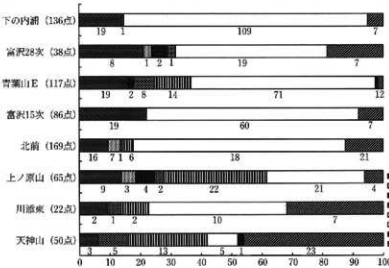


図62 周辺遺跡出土石器組成（縄文時代早期）

Fig.62 Stone tool assemblage of sites belonging to the Initial Jomon period around AOE3

このことは、縄文時代早期における石器組成の地域性を示していると理解される。青葉山遺跡E地点第3次調査は、不定形石器が多く礫石器が少ない富沢遺跡などのグループに属するが、その中でも特に礫石器が少ない遺跡である。しかし、他の地域の縄文時代早期石器群、例えば福島県竹之内遺跡（馬目順一編1982）では、石鏃（52.0%）に次いで礫石器（23.3%）が多く出土している。また、関東地方の縄文時代早期後半には、礫石器、特に磨石が多くみられることが指摘されている（小薬一夫1982）。よって広い視野でみると、当期において礫石器が少ないことは、強い地域性を示していると考えられる。

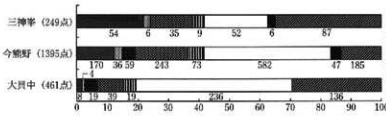


図63 周辺遺跡出土石器組成（縄文時代前期）

Fig.63 Stone tool assemblage of sites belonging to the Early Jomon period around AOE3

さらに後続する縄文時代前期前葉の石器群との比較を行った（図63）。対象としたのは、三神峯遺跡（白鳥良一1974）、大貝中遺跡（主浜光朗ほか1997）、今熊野遺跡（小川出1986）である。

縄文時代早期において地域的に出土量の差がみられた隆石器は、前期前葉になると、どの地域でも安定して含まれる傾向があるといえる。また、定形石器の中では石匙の割合が増加し、早期において主体となることが多かった石篦は減少している。

② 石鏃

青葉山遺跡E地点第3次調査出土の石鏃は、長さ約15～30mm、幅約10～20mmに分布し、長さ：幅の比は1.5：1に近いものが多い。これを、他遺跡出土の石鏃と比較してみる（図64）。対象としたのは、下ノ内浦遺跡、富沢遺跡（15次調査）出土の石鏃である。下ノ内浦遺跡出土の石鏃は、この分布域の右上、つまり大型の範囲に分布し、富沢遺跡出土の石鏃は逆に小型の範囲に分布している。このことから、青葉山遺跡E地点第3次調査の石鏃は、より多様な大きさの石鏃を製作・使用していたといえる。

それらの石鏃は、用いられた石材により大きさが異なることが指摘できる（図65）。頁岩の石鏃は大型、石英安山岩の石鏃は小型で、凝灰岩はその中間である。これを富沢遺跡第15次調査の石鏃と比較してみると（図66）、富沢遺跡の石鏃には、石材による大きさの違いはみられない。

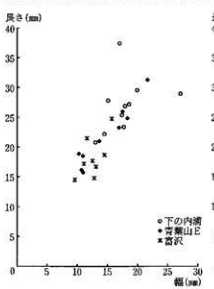


図64 周辺遺跡出土石鏃長幅分布
Fig.64 Scatter diagram of length and width of arrowheads from sites around AOE3

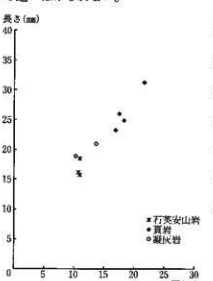


図65 青葉山遺跡E地点第3次調査出土石鏃長幅分布
Fig.65 Scatter diagram of length and width of arrowheads from AOE3

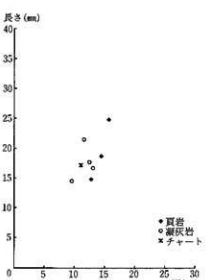


図66 富沢遺跡第15次調査出土石鏃長幅分布
Fig.66 Scatter diagram of length and width of arrowheads from location 15 of Tomizawa site

③ 擦切石斧

遺物包含層から擦切石斧が出土している。この擦切石斧は縄文時代早期中葉に出現し、北海道、東北を中心に分布すると指摘されている（鈴木道之介1981、早川正一1983）。今回は東北地方の擦切石斧をできる限り集成し、その分布や時期、形態、石材などについて考えてみたい。

擦切石斧出土遺跡は東北地方に広く分布するが、青森県、山形県に比較的多くみられる（図67、表11）。秋田県は、出土遺跡数は少ないが、秋田県上ノ山II遺跡（地図No.34）から147点もの報告があったことは注目される。青葉山遺跡E地点第3次調査の所在する宮城県でも6遺跡からの出土が報告されている。福島県であまり出土例がないことから、青葉山遺跡E地点第3次調査の擦切石斧は分布域の南端近くに位置すると考えられる。

擦切石斧の最も古いものは、青森県館平遺跡（地図No.18）、宮城県大穴遺跡（地図No.36）出土のもので早期前半に属している。また前期にも多くの出土例がみられる。先述した秋田県上ノ山II遺跡（地図No.34）は前期後半（大木4～5a式期）を主体としている。その後前期末葉から中期にかけての遺跡からも数点出土しており、宮城県

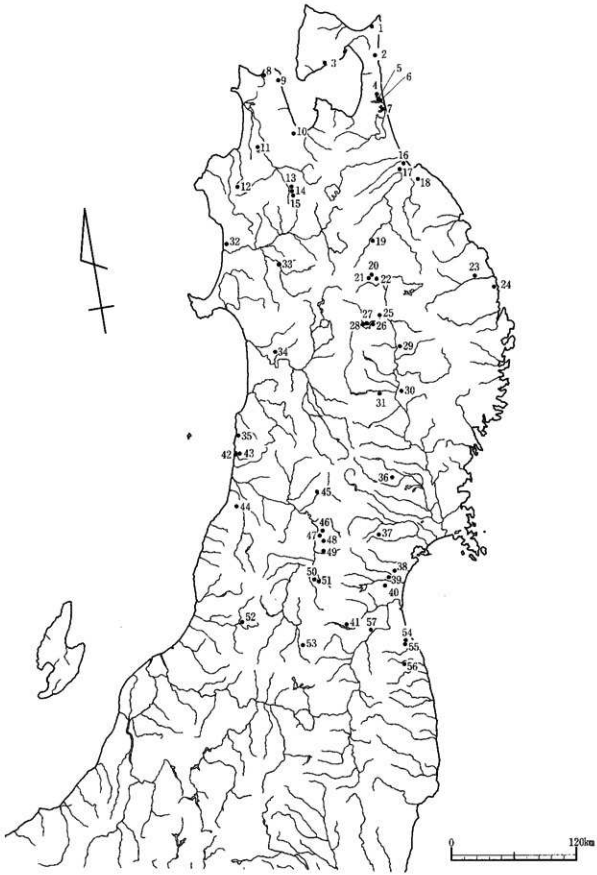


図67　擦切石斧出土遺跡分布図

Fig.67 Distribution of sites where polished stone axes made by abrasion cutting were found

表11　擦切石斧出土遺跡地名表

Tab.11 List of sites where polished stone axes made by abrasion cutting were found

No.	遺跡名	所在地	時期	点数	石材	文献No.
1	ムシリ	青森県下北郡東通村大字尻屋字ムシリ	不明	1	不明	30
2	下田代納屋	青森県下北郡東通村猿ヶ森下田代	貝殻沈線文	1	不明	8
3	忍沢	青森県下北郡川内町家ノ上	前期	1	不明	30
4	大石平Ⅱ	青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字野附	白浜以降	6	緑色凝灰岩(5)、輝緑凝灰岩(1)	38
5	発茶沢	青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢2-32	前期前葉？	2	緑色頁岩	29
6	表館(1)	青森県上北郡六ヶ所村鷹架字発茶沢2-44	白浜～赤御堂主体	2	緑色ホルンフェルス(1)、粘板岩(1)	46、47
7	新納屋	青森県上北郡六ヶ所村鷹架道の下	貝殻沈線文	1	不明	28
8	山崎	青森県東津軽郡今別町山崎字山本105、字山崎74-35	円筒下層c～d1、大木10	2	硬砂岩(1)	27
9	尻高(4)	青森県東津軽郡平舘村大字今津字尻高	円筒下層bなど前期	1	不明	37
10	熊沢	青森県青森市大字岩渡字熊沢230-488ほか	前期主体	6	不明	10
11	石神	青森県西津軽郡森田村大字床舞字石神	円筒下層d2	1	硬砂岩	4
12	芝沢	青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字湯舟字若山190-1、字七尾185ほか	貝殻条痕文以降(円筒下層a、d1主体)	4	緑色ホルンフェルス	48
13	大平	青森県南津軽郡大鰐町大字長峰	円筒下層b主体	3	輝緑凝灰岩	16
14	砂沢平	青森県南津軽郡大鰐町大字長峰字砂沢平126	貝殻沈線文～前期初頭	6	頁岩	15
15	永野	青森県南津軽郡碇ヶ関村大字碇ヶ関字永野8ほか	前期中心？	13	輝緑凝灰岩・角閃ヒン岩	14
16	長七谷地7号	青森県八戸市大字市川町字長七谷地地内	物見台～赤御堂	2	輝緑凝灰岩	32
17	売場	青森県八戸市大字河原木字見立山	日計～長七谷地Ⅲ	4	緑色頁岩(3)、輝緑凝灰岩(1)	17、18
18	館平	青森県八戸市荒井山字館平	白浜（早期中葉）	1	不明	30
19	五庵Ⅰ	岩手県二戸郡浄法寺町大字駒ヶ嶺五庵2ほか	物見台以降	1	不明	39
20	長者屋敷	岩手県岩手郡松尾村大字松尾第5地割大花森54	円筒下層b以降	2	不明	35
21	野駄	岩手県岩手郡松尾村大字野駄第2地割字前森392	前期～中期	1	凝灰岩	22
22	川館Ⅰ	岩手県岩手郡西根町荒木田第3地割28ほか	前期末葉～中期中葉	6	輝石安山岩(2)、緑色細粒凝灰岩(2)	51
23	新洞	岩手県岩泉町龍泉洞	不明	1	不明	49
24	小堀内Ⅰ	岩手県下閉伊郡田老町乙部第14地割字小堀内	早期後葉～前期初頭	1	不明	34
25	大館	岩手県盛岡市大館町	不明	1	不明	12
26	繋Ⅲ	岩手県盛岡市繋字湯水端	中期末葉	1	不明	21
27	元御所Ⅰ	岩手県岩手郡雫石町元御所	前期～中期	4	不明	31
28	下長谷地	岩手県岩手郡雫石町大字西安庭第15地割字下長谷地41-1	早期～中期	1	玻璃質流紋岩	31
29	西田	岩手県紫波郡紫波町大明字西田	前期末葉～中期初頭	1	淡緑色細粒凝灰岩	20
30	横町	岩手県北上市立花第1地割内	前期末葉～後期初頭	1	緑色細粒凝灰岩	54
31	本郷	岩手県北上市和賀町煤孫第2地割内159-3	大木7b～8a	1	粘板岩	52
32	柳洗場	秋田県能代市坂形字柳洗場36ほか	前期	2	緑色凝灰岩	24
33	坂岱	秋田県北秋田郡森吉町大字米内沢字坂岱	前期	1	不明	9
34	上ノ山Ⅱ	秋田県仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山1ほか	大木4～5a	147	緑色凝灰岩主体	45
35	タフキ	秋田県由利郡象潟町大砂川字タフキ27番地ほか	大木5～6	1	緑色凝灰岩	50
36	大穴	宮城県栗原郡花山村草木沢大穴山	早期前半	1	不明	2
37	上深沢	宮城県黒川郡大衡村駒場字上深沢	大木9	1	凝灰岩	11
38	青葉山E	宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉	早期後葉	1	凝灰岩	
39	三神峯	宮城県仙台市太白区富沢字金山	前期初頭	4	ヒン岩(2)、輝緑岩(1)	6、19
40	今熊野	宮城県名取市高舘川上字宮台、北台	前期前葉	1	不明	40
41	小梁川	宮城県刈田郡七ヶ宿町小梁川	前期前葉～中期中葉	1	凝灰質頁岩	43
42	宅田	山形県飽海郡八幡町野沢宅田	不明	1	不明	3
43	吹浦	山形県飽海郡遊佐町大字吹浦字堂屋、赤坂、一本木	大木6主体	6	硬玉、緑泥片岩、石英安山岩など	1、36、44
44	岡山	山形県鶴岡市大字岡山	前期～中期	2	不明	3
45	水上	山形県最上郡最上町向町字水上	中期～晩期	3	不明	23
46	土生田	山形県村山市土生田森ノ原地内	早期後葉	1	緑泥片岩	33
47	大原口	山形県村山市本飯田大原口2514-1	不明	1	不明	3
48	村山農高第二農場	山形県村山市本飯田郷堰2485	不明	1	不明	3
49	小林	山形県東根市大字東根字大森	大木1～3	2	不明	7
50	坊屋敷	山形県山形市柏倉字坊屋敷	後期～晩期	2	不明	26
51	熊ノ前	山形県山形市妙見寺熊ノ前	大木8～10	4	不明	13
52	下野	山形県西置賜郡小国町増岡下野	大木9～10	1	不明	25
53	八幡原No.3	山形県米沢市万世町桑山字椿の木	大木10a	1	不明	41
54	段ノ原B	福島県相馬市椎木字段ノ原地内	前期前葉	8	酸性凝灰岩(7)、細粒凝灰岩(1)	53
55	山田B	福島県相馬市大坪字山田地内	前期前葉	3	酸性凝灰岩(2)、泥岩(1)	55
56	羽白D	福島県相馬郡飯舘村大倉字羽白	前期初頭、中期前葉	1	蛇紋岩	42
57	中森	宮城県白石市斎川字中森	不明	1	不明	56

＜擦切石斧関連文献リスト＞

1　荘内古文化研究会　1955『吹浦遺跡』
2　興野義一　1969「宮城県大穴遺跡の早期縄文土器について」『北海道考古学』5　pp. 7-14
3　山形県史編纂委員会　1969『山形県史　資料編11』
4　江坂輝彌編　1970『石神遺跡　円筒土器文化の編年的研究』
5　山形県教育委員会　1972『岡山　山形県における原始住居跡と立石遺構』
6　白鳥良一　1974「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』平重道先生還暦記念会編　pp. 1-43
7　東根市教育委員会　1975『小林遺跡　―縄文前期遺跡と平安時代集落跡―』
8　青森県立郷土館　1976『下田代納屋Ｂ遺跡発掘調査報告書』
9　秋田県史編纂委員会　1977『秋田県史　考古編』
10　青森県教育委員会　1977『熊谷遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
11　宮城県教育委員会　1978『東北自動車道遺跡調査報告書１』宮城県文化財調査報告書第52集
12　盛岡市教育委員会　1978『盛岡市大館遺跡発掘調査報告書』
13　山形県教育委員会　1979『熊ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第16集
14　青森県教育委員会　1979『永野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
15　青森県教育委員会　1979『砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第53集
16　青森県教育委員会　1979『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
17　青森県教育委員会　1979『売場遺跡発掘調査報告書（第１次調査、第２次調査）』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
18　青森県教育委員会　1979『売場遺跡発掘調査報告書（第３次調査、第４次調査）・大タルミ遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
19　仙台市教育委員会　1980『三神峯遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第25集
20　岩手県教育委員会　1980『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VII（西田遺跡）』岩手県文化財調査報告書第51集
21　岩手県埋蔵文化財センター　1980『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市 つなぎIII・つなぎIV・上野・南の又・堂ケ沢Ｉ・II遺跡　雫石町　広瀬II遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集
22　岩手県埋蔵文化財センター　1980『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村 野駄遺跡・寄木遺跡 西根町 崩石遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集
23　山形県教育委員会　1980『水上遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第27集
24　秋田県教育委員会　1980『中田面遺跡・東兵衛台Ｉ遺跡・東兵衛台II遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第74集
25　山形県教育委員会　1981『下野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第38集
26　山形県教育委員会　1981『山形市柏倉地区遺跡群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第33集
27　青森県教育委員会　1981『山崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
28　青森県教育委員会　1981『新納屋遺跡(2)発掘調査報告書』
29　青森県教育委員会　1981『発茶沢』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
30　鈴木道之助　1981『図録　石器の基礎知識III』柏書房
31　岩手県教育委員会　1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 雫石町 下長谷地・元御所Ｉ・II遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第28集
32　青森県教育委員会　1982『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地２・７・８号遺跡（昭和55・56年度）』八戸市埋蔵文化財調査報告書第８集
33　加藤稔編　1982『村山市史　別巻１　原始・古代編』
34　岩手県埋蔵文化財センター　1983『小堀内Ｉ遺跡発掘調査報告書 田老大規模年金保養基地関連遺跡発掘調査』岩手県埋文センター文化財調査報告書第52集
35　岩手県埋蔵文化財センター　1984『長者屋敷遺跡発掘調査報告書(III)』岩手県埋文センター文化財調査報告書第77集
36　山形県教育委員会　1984『吹浦遺跡 第１次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第82集
37　青森県教育委員会　1984『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
38　青森県教育委員会　1985『大石平遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
39　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986『五庵１遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集
40　宮城県教育委員会　1986『今熊野遺跡II 縄文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集
41　米沢市教育委員会　1986『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 第III集 大清水遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集
42　福島県教育委員会　1987『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書Ｘ　岩下向Ａ遺跡・羽白Ｄ遺跡（第１次）・羽白Ｅ遺跡』福島県文化財調査報告書第183集
43　宮城県教育委員会　1988『七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書IV 大梁川遺跡・小梁川遺跡（石器編）』宮城県文化財調査報告書第126集
44　山形県教育委員会　1988『吹浦遺跡 第３・４次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集
45　秋田県教育委員会　1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II　―上ノ山Ｉ遺跡・館野遺跡・上ノ山II遺跡　』下 秋田県文化財調査報告書第166集
46　青森県教育委員会　1989『表館(1)遺跡IV・発茶沢(1)遺跡Ｖ』青森県埋蔵文化財調査報告書第126集
47　青森県教育委員会　1989『表館(1)遺跡Ｖ』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集
48　青森県教育委員会　1989『杢沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
49　三陸町史編纂委員会　1990『三陸町史』
50　秋田県教育委員会　1990『大砂川地区農免農道西部事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ―ヲフキ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第199集
51　岩手県文化振興事業団　1991『間館Ｉ遺跡発掘調査報告書 土地改良総合整備事業寺山西部地区関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第156集
52　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1992『本郷遺跡発掘調査報告書　東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集
53　福島県教育委員会　1995『相馬開発関連遺跡調査報告書III』福島県文化財調査報告書第312集
54　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996『横町遺跡発掘調査報告書　交通安全施設西部事業立花地区関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第236集
55　福島県教育委員会　1997『相馬開発関連遺跡調査報告Ｖ』福島県文化財調査報告書第333集

小梨川遺跡（地図No.41）の中期後葉主体の住居からも出土がみられる。これらのことから青葉山遺跡E地点第3次調査の擦切石斧は比較的早い時期に属するものと考えられる。

石材をみると（図68）、凝灰岩系の比較的軟質と考えられる石材が最も多く用いられており（58.0%）、青葉山遺跡E地点第3次調査出土の擦切石斧と共通する。特に先にあげた秋田県上ノ山遺跡でも147点のほとんどが緑色凝灰岩とよばれる石材を用いていると報告されている。そのほか様々な石材が用いられているが、時期または地域による偏りはみられない。

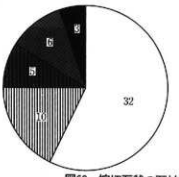


図68　擦切石斧の石材組成
Fig.68 Raw material assemblage of polished stone axes made by abrasion cutting

次に、各遺跡出土の擦切石斧を類型化し、形態の比較を試みる（図69）。1類としたのは、刃部に最大幅のある、いわゆる撥形を呈するものである。2類としたのは両側辺がほぼ平行なもので、3類はそのほかの形状のものとした。それらをさらに、横断面形によってa、b類に細分した。a類は横断面形が方形を呈するもので、b類は円形に近くなるものである。

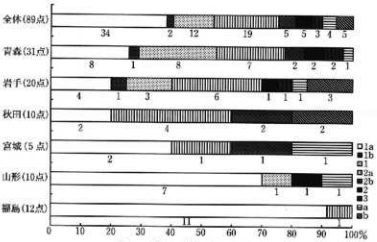


図69　擦切石斧の類型組成
Fig.69 Histograms of shapes of polished stone axes made by abrasion cutting

全体的に1類が最も多く、その中でも1a類が主体的である。これを県別にみると、宮城、山形、福島は特に1a類の割合が高い地域である。また、青森、岩手、秋田は1類を主体としながらも2a類が一定量含まれる傾向があり、東北の北部と南部で若干様相が異なる。青葉山遺跡E地点第3次調査出土の擦切石斧は基部を破損しているため全体の形状は不明だが、両側辺が平行で断面が円形に近い2b類に分類できる。東北南部では1点のみの少ない類型である。

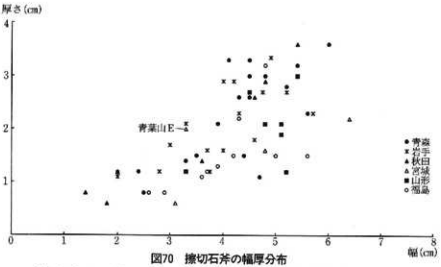


図70　擦切石斧の幅厚分布
Fig.70 Scatter diagram of width and thickness of polished stone axes made by abrasion cutting

次に大きさについて検討する。幅厚分布をみると（図70）、宮城、福島は幅に対して厚さの薄い、扁平なものが多いといえる。逆に青森は幅に対して厚めのものが多く、肩平なものは少ない。青葉山遺跡E地点第3次調査出土の擦切石斧は、幅に対して厚手であり、東北南部にはあまりみられないものである。長幅分布図をみると（図71）、全体的には、長さ4～16cm、幅2～6cmと大きさは様々

である。その中で、秋田、福島のものには地域性が現れている。秋田には、長さ7cm以上で幅2cm以下の細長い形状のものが特徴的にみられる。また、福島には長さ7cm以下と小型で、幅に対する長さの比が2以下の、刃部が大きく開くものが多い。

この大きさについて、特に特徴的な分布を示した秋田（図72）と福島（図73）の擦切石斧と、擦切痕のみられない磨製石斧との比較を行ってみた。すると、秋田の擦切石斧はやはり細長い傾向があり、福島の擦切石斧は小型で刃部の大きく開くものが多い。擦切痕を有しない磨製石斧に対して擦切手法を用いなかったとは言い切れないが、秋田や福島では、特定の条件を満たす磨製石斧を製作する際に、擦切手法を用いていた可能性がある。

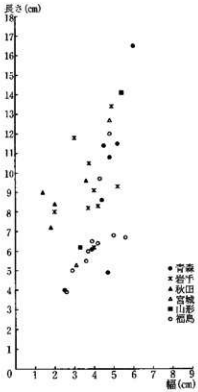


図71　擦切石斧の長幅分布
Fig.71 Scatter diagram of length and width of polished stone axes made by abrasion cutting

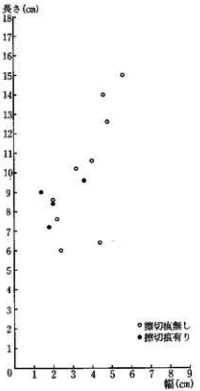


図72　磨製石斧の長幅分布（秋田県内）
Fig.72 Scatter diagram of length and width of polished stone axes from Akita Prefecture

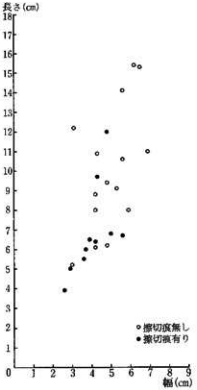


図73　磨製石斧の長幅分布（福島県内）
Fig.73 Scatter diagram of length and width of polished stone axes from Fukushima Prefecture

④　石材選択

今回出土した石器の石材は、石英安山岩、頁岩、玉髄、鉄石英、凝灰岩、泥岩、安山岩、流紋岩など多様である。最も多く出土しているのは石英安山岩で、全体の77.4%をしめる。脆いものが多く、石器の石材には適していないといえる。

石核、剥片、チップにはこの石英安山岩が圧倒的に多いが、剥片石器、リタッチドフレークには頁岩・玉髄など石英安山岩以外の石材も多用されている（図74）。頁岩は全体的に良質である。石匙は8点中7点が頁岩製、他の1点も凝灰岩製であり、石英安山岩を選択していない。石篦は14点中9点が頁岩、3点が玉髄と、石英安山岩の割合は低い。石英安山岩を用いた石篦は短冊形の1類や楕円形の4類で、石篦の主要なタイプである撥形の2類はほとんどが頁岩を用いている。また、少数ではあるが石錐2点にも石英安山岩は選択されていない。石鏃は19点中10点が頁岩・凝灰岩・玉髄製で、石英安山岩製のものは未成品を含め約半数である。石鏃には、先に述べたように石材によって大きさが異なる傾向がみられた。また、類型によっても石材選択の違いがみられる。1類とした凹基無茎鏃には頁岩・凝灰岩のみが用いられている。

このように、定形石器には石英安山岩を選択したものが少なく、定形石器43点中11点（25.5%）のみである。また、石英安山岩を選択しても、類型や大きさによって選択状況が異なる傾向がある。それに対し、不定形石器61点における石英安山岩の割合は41点（68.8%）と高い。しかし、定形石器に24点（55.8%）も用いられている頁岩は、不定形石器においては10点（16.6%）のみである。

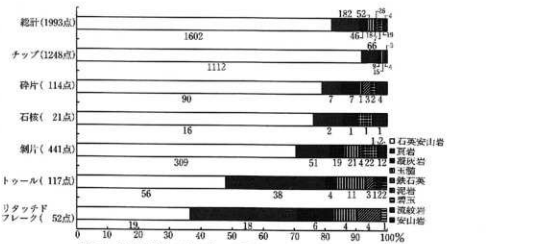


図74　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器の石材組成

Fig.74 Raw material assemblage of stone tools from AOE3

次に周辺遺跡の剥片石器の石材組成と比較してみる（図75）。出土点数の安定している下ノ内浦遺跡、上ノ原山遺跡、富沢遺跡15次調査の石材組成を比較すると、時期が下るのに従い、頁岩の利用率が下がっていく状況がみられる。上ノ原山遺跡や富沢遺跡ではその分凝灰岩が増加しているが、その多くが珪質凝灰岩と報告されており、それほど質の悪い石材ではないと推測される。

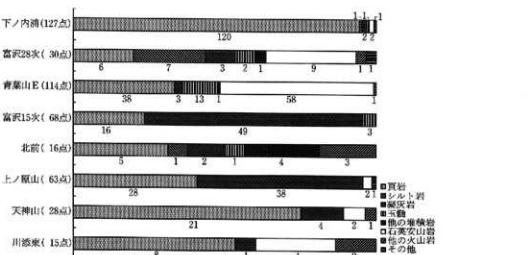


図75　周辺遺跡出土剥片石器の石材組成

Fig.75 Raw material assemblage of flake tools from sites around AOE3

青葉山遺跡E地点第3次調査のように、2種の主体となる石材に、質の差がかなりあることは特徴的である。

⑤　剥片生産と石器製作

今回の調査で出土した石核には、自然面を多く残す、原石に近い状態のものはあまり見られず、剥片にも背面が自然面に覆われたものが少ないことから、採集された原石の自然面除去は遺跡外である程度行われたと考えられる。各作業面には様々な方向からの剥離痕が観察でき、打面・作業面とも転移を繰り返していたと考えられる。また、縦長剥片あるいは横長剥片をある程度集中して剥離した痕跡を残すものや、大型剥片の周縁を剥離したものなど、様々なタイプの石核がみられる。

石核の石材には、大半を占める石英安山岩や、凝灰岩、流紋岩などがみられ、剥片石器に多くみられる頁岩の石核も1点のみ出土している。頁岩の石核は非常に小型で、徹底した剥離が行われたことを示しており、大型の石核が多い石英安山岩や流紋岩とは対照的である。

剥片の背面構成をみると、背面に腹面と同方向の剥離痕を有するものが442点中197点（44.5%）と最も多い。次いでほぼ直交する剥離痕を有するもの66点（14.9%）、同方向と直交する剥離痕を有するもの60点（13.5%）となっている。このことから、打面を転移しつつも一ケ所の打面からある程度連続した剥離が行われていた可能性

が高いといえる。また、背面に腹面の剥離方向に対して直交する剥離痕を有するものが多いことから、打面転移は約90度の方向に行われることが多かったと考えられる。

このようにして生産された石英安山岩の剥片には様々な大きさのものがみられ、小型石器から大型石器まで種々の剥片石器の素材として準備されたと考えられる。先述したように、石英安山岩については剥片石器、石核、剥片、チップが多量に出土しており、遺跡内で剥片生産から石器製作までが行われた痕跡を残している。しかし、頁岩については、剥片石器は多くみられるが、石核、剥片、チップは少ないため、頁岩の剥片生産および石器製作が遺跡内で主に行われていた可能性は低いといえる。その他の石材についても頁岩と同様の傾向があるため、石英安山岩以外の石材の石器は、素材の剥片、または完成した剥片石器の状態で持ち込まれたと考えられる。特に頁岩の剥片石器は大きさ・厚さとも剥片を上回るものが多く、大型の頁岩製剥片石器（石匙・石錐など）またはその素材は遺跡外から持ち込まれた可能性が高い。

⑥ 石器出土状況

第1号竪穴住居跡は、石器の出土数が少ない。しかし石核は多くみられ、全体の約3割を出土している（図76）。逆に第2号竪穴住居跡からは多くの石器を出土しているが、石核は1点のみである。このことは、石核がまとめて廃棄されたか、石核を廃棄する場所がある程度決められていた可能性がある。

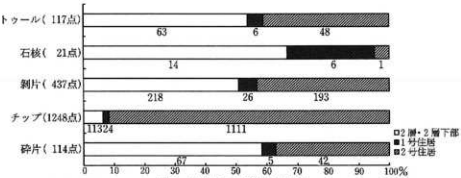


図76 器種毎の石器出土状況

Fig.76 Frequency of stone tool types by layers and pit dwellings

また第2号住居跡からは、特にチップが多く、全体の約9割を出土している。その約半数が床面および床面壁際のピット12から検出されている。床面からは130点のチップが検出された。ピット12の埋土からは、442点（30.09g）のチップが出土した。石材は石英安山岩が428点（29.60g）で96.8%と大半をしめる。そのほか、頁岩4点（0.21g）、玉髄2点（0.02g）、凝灰岩と考えられるもの4点（0.15g）、流紋岩と考えられるもの4点（0.11g）などがみられた。このピットは、住居内での石器製作により生じたチップを、廃棄する施設と考えられる。これらのことから、この住居内で石器製作が行われていたといえる。また、床面出土の石核は1点のみであるため、別の場所で生産された剥片を持ち込んで、石器製作を行っていた可能性が高い。その剥片の多くは小型であり、トゥールの素材としての大きさを満たさなかったため、その場に残されたと考えられる。

石器製作の痕跡を残す住居跡は比較的多くみられるが、その多くは剥片貯蔵穴や剥片貯蔵場と考えられる施設を伴うもので、チップを廃棄する施設をもつ住居跡はあまり報告をみない。岩手県小屋敷Ⅰb遺跡（佐々木嘉直1983）では、チップと剥片が西壁寄りにまとまって出土した住居が検出されている。チップを廃棄したピットはみられなかったが、住居の壁寄りにチップが廃棄されている状況は共通しているといえる。

⑦ 小結

今回出土した石器群の分析により、縄文時代早期石器群の様相をいくつか指摘することができた。

石器組成については、縄文時代早期における地域性がみられた。礫石器の少ない富沢遺跡周辺の地域は、宮城県内の他の地域や、広く福島県、関東地方の同時期の石器群と比較しても特異なものである。この地域も縄文時代前期前葉になると、礫石器の出土数は安定する傾向があるため、縄文時代早期に、特徴的に、植物加工または礫石器の廃棄の頻度が低かった地域であったと考えられる。その地域の中でも青葉山遺跡E地点第3次調査は特

に礫石器が少ないが、剝片石器は器種、量ともに最も豊富に出土した。

その剝片石器には、頁岩や石英安山岩が多用されている。頁岩は良質のものが多く、石鏃、石匙、石錐などの定形石器を中心に用いられている。これらの器種は、何度も刃部再生を受け、長く使い込まれる器種であると考えられ、その器種に多く選択された頁岩は、重要な位置をしめる石材であったといえる。しかし、頁岩の石核、剝片、チップは少なく、頁岩製石器の未成品もみられないため、頁岩製石器の製作が遺跡内で本格的に行われていたとは考えられない。よって、この遺跡の頁岩は、付近で採取できるものではなく、他の地域から持ち込んだものといえる。その頁岩の貧重さは、徹底的に剝離が行われた小型石核や、剝片利用率の高さに示されている。

石英安山岩は不定形石器1類、2類に多い。これらは出土量が多いため、長く保持されることのない、製作と廃棄の頻度が高い器種であると考えられる。それら石英安山岩製石器の製作は、石核、剝片、チップや未成品が多く出土していることから、剝片生産から石器製作まで一貫して遺跡内で行われていたといえる。その石英安山岩は遺跡付近で採取できたと推測されるが、質の悪いものが多く、トゥールの素材として利用できるものは限られていた。大型の石核が多く廃棄されていることや剝片利用率の低さがそのことを示している。しかし、チップが多くみられるため、石英安山岩製石器が盛んに製作されていたと考えられる。その良質でない石材を多く利用しなければならなかったこの遺跡の石材環境は、良好ではなかったといえる。

このように、今回出土した石器群において頁岩と石英安山岩は対照的な用いられ方をしている。このことは、頁岩を中心とする石鏃や石篦と、石英安山岩を多く用いる不定形石器1類、2類の用途、機能の違いが反映されている可能性がある。比較した他の遺跡においては、中心となる2種の石材にこれほどの質の差があるものはないと推測されるため、この定形石器と不定形石器の位置づけの違いが、背業山遺跡E地点第3次調査出土石器群特有のものであるのか、周辺の遺跡にも共通のものであるのかは不明である。

また、住居跡からの石器の出土状況から、次の2点のことが指摘できた。第1に、石核と、剝片・チップが備った出土状況を示すことから、石核、剝片、チップの廃棄場がある程度決められていたと考えられる。第1号竪穴住居跡からは、全体の石器数は少ないが、石核がまとまって出土している。それに対し、第2号竪穴住居跡からは多量の石器が出土し、特に剝片、チップが多いが、石核は1点のみである。第2に、チップの出土状況から、第2号竪穴住居跡で石器製作が行われていた可能性が指摘できた。このことは、チップ廃棄のために設けられたピット12や、床面から130点のチップが検出されたことから考えられる。また、床面出土の石核や剝片は少ないため、他の場所で生産された剝片を住居内に持ち込んでトゥールを製作したと推測される。

(3) 石器使用痕分析

須藤　隆・池谷考史

青葉山遺跡E地点第3次調査において、縄文時代早期後半貝殻文土器に伴って駆穴住居跡内部・周辺の包含層から出土した頁岩製石器5点について使用痕分析を行った。図45—12の石匙を除いた4点に使用痕が確認された。頁岩は東北大学使用痕研究チームによる光沢を中心とした実験的研究（芹沢・梶原・阿子島1982　梶原・阿子島1981）の基準に基づいて検討できる石材である。

A．分析の方法

分析は、Keeleyらによって採用された、いわゆる「高倍率法」によって光沢面、線状痕について入念に観察するとともに微小剥離痕についても観察を行った（芹沢・梶原・阿子島1982、梶原・阿子島1981、Keeley1977・1980）。使用痕観察には、落射照明付き金属顕微鏡（オリンパスBHM）を使用し、100～400倍を用いて石器の全面を検鏡した。観察前に必要に応じて洗浄し、アルコールを含ませた脱脂綿で石器表面の油脂分を除去した。光沢タイプについては、前述の東北大学使用痕研究チームによる分類に従った。また、微小剥離痕は実体顕微鏡（オリンパスSZ6045TR）を用いて50倍程度で観察した。

B．使用痕観察結果

石匙の部位の記述はつまみ部を上にした状態で背面左側縁と右側縁をそれぞれ左側縁、右側縁と呼び、先端側を先端部と呼ぶことにする。

10は2層下部出土の石匙である。埋没後の表面変化(PDSM post-depositional surface modification Levi-Sala 1986）の中でも埋没光沢が石器全面に比較的強くみられるが、発達した使用痕光沢が確認できた。また、ほとんどすべての稜に強い摩滅が認められる。光沢は左側縁の両面にみられ、非常に強く、肉眼でも認識できる。この光沢は、Aタイプ（コーングロス）に分類され（図77—1、2、3）、腹面では背面に比して縁辺からの広がりがやや大きい。これは作業時に腹面がより広範囲に被加工物と接触したためと考えられる。この光沢に伴って縁辺に平行する線状痕が明瞭に認められ、これに直交する形で部分的に直交する線状痕が認められる（図77—2）ことから平行する運動の後に直交する運動が行われたと推定できる。以上のように、左側縁を使用部位として、イネ科植物などを切断（cutting）、鋸引き（sawing）し、その後、削り（whittling）などの作業が行われたと推定できる。また、背面と腹面先端の二次調整の内部に光沢が確認できることから、二次調整の後に使用されたことがわかる。

64は第2号住居跡床面出土の石匙である。全体的に埋没光沢は弱く、未発達の微弱な使用痕光沢でも確認できた。背面中央の稜には、特に強度の摩滅と埋没光沢が認められる。光沢は先端部の両面と背面右側縁の先端部寄りにみられる。この光沢には小パッチが独立して散在し、分布が縁辺に限られるなどの特徴があり、E1タイプを主としてD1タイプが併存する（図77—4、5）。刃部背面に比べ腹面により強くみられる。刃部から内部への光沢の広がりは、両面ともにほぼ同程度である。先端部には平行する線状痕がみられるが、右側縁に線状痕はみられない。微小剥離痕が右側縁、先端部および左側縁の一部に連続してみられ、その分布は約70%が背面に偏る。特に、先端部では背面への偏りが著しく、3ケ所の比較的深い、集中した微小剥離痕がみられる。右側縁では腹面と背面に交互に微小剥離痕の集中がみられる。左側縁には先端よりの一部に、厚みを減じるような形で主に腹面にみられる。微小剥離痕の片面への集中は、線状痕から推定される平行運動では生じにくい現象である。上記の観察をまとめると、本資料の微小剥離痕について、次のような点が指摘できる。①微小剥離痕はつまみ部を作り出した二次調整と連続性が認められる。②左側縁の先端よりにみられる微小剥離痕は、縁辺の厚みを減じるような形で主に腹面に分布する。③微小剥離痕の分布と使用痕光沢の分布は完全には一致せず、微小剥離痕と使用痕光沢の分布の間に相関がみられない。このように、この一連の微小剥離痕は均等な刃部を確保するための二次調整である可能性が高いと判断される。なお、使用痕光沢と線状痕からは、先端部および右側縁を使用部位とし

て、肉・皮、骨・鹿角の切断、鋸引きの作業が行われたと推定される。

13は2層出土の石匙である。埋没光沢が全体的にやや強いが、発達した使用痕光沢が確認された。また、つまみ部付近には輝斑がみられる。光沢は両側縁の両面にみられる。左側縁には先端から中央までみられ、D1またはD2タイプに分類でき(図78－2)、腹面にはそれに加えて下半の一部分にBタイプの光沢がみられる。この光沢に重複して縁辺に平行する弱い線状痕が下半に部分的にみられる。右側縁にも、同様に先端から中央までD1またはD2タイプの光沢(図78－3)と背腹両面の中央にBタイプの光沢がみられる(図78－1)。特に、腹面ではこのBタイプの光沢が非常に発達しているが、分布範囲はこの部分に限られる。この光沢に重複して縁辺に平行する線状痕が部分的にみられる。D1、D2タイプの光沢は、主に骨・鹿角に対する加工で生じるが、木に対する加工においても生じる場合があることが梶原・阿子島によって指摘されており(前掲)本資料にみられる2種類の光沢は木に対する加工によって生じたものである可能性も考えられる。以上のように両側縁ともに木、骨・鹿角を切断、鋸引きした作業が推定される。

15は2層下部出土の石篦である。全体的に中程度の埋没光沢がみられるが、発達した使用痕光沢が確認できた。基部の両面には輝斑がみられる。光沢は石篦刃部の両面にみられるが、腹面により強く発達しかつ広範囲に分布する。特に刃部がややくぼむ部分に光沢が最も強くみられる(図78－4)。この光沢はE2タイプに分類される(図78－4、5)。腹面への右からの大きな剝離の内部では剝離面が相対的に深いために被加工物との接触が少なく、光沢の広がりが狭いと考えられる。この光沢に重複して刃部に直交する線状痕がみられる。また、刃部には重度の摩滅がみられる。以上のように、刃部腹面を乾燥皮に押し当てて掻き取り(scraping)が行われたと推定できる。

図45－12の石匙には全体的に埋没光沢がやや強くみられるが、使用痕は確認されなかった。

C．まとめ

資料の観察から次のような結果が得られた。

1．青葉山遺跡E地点第3次調査において出土した縄文時代早期後半の貝殻文土器に伴う石器5点について使用痕観察を行った結果、3点に使用痕光沢、線状痕が確認され、1点に非常に微弱な使用痕光沢、線状痕、微小剝離痕が確認された。また、12の石匙には使用痕は確認されず、全体的にやや強い埋没光沢がみられた。

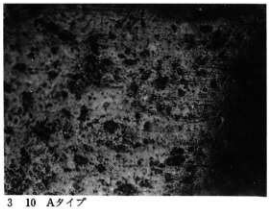
2．3点の石匙について、10は左側縁を使用部位とし、イネ科植物などを切断、鋸引きし、その後削りが行われたと推定される。64は先端部と右側縁の一部を使用部位とし、肉・皮、骨・鹿角を切断、鋸引きしたと推定される。右側縁、先端部と左側縁に連続してみられる微小剝離痕は、二次調整の可能性が高いと考えられる。13は両側縁を使用部位として木、骨・鹿角を切断、鋸引きしたと推定される。石匙には、使用部位、作業方向、被加工物に多様性が認められる。また、石篦については、刃部腹面を乾燥皮に押し当てて掻き取る作業が推定される。

以上のように、限られた資料ではあるが、石匙、石篦の使用痕分析から青葉山遺跡E地点で行われた多様な作業の一端を具体的に捉えることができた。

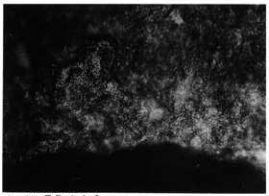
1　10　Aタイプ

2　10　Aタイプ

0　100mm

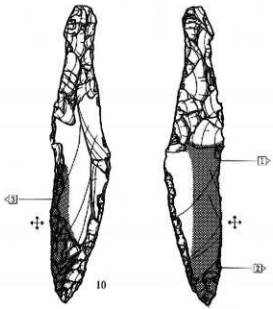


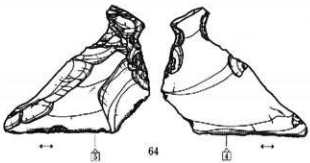
3　10　Aタイプ



4　64　E,D,タイプ

5　64　E,D,タイプ





0　5cm

▩ 光沢面の範囲　polished area

↔ 運動方向　direction of movement

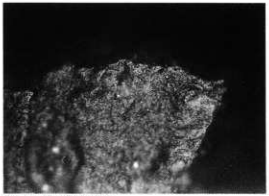
凸 写真番号　photo number

図77　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器の使用痕(1)

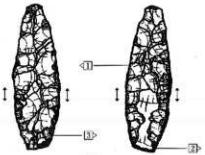
Fig.77 Use-wear polishes on lithic artifacts from AOE3(1)

1　13　Bタイプ

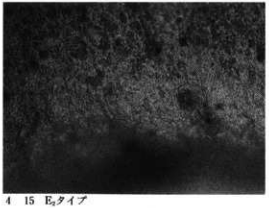
2　13　D_1orD_2タイプ　0　100μm



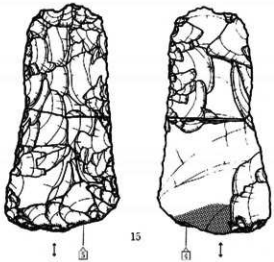
3　13　D_1orD_2タイプ



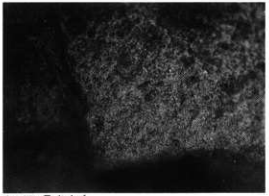
13



4　15　E_2タイプ



15



5　15　E_2タイプ

0　5cm

光沢面の範囲　polished area
↔　運動方向　direction of movement
凸　写真番号　photo number

図78　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器の使用痕(2)

Fig.78 Use-wear polishes on lithic artifacts from AOE3(2)

7. まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡２棟のほか、土坑10基と100基近いピットを検出し、縄文時代早期後葉の集落の一端が明らかとなった。後述するように、出土した土器から、集落の営まれた期間は、土器型式にして１型式という比較的短い期間であったと考えられる。竪穴住居跡は近接して建てられており、多数のピット群の集中域よりも若干斜面の下方に位置している。貯蔵穴と考えられるものを含む土坑は、ピット群を挟んで竪穴住居跡とはやや離れた場所で発見されている。

竪穴住居跡は、いずれも隅丸長方形を呈し、内部に明確な炉の痕跡を持たない。規模、形態、構造ともに、宮城県内でこれまでに検出された縄文時代早期の竪穴住居跡と共通する点が、多く認められた。

出土遺物は、**縄文土器 2152 点、石器 1993 点**、内黒土師器１点である。

縄文土器は、早期中葉の土器１点と晩期の土器３点を除き、残りは全て早期後葉の貝殻条痕文土器である。分析の結果、それらは非常にまとまりをもった一つの土器群とみなすことが可能であることが判った。器形は、体部に２段ないし１段の屈曲を有し、底部は角がやや丸みを帯びた平底を呈する。尖底の土器は存在しない。また、上方から見たとき、口縁部が多角形を呈する土器も存在する。胎土には植物繊維を含み、器面全体が**放射肋**を持つ二枚貝によって調整される。口縁部の端面は内削ぎのものが多く、口唇部に細かな刻みを加えた小波状口縁が多く認められる。小波状口縁以外には、口縁部が平坦なものや、大波状を呈するもの、W字状の突起を有するものなどが認められる。文様を持つ土器と持たない土器とが存在し、前者は半数以下である。有文土器では、口縁部や体部の上半、体部のくびれ部に文様が施される。施文具には断面円形の工具が選ばれ、これにより沈線や刺突が表現される。文様は、母ら幅の狭い沈線と刺突（「押し引き」と呼ばれる連続刺突を含む）によって表現され、微隆起線や縄文、幅広の沈線は全く存在しない。沈線は直線的なものが多く、斜めの平行沈線や斜格子文の他、菱形、方形をはじめとする各種の幾何学文が描かれ、それらの区画内を連続刺突（押し引き）により充填する資料も多数認められる。連続刺突（押し引き）は、沈線区画内を埋める以外に、斜行沈線に平行に沿わせたり、それ自体で幾何学文を構成する場合もある。刺突は基本的に土器の左右あるいは下方から器面に対して斜めに施されており、器面に対して工具の先端を垂直に押し当てたものは極めて少ない。また、これと関連するが、区画沈線の交点に円形の刺突を加えたものは全く存在しない。体部の屈曲部には、斜め下方から施された刺突が横一列に並ぶものが多い。

従来、仙台湾周辺では、このような型式学的特徴を有する土器は、断片的にしか確認されておらず、したがって、それに冠すべき適当な型式名称も存在していない。そのため、この時期の土器の編年研究が進んでいる関東地方の「鵜ヶ島台式」や「茅山下層式」を取り上げ、それらとの異同を検討した。その結果、本遺跡出土土器は、「鵜ヶ島台式」の新しい部分に併行するが、それとは型式内容に違いが認められることが判り、新たに「青葉山Ｅ式」を設定した。「鵜ヶ島台式」と最も異なる点は、「鵜ヶ島台式」のメルクマールの一つとされる円形竹管文の欠如である。円形竹管文は「野島式」と「鵜ヶ島台式」とを分ける指標とされ、「鵜ヶ島台式」に属行し、「茅山下層式」に引き継がれる重要な要素である。「青葉山Ｅ式」は、器形、胎土、調整、口縁部の端面形状、口縁部の装飾、文様帯の位置、区画文の形態など、基本的には「鵜ヶ島台式」と同じ土器作り技術体系を持ちながらも、文様において独自性を示している。「青葉山Ｅ式」の分布は、いまだ十分に把握できていないが、岩出山町天神山遺跡（小笠原1982）、素山貝塚（伊東前掲）、蔵王開拓Ａ遺跡（片倉信光ほか1976）など、仙台湾周辺の遺跡で出土している。「鵜ヶ島台式」や「茅山下層式」等の貝殻条痕文土器の一部は強い浸透力を持ち、東北地方中部にまで及んでいたとの指摘がこれまでにもなされていた。事実、「青葉山Ｅ式」に先行する段階には、仙台湾周辺を含めて東北中部以南には、古手の「鵜ヶ島台式」そのものが分布している。一方、「青葉山Ｅ式」に後続する時期には、地域性が拡大し、東北南部の阿武隈川中・上流域にも「茅山下層式」とは異なる内容の土器群が成立する。「青葉山Ｅ式」は、まさに貝殻条痕文土器のなかの地域性が顕在化しはじめた段階にあたり、やがて東北地方の

南半部に地域色豊かな縄文条痕土器が成立する下地となった土器群であると理解できよう。

石器についても、共伴した土器から、使われた時期をかなり限定できる点が特筆される。トゥールの石器組成を、周辺遺跡の早期・前期の資料と比較した結果では、不定形石器が主体的である点、礫石器が少ない点などに共通性がみられた。これを宮城県内でも距離の離れた遺跡や福島県、関東地方の遺跡と比較すると、特に礫石器が少ない点に地域性が現れていると考えられた。

剥片石器の石材には、主に石英安山岩と頁岩が用いられている。石英安山岩には、石核、剥片、チップやトゥールの未成品が多くみられ、剥片生産からトゥール製作が遺跡内で一貫して行われていたと推測される。しかし多量に消費されているこの石材は、脆いものが多く、トゥールの素材として良質であるとは言えない。この質の良くない石英安山岩は、多量に消費されている点からみて、遺跡付近で採取できたものと考えられる。逆に良質のものが多い頁岩には、石核、剥片、チップは少なく、トゥールまたはその素材が、外部、おそらく遠隔地から持ち込まれていたと考えられる。また、これら2種類の石材には、器種による石材選択性が強く現れていた。石匙、石錐などの定形石器にはほとんど頁岩のみが使用され、不定形石器と分類したものには石英安山岩が多く用いられている。この選択性の違いは、それぞれの器種の用途、機能の違いを反映している可能性がある。周辺の遺跡で主体となる石材にこれほど質の差があるものはみられなかったため、この違いが当石器群特有のものかは不明である。

石器の出土状況からは、石核のまとまった廃棄が推測された。石器出土数の少ない1号竪穴住居跡から石核が多く出土したのに対し、石器の多く出土した2号竪穴住居跡では石核は1点のみであった。また、第2号竪穴住居跡床面からは石英安山岩を主とする多量のチップが検出されており、この住居内で実際に石器製作が行われていたと考えられる。また、同住居跡床面壁際には、チップを廃棄したと考えられるピットが1基検出された。住居内でのチップの廃棄については、岩手県内に床面壁際にまとめて廃棄した例が1例存在するが、廃棄用に施設を設けた住居跡については、類例を知らない。

以上、この調査で得られた成果は、これまでこの地域で不足していた縄文時代早期の集落構造、土器型式の変遷、石器の製作と使用など、多方面にわたる。いずれも、この地域、この時代を論じる際に基準と成りうるものである。本調査地点の西側に隣接する場所は、その後継続的に調査が行われている。今後、それらの調査成果と充分な比較検討を行い、集落全体の様相を明らかにしていく必要がある。

＜引用・参考文献＞

相原淳一　1985　「縄文条痕土器群の諸段階について」『赤い本一片倉信光氏追悼論文集』　pp.23～45
赤い本同人会

赤星直忠　1930　「茅山貝塚と其の土器」『史前學雑誌』第二巻第六号　pp.22～32　史前學會

赤星直忠　1948　「神奈川縣野島貝塚」　『考古學集刊』第１冊　pp.8～21　東京考古學會

赤星直忠・岡本勇　1957　「茅山貝塚」　『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第１号　pp.１～30

赤星直忠・岡本勇・村越潔　1958　「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第２号　pp.１～21

石本弘　1991　『矢吹地区遺跡発掘調査報告』７　福島県文化財調査報告書第248集　福島県教育委員会

伊東信雄　1940　『宮城縣遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』
東北帝國大学法文學部　奥羽史料調査部研究報告第二

井上圀雄　1977　「久慈川上流域における縄文時代早期後半の土器編年」　『福島考古』第18号　pp.1～19
福島県考古学会

井上賢　1994　「野島式・鵜ケ島台式（第Ⅴ・Ⅵ群）土器について」　『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』
千葉大学文学部考古学研究報告第１冊　pp.239～249

太田昭夫・斎野裕彦　1992　『高沢遺跡第30次調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第160集

大場盤雄　1930　「繊維土器出土の遺蹟について」　『史前學雑誌』第二巻第二号　p18　史前學會

岡本勇　1959　「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」　『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第３号　pp.１～13

岡本勇　1960　「三浦市大浦山遺跡」　『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第４号　pp.１～15

岡本勇　1961　「三浦市鵜ガ島台遺跡」　『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第５号　pp.１～15

岡本勇　1962　「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（一）」　『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』
第６号　pp.23～44

岡本東三編　1994　『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』　千葉大学考古学研究室

小川出　1986　『今熊野遺跡Ⅱ縄文・弥生時代編』　宮城県文化財調査報告書第114集

小薬一夫　1983　「縄文時代早期後半における石器群の様相一南関東地方を中心に一」
『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅱ　pp.１～23

小野真一・秋本真澄編　1975　『ゆずり葉』　加藤学園考古学研究所

柏倉亮吉・加藤稔編　1969　『山形県史』資料編11考古資料

梶原洋・阿子島香　1981　「頁岩製石器の実験使用痕研究　－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－
（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その２）」『考古学雑誌』67　1
pp.１～36

片倉信光・中橋彰吾・後藤勝彦編　1976　『白石市史』考古資料編　白石市史編纂委員会

加藤稔編　1982　『村山市史』別巻一原始・古代編

木田芳憲ほか　1993　『東北横断自動車道遺跡調査報告』23　福島県文化財調査報告第294集　福島県教育委員会

奥野義一　1970　「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」　『古代文化』22巻11号　pp.239～242

奥野義一・遠藤智一　1970　『宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡』　岩出山町教育委員会

工藤信一郎　1996　『野川遺跡』　仙台市文化財調査報告書第205集　仙台市教育委員会

慶應義塾高等学校考古学会　1956　「茨城県石岡市三村字地蔵久保三村貝塚発掘報告」『Archaeology』　vol.23

後藤勝彦　1968　「宮城県七ケ浜町吉田浜貝塚〔１〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』
宮城県の地理と歴史第三集　pp.１～20　宮城教育大学歴史研究会

古宮隆信　1976　『我孫子市柴崎遺跡調査報告書＜第三次・第四次＞』　我孫子市教育委員会
主浜光朗編　1987　『山田上ノ台遺跡』　仙台市文化財調査報告書第100集　仙台市教育委員会
主浜光朗　1995　『上ノ原山遺跡』　仙台市文化財調査報告書第198集　仙台市教育委員会
主浜光朗ほか　1997　『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』　仙台市文化財調査報告書第217集　仙台市教育委員会
小徳晶　1982　『天神山遺跡』　宮城県文化財調査報告書第89集　宮城県教育委員会
斎藤忠　1930　「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報（上）（下）」　『東北文化研究』2－4　pp.83～100　2　5　pp.37～49
斎野裕彦ほか　1987　『富沢ー仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書ー』　仙台市文化財調査報告書第98集
佐々木嘉直　1983　『吹屋敷Ｉb遺跡発掘調査報告書ー東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査ー』　岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第63集
佐藤甲二・横山裕平ほか　1988　『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第114集　仙台市教育委員会
佐藤洋・斎野裕彦編　1982　『北前遺跡』　仙台市文化財調査報告書第36集　仙台市教育委員会
白鳥良一　1974　「仙台市三神峯遺跡の調査」『平重道先生還暦記念論文集　東北の考古・歴史論集』　pp.1～54
杉原荘介　1932　「下總飛ノ臺貝塚調査概報」　『史前學雑誌』第四巻第三号・第四号　pp.19～34　史前學會
鈴鹿良一ほか　1991　『矢吹地区遺跡発掘調査報告』8　福島県文化財調査報告書第249集　福島県教育委員会
鈴鹿良一　1996　「滝下遺跡出土の縄文土器」『論集しのぶ考古ー日黒吉明先生頌寿記念』　pp.97～104　しのぶ考古学会
鈴木秀介　1998　「鵜ガ島台式土器の変遷」　『法政考古学』第24集　pp.1～21　法政考古学会
鈴木道之介　1981　『図録石器の基礎知識』III　新書房
須藤隆編　1994　『土浮貝塚平成3年度調査概報』　角田市文化財調査報告書第13集
瀬川裕市郎　1982　「条痕文土器」　『縄文文化の研究』3　pp.121～134
瀬川裕市郎・関野哲夫ほか　1975　『元野遺跡発掘調査報告書』　沼津市文化財調査報告第8集
関野哲夫　1980　「鵜ケ島台式土器細分への覚書」　『古代探叢』　pp.17～36
関野哲夫　1985　「茅山下層式土器について」　『古代』第80号（西村正衛先生古稀記念石器時代論集）　早稲田大学考古学会
芹沢長介・梶原洋・阿子島香　1982　「実験使用痕研究とその可能性（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その4）」『考古学と自然科学』14　pp.67～87
芹沢長介・林謙作　1965　「岩手県蛇王洞洞穴」　『石器時代』第7号　pp.1～16　石器時代文化研究会
高木和夫　1981　「阿武隈地区遺跡分布調査報告(1)」　福島県文化財調査報告書第98集　福島県教育委員会
高島好一ほか　1985　『龍門寺遺跡』　いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊　福島県いわき市教育委員会
地学団体研究会仙台支部編　1968　『新編仙台の地学』
角田文衛　1936　「陸前船入島貝塚の研究」　『考古学論叢』第三輯　pp.255～274
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報』2
土岐山武　1982　「松田遺跡」　『仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書』II　pp.13～98　宮城県文化財調査報告書第98集
中村五郎　1983　「東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論」　『福島考古』24号　pp.131～140　福島考古学会

中村五郎　1986　「東北地方の古式縄紋土器の編年」　『福島の研究』第1巻地質考古編　pp.116～142
西村正衛　1973　「茨城県潮来町浜間貝塚（第一次調査）」　『学術研究』第22号　pp.1～22
早稲田大学教育学部
丹羽茂　1982　「松田遺跡」　『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅶ　pp.1～21　宮城県文化財調査報告書第92集
早川正一　1983　「磨製石斧」　『縄文文化の研究』7　pp.60～74
林謙作　1962　「東北地方早期縄文式文化の展望」　『考古学研究』第9巻第2号　pp.20～31　考古学研究会
林謙作　1965　「縄文文化の発展と地域性一東北」　『日本の考古学』Ⅱ　pp.64～96　河出書房新社
林謙作　1990　「素山上層式の再検討」　『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』　pp.105～162
藤田定興・中村五郎　1979　「白河地方の古式縄紋土器」　『福島考古学』20号　pp.25～42　福島考古学会
本間宏ほか　1989　『東北横断自動車道遺跡調査報告』4　福島県文化財調査報告書第218集　福島県教育委員会
本間宏ほか　1991　『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告』Ⅹ Ⅰ　福島県文化財調査報告書第266集
福島県教育委員会
松本茂ほか　1983　『母畑地区遺跡発掘調査報告』13　福島県文化財調査報告書第117集　福島県教育委員会
Matsumoto,H. 1981　Developmental Process of Alluvial Coastal Plain Rerоted to the Sea-Level Change.
Science Reports Tohoku Univ. 7th Ser. (Geography) vol.31 No.2
松本秀明　1984　「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」　『宮城の研究』1考古学篇
pp.7～52
松本秀明・伊藤晶文　1998　「宮城県沖積平野における後氷期の海面変動」『日本地理学会発表要旨集』No53
pp.392・393
馬目順一編　1975　『大畑貝塚調査報告』　福島県いわき市教育委員会
馬目順一編　1982　『竹之内遺跡』　いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊　福島県いわき市教育委員会
真山悟・丹羽茂　1992　「第60次調査」　『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　pp.4～94
三森定男　1938　「古式土器に属する考察」　『考古学論叢』第9輯　pp.76～110
日黒吉明ほか　1966　『新産業都市指定地区遺跡発掘調査報告書』　福島県教育委員会
目黒吉明編　1980　『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅰ　福島県文化財調査報告書第80集
福島県教育委員会
安田稔ほか　1983　『母畑地区遺跡発掘調査報告11』　福島県文化財調査報告書第115集　福島県教育委員会
柳沢和明・遠藤秋輝　1992　「第61次調査」　『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　pp.95～140
山内清男　1929a　「關東北に於ける纖維土器」　『史前學雜誌』第一巻第二号　pp.27～29　史前學會
山内清男　1929b　「纖維土器について追加一」　『史前學雜誌』第一巻第三号　pp.85・86　史前學會
山内清男　1930　「纖維土器に就いて追加第二」　『史前學雜誌』第二巻第一号　pp.73～75　史前學會
吉岡恭平編　1996　『下ノ内浦・山口遺跡』　仙台市文化財調査報告書第207集　仙台市教育委員会
渡辺紀　1988　『下ノ内浦遺跡』　仙台市文化財調査報告書第115集　仙台市教育委員会
Keeley,L.H.　1977　"The functions of Paleolithic flint tools' *Scientific American* 237(5):108-126
Keeley,L.H.　1980　*Experimental Determination of Stone Tool Uses*. Univ. of Chicago Press.
Levi-Sala,I.　1986　'Use wear and post-depositional surface modification: a word of caution'.
Journal of Archaeological Science, 13:229-244

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF
TOHOKU UNIVERSITY
vol. 12 March 1999
The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

Introduction

On the campus of Tohoku University, a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. Aobayama campus includes remarkable Paleolithic sites, and Locality B is dated more than 100,000 years ago. In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, had carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994 to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes those records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, techniques of excavation and preservation are also important duties.

This is a report of two sites (i. e., NM15, AOE3) excavated by the Archaeological Research Center on the Campus in 1994.

NM15 site (Loc. 15 of *Ninomaru*, i. e., the secondary citadel of Sendai Castle)

This site corresponds to the area sandwiched between the center of the secondary citadel and the outer block of it. This site was excavated before development works which improve life environment on the south part of Kawauchi campus. Though we researched carefully, we could not find any features and remains belonging to Edo period because the Imperial Army and the American Army had reformed the area on a large scale.

AOE3 site (the third excavation of Aobayama site Loc.E)

This place had been used for the maneuvers by the Imperial Army before the Second World War. Sugao Yamanouchi who was sub-assistant of the Medical Department of Tohoku Imperial University had found a piece of fiber-tempered Jomon pottery, which is similar to large quantities of pottery from AOE3, at this place about 80 years ago. In those days, he was searching fiber-tempered pottery which was considered as a type of old Jomon pottery. The Aobayama site was buried in oblivion for a long time after the Second World War. The Aobayama site was put on the stage afresh as Paleolithic site. Namely in Aobayama

campus, Paleolithic sites, such as Location B(AOB), Location E(AOE), and Location F(AOF), were discovered in 1982, and excavated in 1984 prior to construction. Fiber-tempered Jomon pottery was found by the second excavation of Aobayama site Loc. E in 1993 again.

AOE3 site was excavated in 1994 prior to construction of The Museum of Natural History. We could get a lot of knowledge about settlement belonging to the Initial Jomon period by this excavation. This settlement is situated on an easy slope faced to the south. Two dwelling pits were found at the lower position of the slope, and about one hundred post holes were found at the upper position of these dwelling pits. Most of the post holes are thought to be parts of some buildings with pillars enbedded directly in the ground. Ten earthen pits were found on the west of these post holes. Some of earthen pits can be regarded as storage pits. A lot of stone implements were found in and around these dwelling pits. Many sherds of pottery were found around both dwelling pits and concentration of post holes.

Two dwelling pits are found close. Plans of them are corner rounded square. They don't have any fire pits inside. They are similar to other dwelling pits belonging to the Initial Jomon period found in Miyagi Prefecture.

Most of archaeological remains found at the site belong to the late stage of Initial Jomon period. Besides them, there are three sherds of the Final Jomon pottery and a piece of inside smoked Haji ware.

Sherds belonging to the late stage of Initial Jomon period amount to**2152**, and most of them contain fiber and were surface modified by shell-edge. This pottery with incised lines made by shell-edge from AOE3 is considered one type of Jomon pottery which have been made and used about 7500 years ago. They resemble new stage of Ugashimadai type Jomon pottery which have been made and used about 7500 years ago in the Kanto district in many points of technology. Deep bowl with flat-bottom and two corner points on body is the most popular. Pottery from AOE3 is similar to new stage of Ugashimadai type Jomon pottery in respect to components used to create the design and to fill the design space such as motif, configuration, basic unit, layout, structure. But new stage of Ugashimadai type Jomon pottery has important design element which pottery from AOE3 doesn't have. The design element is stamping with a hollow cane. Stamping with a hollow cane is the most important design element characterizing Ugashimadai type Jomon pottery. These two types of Jomon pottery must be kept separated one from the other. We started calling pottery from AOE3 "Aobayama E type" after the name of the site. Though Aobayama E type Jomon pottery has been excavated from several sites around Sendai Bay, we cannot yet decide upon the distribution of it.

A total of 1993 stone implements belonging to the Initial Jomon period were found from AOE3. Compared with sites of Fukushima Prefecture and Kanto district, it is characteristic that there are few pebbles used for processing plants.

Flake tools from AOE3 were mainly made of dacite or shale. There were many cores, flakes, chips and unfinished flake tools of dacite, and it is considered that flakes and flake tools of dacite were produced inside the site. But the quality of this material so much used was not very good for flake tool. Considering the point that they used much of low quality material, it is inferred that dacite could be obtained near the site. On the other hand, cores, flakes, and chips of shale were not so many. Therefore, tools or flakes of shale might be brought to AOE3 site from distant areas.

These two materials were used respectively for flake tools of different types. Shale was used for tanged

stone scrapers and spatulate scrapers, while dacite was used for other scrapers. There is a possibility that the difference between two materials indicate different use or function of each type of stone tools. There were few reported sites that two main materials had the quality gap, so it is not clear if the difference was found only in AOE3 or not.

Judging from distribution of stone implements, several cores were abandoned in the same place. One pit dwelling had a few stone implements but many cores. Other pit dwelling had many stone implements but only one core.

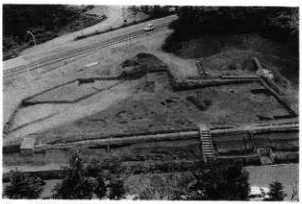
Many chips were found from the floor of one pit dwelling, and it is thought that flake tools were produced inside this pit dwelling. Though a pit dwelling in which chips were abandoned on the floor near the wall was found in Iwate Prefecture, we don't know pit dwellings which had facilities for abandonments of chips.

As a resuit of microwear analysis, although each piece was more or less patinared, it was possible to make functional reconstruction on 4 (3 tanged scrapers, and 1 spatulate scraper) of 5 pieces. The results are summed up as follows. Concerning 3 tanged scrapers, longitudinal motion (such as cutting and sawing) was mainly carried out, although, in the case of No. 10, transversal motion (such as whittling) was done after longitudinal one. Left and/or right lateral edge and distal end was used as working edge. Worked materials were non-woody plant, wood, bone/antler and hide/meat. Concerning the spatulate scraper, it was interpreted that the retouched distal edge was used on dry hide in scraping motion.

We believe that the archaeological features and remains from this site shall be of great importance to study Jomon culture of East Japan.

写真図版

1. Ⅰ期調査区全景（北西から）



2. Ⅰ期調査区全景（北から）

3. Ⅰ期調査区全景（西から）

4. Ⅰ期調査区全景（東から）

5. Ⅰ期調査区全景（北から）

6. 8・9列拡張区（西から）

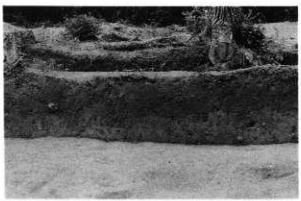
7. Ⅱ期調査区全景（北北西から）

8. 1号竪穴住居跡・2号竪穴住居跡全景（東から）

図版1　青葉山遺跡E地点第3次調査区全景

PL.1 Views of AOE3

1. 調査区北壁F・G列周辺（南から）



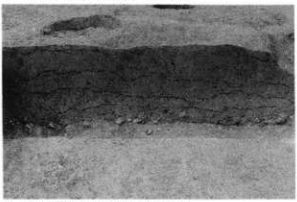
2. OP門ベルト東側20・21列周辺セクション（東から）

3. B7区深掘り調査区（北から）

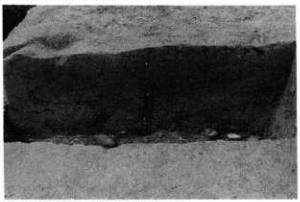
4. I3区深掘り調査区（南から）

5. O6区深掘り調査区西壁（東から）

6. O9区深掘り調査区西壁（東から）



7. O12区深掘り調査区西壁（東から）



8. O18区深掘り調査区西壁（東から）

図版2　青葉山遺跡E地点第3次調査断面

PL.2 Cross sections of AOE3

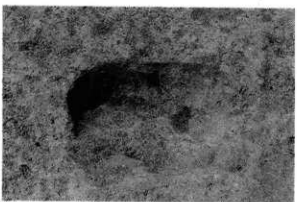
1. 1号竪穴住居跡検出状況（北から）

2. 1号竪穴住居跡完掘状況（北東から）

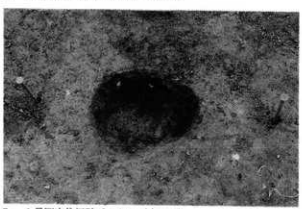
3. 1号竪穴住居跡完掘状況（西から）

4. 1号竪穴住居跡ピット3（北から）

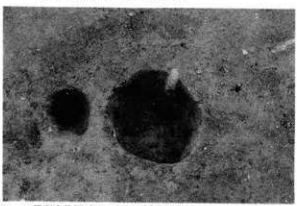
5. 1号竪穴住居跡ピット8（北から）



6. 1号竪穴住居跡ピット9（北から）



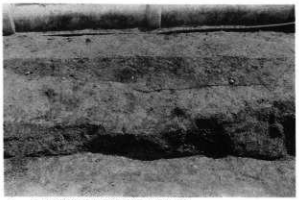
7. 1号竪穴住居跡ピット11（南から）



8. 1号竪穴住居跡ピット12（南から）

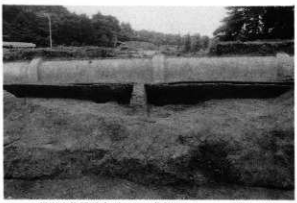
図版3　青葉山遺跡E地点第3次調査検出遺構(1)

PL.3 Features of AOE3(1)



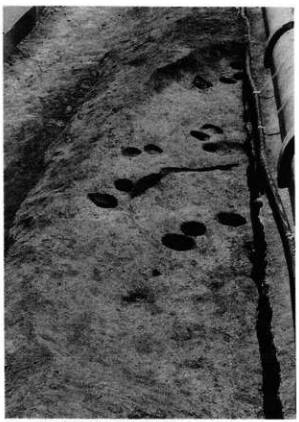
1. 2号竪穴住居跡検出状況（北から）

2. 2号竪穴住居跡ピット2・3・4（南から）



3. 2号竪穴住居跡東西ベルト北側セクション（北から）

4. 2号竪穴住居跡南北ベルト西側セクション（西から）



5. 2号竪穴住居跡北側（西から）

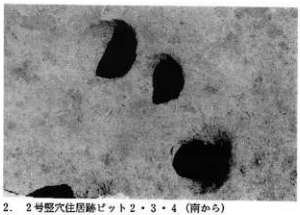
6. 2号竪穴住居跡埋土2層土器片出土状況（北から）

7. 2号竪穴住居跡ピット12石器出土状況（南西から）

図版4　青葉山遺跡E地点第3次調査検出遺構(2)

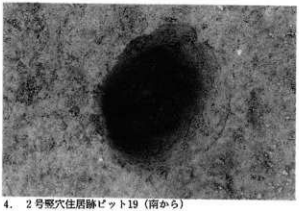
PL.4 Features of AOE3(2)

1. 2号竪穴住居跡ピット1土器片出土状況（北から）

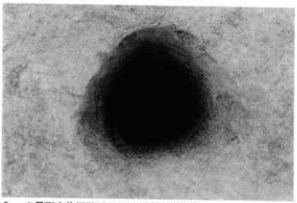


2. 2号竪穴住居跡ピット2・3・4（南から）

3. 2号竪穴住居跡ピット5・6（北から）

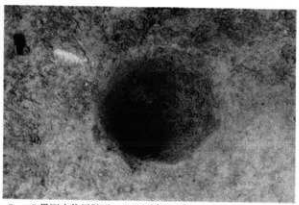


4. 2号竪穴住居跡ピット19（南から）

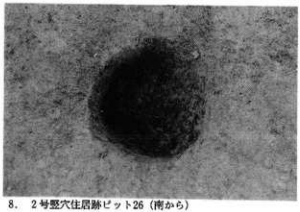


5. 2号竪穴住居跡ピット21（南東から）

6. 2号竪穴住居跡ピット22（東から）



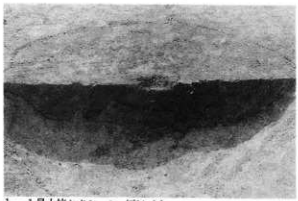
7. 2号竪穴住居跡ピット24（南から）



8. 2号竪穴住居跡ピット26（南から）

図版5　青葉山遺跡E地点第3次調査検出遺構(3)

PL.5 Features of AOE3(3)



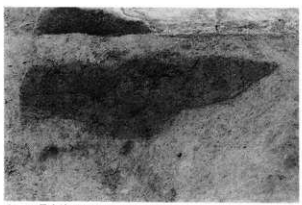
1. 1号土坑セクション（東から）

2. 1号土坑完掘状況（北東から）

3. 4号土坑セクション（南から）

4. 4号土坑完掘状況（南から）

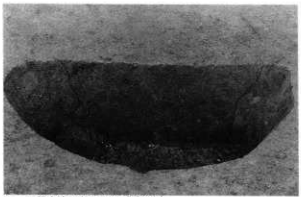
5. 6号土坑完掘状況（南から）



6. 10号土坑セクション（北から）

図版6　青葉山遺跡E地点第3次調査検出遺構(4)

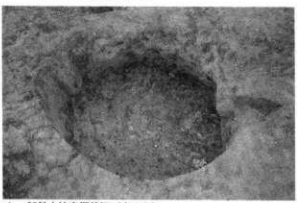
PL.6 Features of AOE3(4)



1. 15号土坑セクション（西から）

2. 15号土坑完掘状況（南から）

3. 25号土坑セクション（南から）

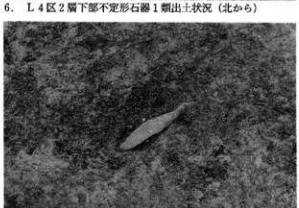


4. 25号土坑完掘状況（東から）

5. M 4 区 2 層不定形石器出土状況（東から）

6. L 4 区 2 層下部不定形石器 1 類出土状況（北から）

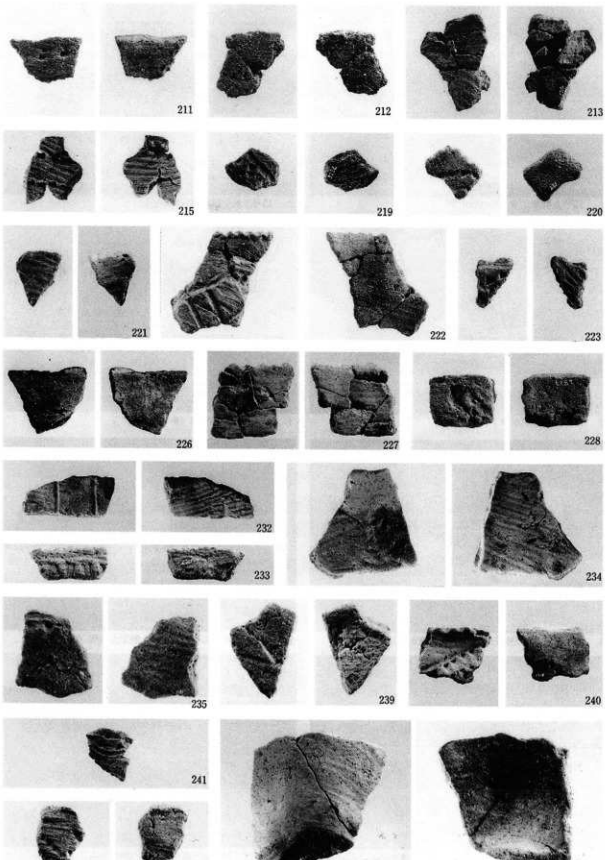
7. M 3 区 2 層下部不定形石器出土状況（東から）



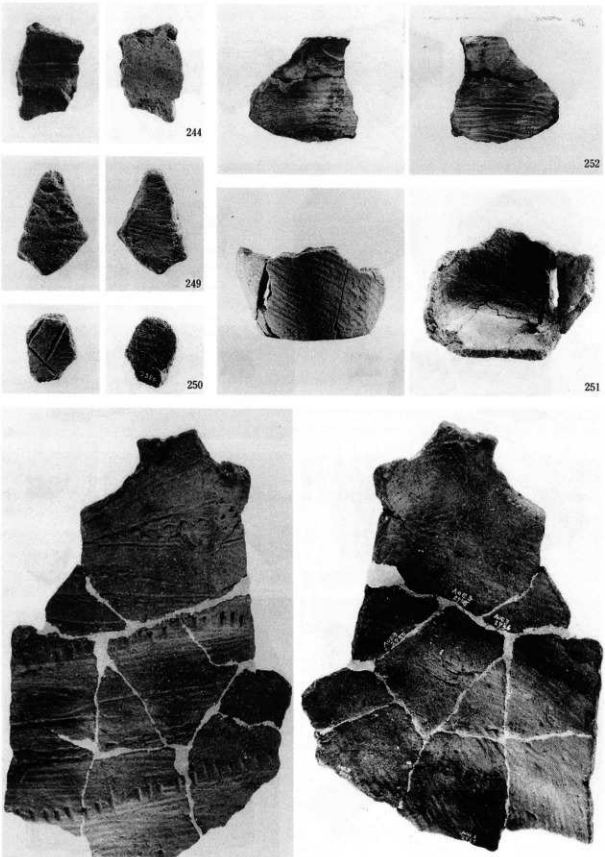
8. L 6 区 2 層下部石匙出土状況（南西から）

図版 7　青葉山遺跡 E 地点第 3 次調査検出遺構(5)・遺物出土状況

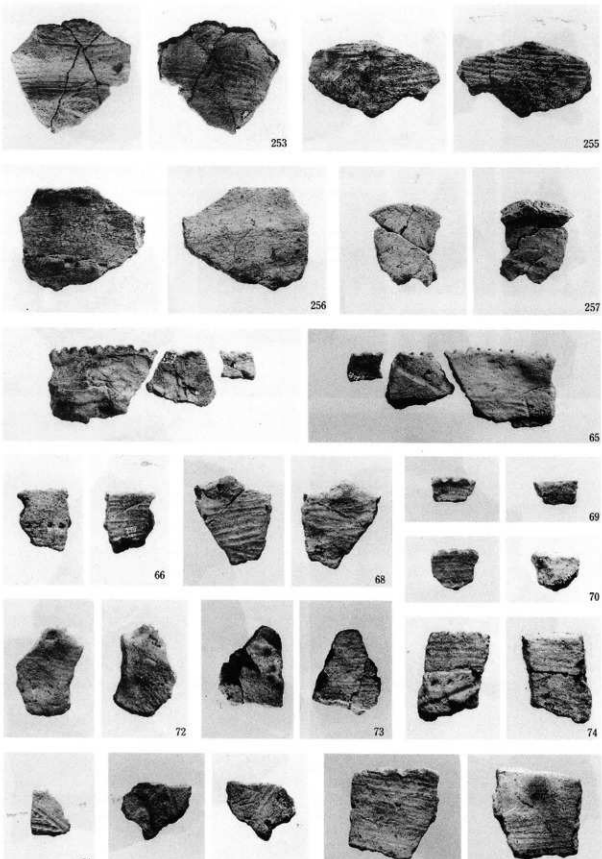
PL.7 Features of AOE3(5) and views of stone implements in Layer 2



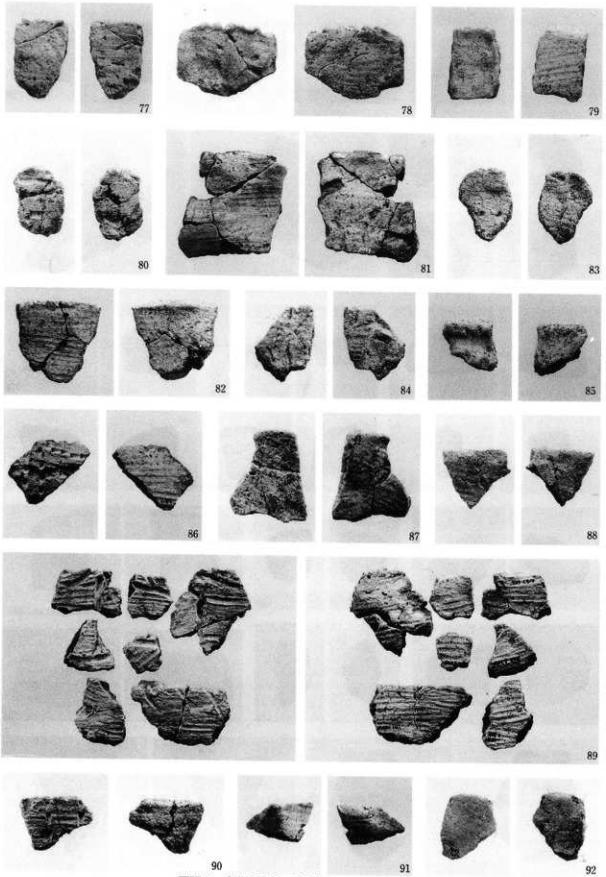
図版 8　青葉山遺跡 E 地点第 3 次調査出土土器(1) 1、2 号住居跡　(Scale　1：2)
PL.8 Pottery from AOE3(1)



図版 9　青葉山遺跡 E 地点第 3 次調査出土土器(2)　2 号住居跡
PL.9 Pottery from AOE3(2)　(Scale 1 : 2)

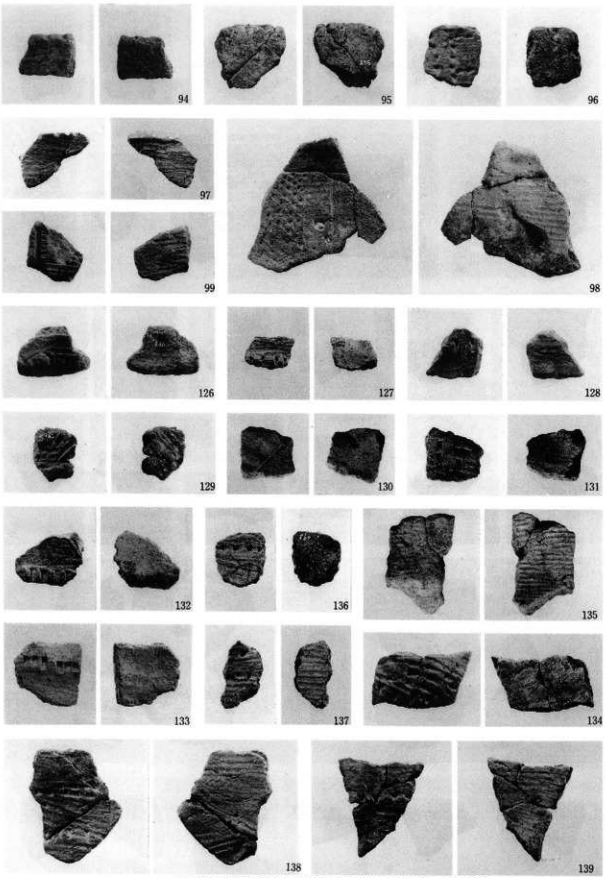


図版10　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(3)　土坑、ピット、2層下部
PL.10 Pottery from AOE3(3)　(Scale　1：2)

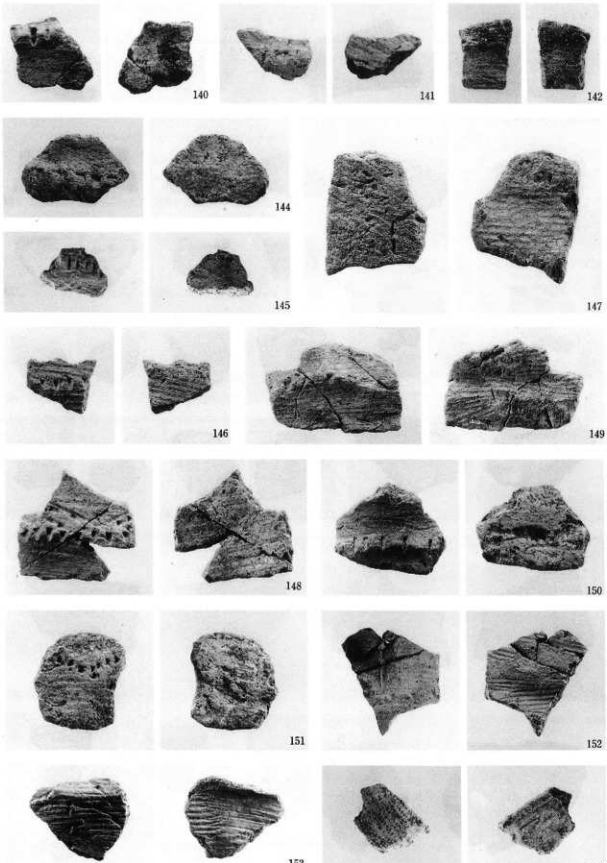


図版11　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(4)　2層下部

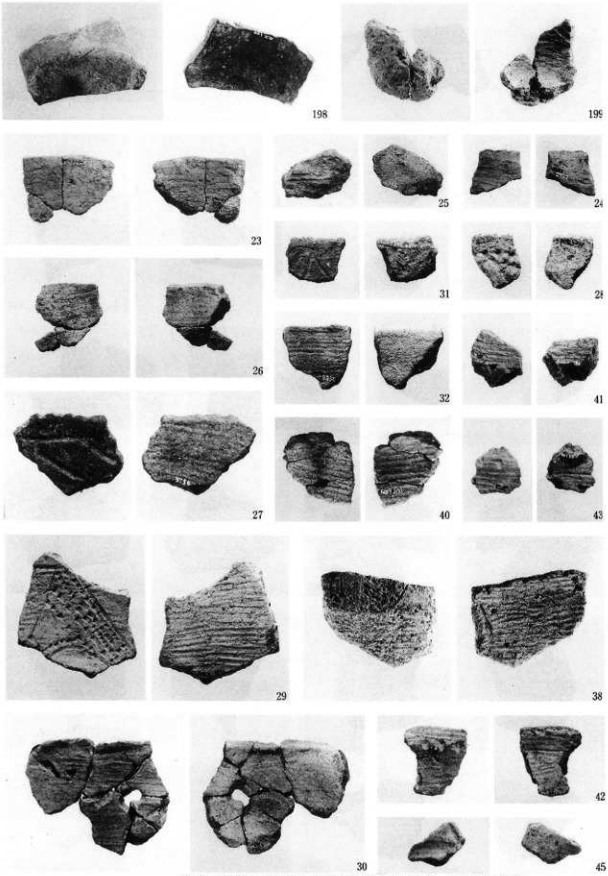
PL.11 Pottery from AOE3(4)　(Scale　1：2)



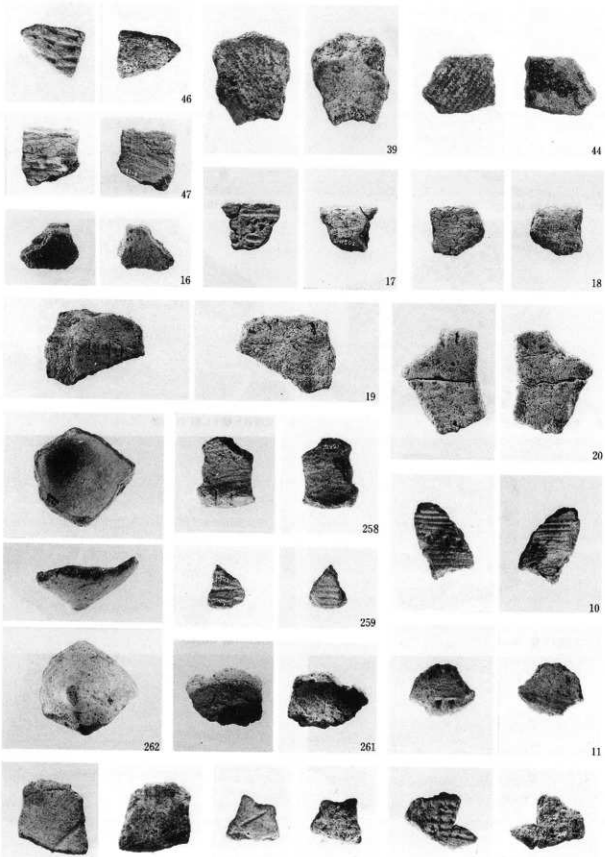
図版12　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(5)　2層下部
PL.12 Pottery from AOE3(5)　(Scale　1：2)



図版13　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(6)　2層下部
PL.13 Pottery from AOE3(6)　(Scale　1：2)



図版14　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(7)　2層下部、2層
PL.14 Pottery from AOE3(7)　(Scale　1：2)



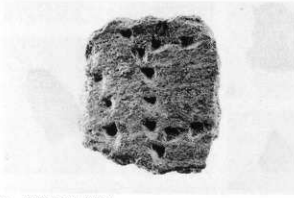
図版15　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器(8)　2層、1層、風倒木跡、層位不明
PL.15 Pottery from AOE3(8)　(Scale　1：2)

1. 文様Aa類 (№222)

2. 文様Ba類 (№98)

3. 文様Bb類 (№29)

4. 文様Bb類+C類 (№242)



5. 文様Db類 (№96)

6. 文様Da類 (№242)

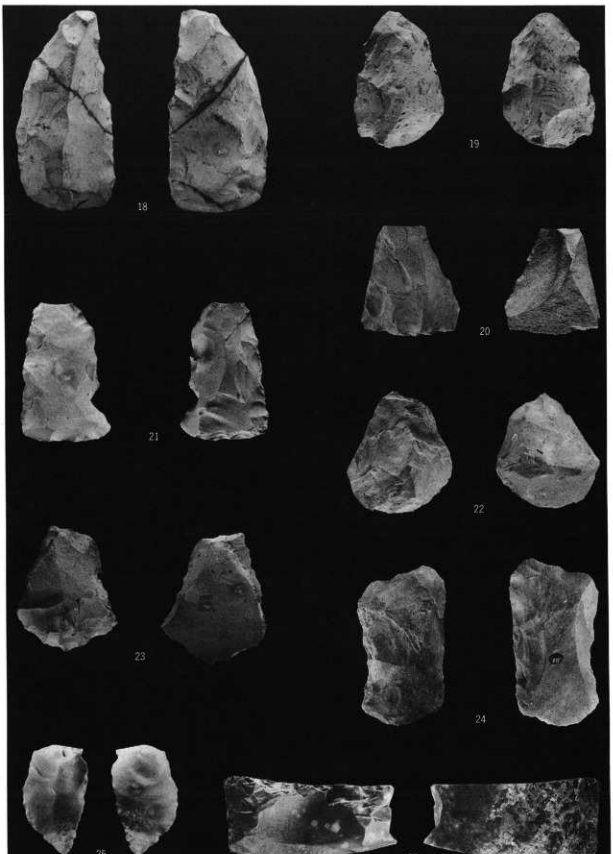
7. 文様Da類 (№256)

8. 貝殻による器面調整 (№29の内面)

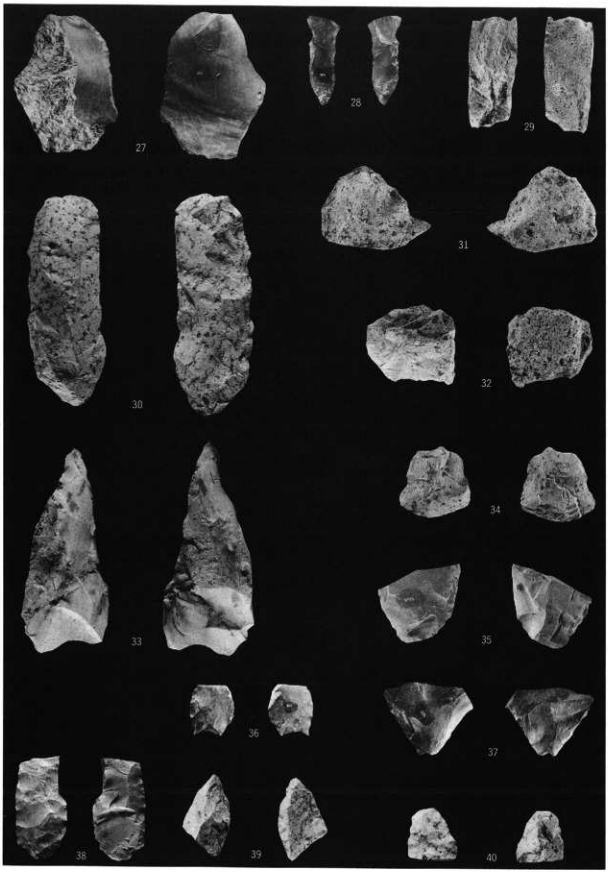
図版16　青葉山遺跡E地点第3次調査出土土器細部

PL.16 Details of pottery from AOE3

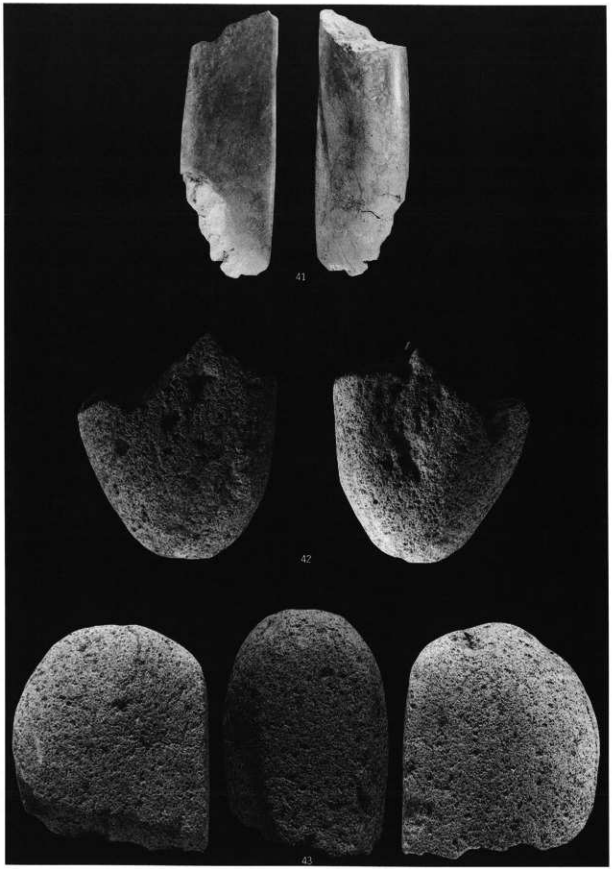
図版17　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(1)　1～7　石鏃　8　石錐　9～13　石匙　14～17　石篦
PL.17 Stone implements from AOE3(1)　(Scale　2：3)



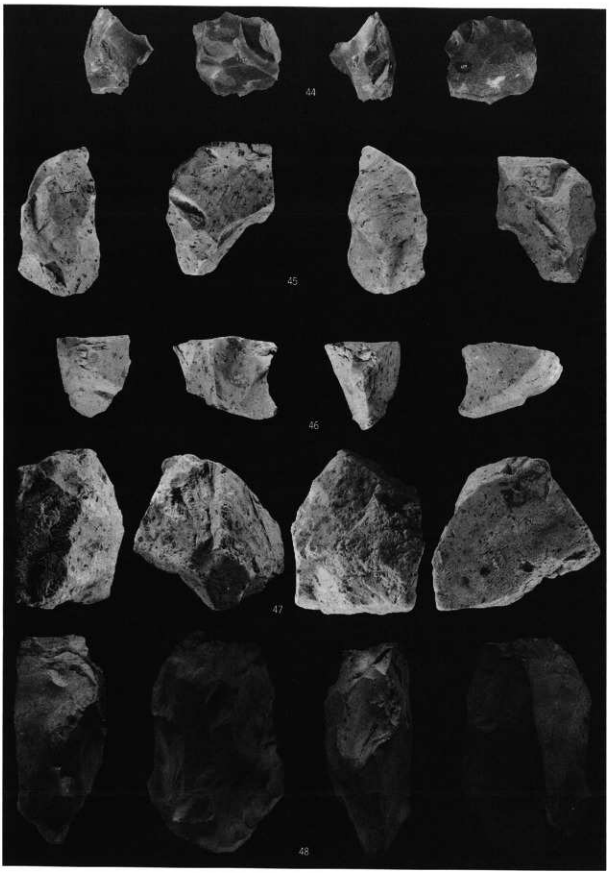
図版18　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(2)　18～24　石鏃　25・26　不定形石器
(Scale　2：3)
PL.18 Stone implements from AOE3(2)



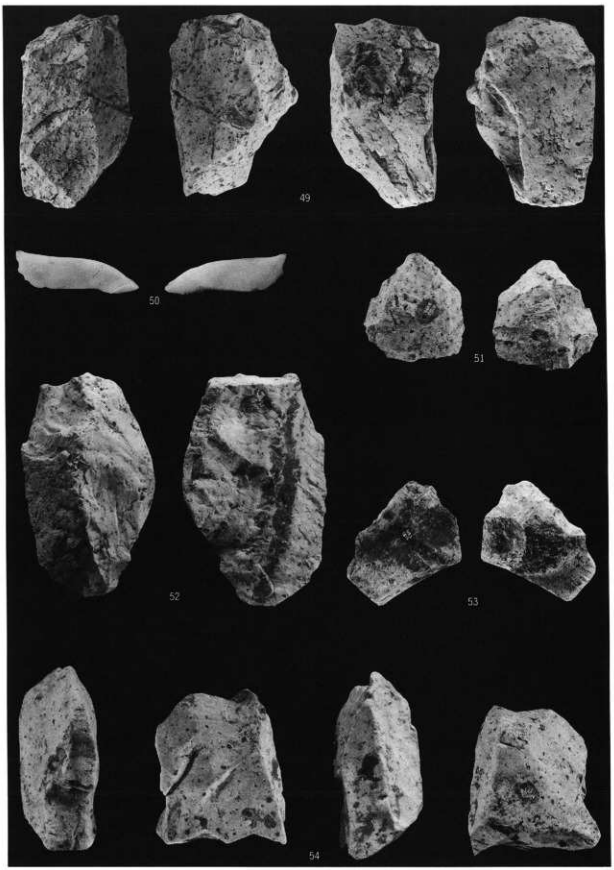
図版19　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(3)　27～34　不定形石器　35～40　破損品
PL.19 Stone implements from AOE3(3)　(Scale　2：3)



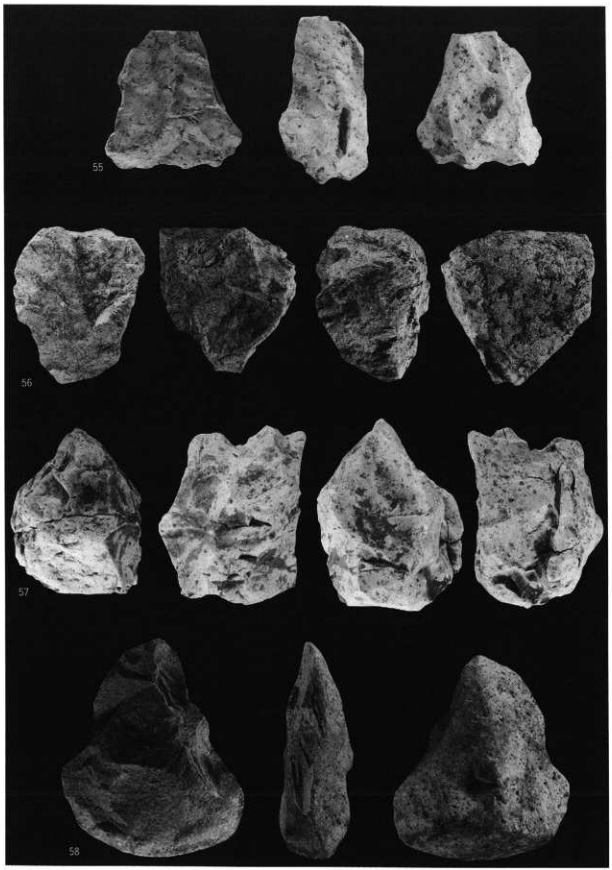
図版20　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(4)　41　磨製石斧　42　凹石　43　磨石・敲石
PL.20 Stone implements from AOE3(4)　(Scale　2：3)



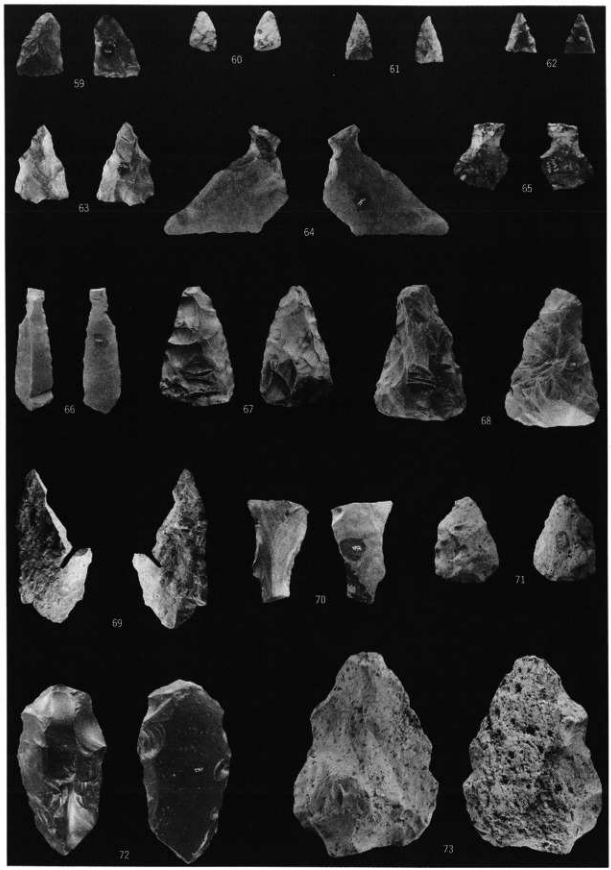
図版21　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(5)　44～48　石核
PL.21 Stone implements from AOE3(5)　(Scale　2：3)



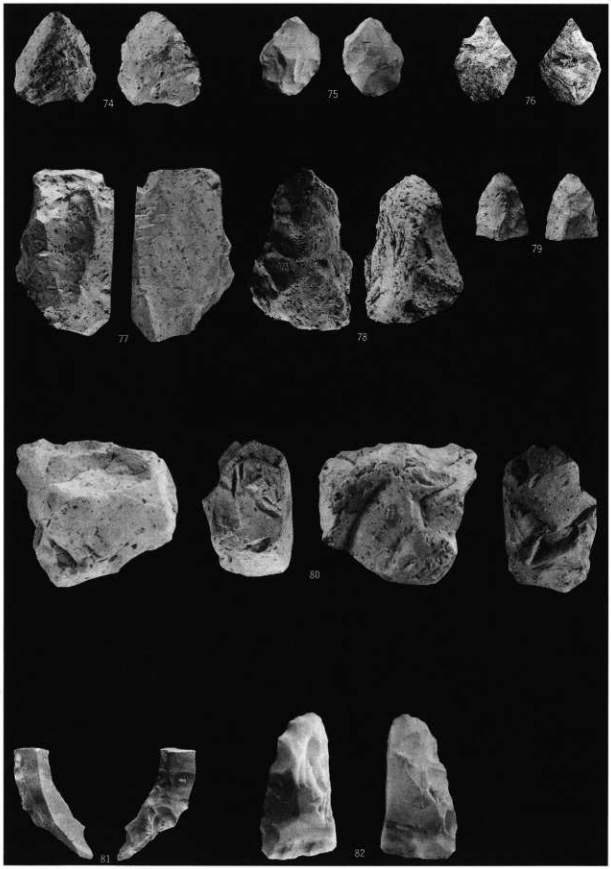
図版22　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(6)　49　石核　50～53　不定形石器　54　石核
(Scale　2：3)
PL.22 Stone implements from AOE3(6)



図版23　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(7)　55～58　石核　(Scale　2：3)
PL.23 Stone implements from AOE3(7)



図版24　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(8)　59～63　石鏃　64～66　石匙　67・68　石錐
PL.24 Stone implements from AOE3(8)　69～73　不定形石器　(Scale　2：3)



図版25　青葉山遺跡E地点第3次調査出土石器(9)　74～78　不定形石器　79　破損品　80　石核　81　石錘
PL.25 Stone implements from AOE3(9)　82　石匙　(Scale　2：3)

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	12
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	須藤 隆・藤沢 敦・関根達人・奈良佳子・玉橋さやか・池谷考史
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1 1 TEL 022-217-4995
発行年月日	西暦1999年 3月 29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
青葉山遺跡 E地点	宮城県 仙台市 青葉区荒巻 字青葉	04100	01443	38° 15′ 17″	140° 50′ 25″	1994. 3.17～10.24	1862	理学部標本館建設
仙台城跡	宮城県 仙台市 青葉区川内	04100	01033	38° 15′ 14″	140° 51′ 28″	1995. 3. 1～ 3.24	70	縄境整備（外灯設置等）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
青葉山遺跡 E地点 第3次調査	集落跡	縄文時代早期 縄文時代晩期 平安時代	竪穴住居跡2棟 土坑10基 ピット約100基	縄文土器・石器 土師器	縄文時代早期後葉の遺物約4000点と同時期の竪穴住居跡2棟を検出。「青葉山E式」を提唱。
仙台城跡 二の丸跡 第15地点	城館	近世			近世の遺構・遺物は発見されなかった。

東北大学埋蔵文化財調査年報12

平成11年3月29日

発行　東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980 8577　仙台市青葉区片平2丁目1－1
東北大学遺伝生態研究センター内
TEL　022 (217) 4995

印刷　今野印刷株式会社
TEL　022 (288) 6123